
魔法少女リリカルなのは～とある転生者の戦闘記録～

ジェナス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜とある転生者の戦闘記録〜

【Nコード】

N0836S

【作者名】

ジェナス

【あらすじ】

神の娘のミスでいきなり転生することになった主人公がリリカルなのはの世界へ行くお話です。

あと主人公というか転生者は全員超チートです。

そういうものが嫌いだという方はお戻りください。

プロローグ（前書き）

今回はプロローグです。台詞について、「」は人、『』はデバイス、通信♡♡は念話という形になります。なお今回主人公の台詞を自と表していますが、次回から当に変更させていただきます。

プロローグ

はい、僕は上条当麻です。はい？どこかの不幸少年と同じ名前だった？仕方ないじゃん。

たまたま、上条って苗字で当麻って名前を両親が付けたんだから。ちなみに職業はフリーのボディガードをしているよ。

もちろん、右手には幻想殺しなんてないし、知り合いにツンデレールガンなんていないよ。

でも、なぜかあつちなみに不幸なんだけどね。

で、急に話が変わるけど、今僕はなぜか窓のないビルの中にいます。しかも、目の前には土下座をしている女性がいます。

自「あのーどうして土下座をしてるんですか？」

女「えーっと素直に言うとなあなたは死にました。」

すると、土下座をした女性が顔を上げた。するとそこには。

自「えー！なんでここに神裂が？．．．．え？死んだ？」

神「はい、そのことについて説明しますので、こちらにきてください。」

自「はい。」

そういうと、僕は神裂について行った。あれ、此処どこかで見たことがあるような？

しばらくして、次はバイオポットの様なものがある部屋に着いた。

自「えつとここどこ？」

？「ここは天界だよ。」

そう答えた者は男にも女にも、子供にも老人にも、聖人にも囚人にも見える存在だった。

つまり、アレイスター＝クロウリーだった。

自「なんで？アレイスター？・・・え、天界？で、アンタ誰？」

ア「君はいちいち突っ込みを入れないと気がすまないのかね。で私は神だ。」

自「はいはい、厨二設定はいいから。本当のことを教えてよ。」

ア「だから、神だと言っているだろう。」

自「マジ？」

ア「真剣と書いてマジと読む。」

あ、マジ恋ねアレは良かったよね。うん特にワン子が。

自「そういえば、さっき此処が天界ってきいたけど。天界って雲の上とか真っ白な空間じゃないの？」

ア「それは君が上条当麻だからだ。上条当麻って言ったら禁書目録だしその中で神っばいって言ったらアレイスターじゃん」

自「ふざけんな。名前だけでその人物を判断するならその幻想を打

ち殺す！」

まあ、とあるシリーズは好きんだけどね、特にツンデレールガンが一番だよな。

え、イン何とかさんはどうなんだって？無理だね少し子ども過ぎるから。

え、年齢はまり変わらないだって？ふざけんな！精神年齢が違うんだよ精神年齢が！

それに、絶対能力進化計画のときの鉄橋の上で泣いてる美琴を見たら

ア「あの〜もうそろそろ説明したいんだが。」

自「待ってる！」

ア「はい。」

続きを言うぞ！絶対能力進化計画のときの鉄橋の上で泣いてる美琴を見たら誰だって

「御坂美琴とその周りの世界を守る。」って言いたくなるって。それに、

ア「真剣で時間がないんだが。」

自「まだそのネタ使うのね。で何？何で俺ここにいるの？」

ア「てんどんは基本だ。さっき天使が言ったように君は死んだんだ。」

自「あれ天使なんだどうせなら大天使エロメイドのコスプレさせろよ。神裂なんだからさ。」

ア「私もそう言ったんだが、唯閃食らわされた。」

自「ドンマイ。でやっぱ俺はG o t o H e l l ？」

ア「なぜ政宗様？」

自「俺の趣味は広く浅いぜキラ それに、俺は誰かを守るためとはいえたくさんの人間を殺してきたからな。それにアイツとの約束も守れなかったしな。」

ア「いきなりシリアスにするな。」

自「いいじゃん厨二何だし。」

ア「自分で認めたよ。だが、君は地獄にも天国にも行かない。」

自「へえ、ならグレートsp「地獄も天国もその一つのコミュニケーションだろ

ちえ、なら、ソウルs「違う。」それじゃあどこ？」

ア「転生だ。」

自「P a r d o n ? マジ？」

ア「しん「それはもういいから！」最後まで言わせてくれてもいいではないか。」

自「つかなんで、俺何もいいことしてないし。まさか！アンタのm「それはない！」なら真剣で何？」

あ、使っちゃったよ。まあいいか。

ア「おぬし、本当にいいことはしておらぬと思っているのか？」

あ、いきなり神っぽくなった。

自「ああ、最低でも3桁は殺ってるし、約束も守ってないし。」

ア「それなら、おぬしの最後の瞬間を思い出してみるのじゃ。」

そういうときいきなり目の前にウィンドウがでてきた。マジであのビルの中みたいだな。

そこは、自爆テロが毎日頻繁に起きている中東のある国の朝市だった。

俺はそこに査察に来ていた日本人の官僚の護衛として雇われていた。そして予想どおりに小規模な自爆テロが起きた。

俺は官僚を連れて安全地帯まで非難したが、目の前には小さな子ども達が、興味津々みたいな感じで

怪しい車に近づいていった。そして俺は嫌な予感がした。官僚を仲間たち（4人いた）に任せ

その子ども達を非難させるために走った。そして目の端で銃を子ども達に向けるのが見え、

すぐに進路を変えその人間の心臓を止め、安堵したが、さっきの車が子ども達の前で止まり、ボールを渡した。

それを子ども達は喜んで拾いサッカーを始めたが再び嫌な予感がして、走り出してそのボールを奪って

子ども達から離れて誰もいない建物の中に入るとそこで、俺の体は2桁の塊にわかれた。

ア「ほら、いいことしておるだろう。」

自「おい、あんたちゃんと見たか、あの時だけで俺は仕事のために何人も見殺しにして、1人の人間の命を直接奪っているんだぞ。」

ア「だが、その後8人の子供を救っただろ？」

自「ただの偽善だ。」

ア「それに、あの中には神になるための修行で人間界に勉強させに行ったわしの子どももいたんじゃないよ。」

自「おい、テメエまさか、自分の子どもがいたから俺を転生させようと思ったんじゃないだろうな。」

ア「そのまさかじゃ。」

自「ふざけんな！俺は自分の行動が原因で死んだからいいが、世界には理不尽に死んだ奴らもいるんだぞ、そいつらを転生させろよ！」

ア「そうか、ならおぬしは転生しなくても良いというのか？」

自「ああ、かまわねえ。」

ア「フッフッフハハハハハハ！」

なんだ、コイツいきなり笑い始めて神の癖に精神不安定なのか？

ア「すまぬな、いきなり笑い出してしまい。やはり、転生させるのは君が一番だな。」

自「おい、俺よりも他の奴らを「嘘じゃよ」「え?」

ア「さつきワシがいったことは嘘だということじゃ。」

自「どういうこと?」

ア「よく考えてみるが良い。仮にも神であるワシの子どもじゃぞ。あんな爆弾ごときで死ぬわけがなかるう。」

自「言われてみれば。それじゃあなんで俺は転生されるんだ?」

ア「それはなミスじゃ。」

自「でもさつきm「ワシではなくワシの馬鹿娘じゃ」「え?」

ア「さつき神裂の格好をしとったヤツじゃ、おい、いつまで隠れるのじゃ早く出てこんか!」

娘「はい、父上。」

あれなんで美琴?

娘「さつき私のことが好きって言ってたじゃない。なに?もう心変わり?」

自「勝手に心を読むな!でコイツがどうしたの?」

ア「こいつが神裂の真似事で唯閃をしとったらおぬしの寿命の帯を切ってさらにばれないように適当に他の帯を繋げたのじゃ
しかもその帯がただの帯なら良かったんじゃが、ワシが遙か昔に封印した闇を閉じ込めておった物を使ってしまったんじゃ。」

自「へえ、でその闇をどうにかするために俺を転生させると?」

ア「いや、その闇はまたワシが封印した。」

自「んじゃなんで?」

ア「さっき言った帯びを繋がれるとその人間は強制的に転生してしまうんじゃよ。ただしワシが認めたものだけじゃがな。」

自「認められなかったら?」

ア「永遠に闇と一緒に封印される。」

自「で俺は認められたと?」

ア「そうじゃ、ちなみにもう2人ほどおるぞ。」

自「そいつ殴っていい?」

娘「好きなキャラを殴れるの?」

自「う、それならお前の弱点と思われるところをこつしてやる。」

そしておれは美琴の姿になった神の娘のうなじの中心を押してみる。

娘「にゃあああああああああああ」

あ、やっぱ人間ソナーの弱点ってここだったのね。

ア「それぐらいで許してくれないか？一応それでもワシの娘じゃから。」

自「それじゃあ俺はどこへ何に転生するんだ？」

ア「それはリリカルなのは世界じゃ。」

自「真剣？」

ア「さきに使われたorzもちろんチートもありじゃ」

自「なんかテンプレな気もするが、それってどんなアニメの技や力でもあり？」

ア「ありじゃ」

自「それなら、幻想殺しとゲットバツカーズの美堂蛮の技全てと写輪眼と万華鏡写輪眼の天照に神威と仮面ライダーWの地球の本棚とガンダムOOの刹那のイノベーターとしての脳量子波さらにFat eのアンリミテッドブレードワークスにゲートオブバビロンとシャーマンキングの超・占事略決を頼む。あと魔力はSSS+以上魔力とは別に巫力は完全版でシャーマンキングになった八才と同じくらいで

さらに、体力及び筋力は最強にね。」

ア「なんかさっきの2人以上に厨二じゃな。」

自「褒めても何もでないぜ。」

ア「そういえば召喚獣とかはいいのか？」

自「良いの！なら遊戯王5D・Sのスターダスト系全て！あと天照と神威は記憶からなくしてくれ、そしてアンタが必要だと判断してから使えるようにしてくれ。」

ア「別にいいがなぜじゃ？」

自「自分の力を過信してたら守りたいものが守れなくなるから。」

ア「そういうことが。で、デバイスはどうするんじゃ？」

自「1つは、種シリーズのストライクをバリジャケ風にしてのちに改良も可能できるようにして欲しい、もう1つはさっき言ったチート能力専用のデバイスで起動時は日本刀さらにバリジャケはアーチャーで。さらに両方ともインテリジェントデバイスでお願い。」

ア「了解した。で名前はとうする？」

自「ストライクの方はそのままストライクハートで日本刀は春雨で頼む。」

ア「了解した。なんか3人とも綺麗に誰のサイドに行くのか別れたな。」

自「え、なぜ分かった？」

ア「それはデバイスの名前で分かるじゃろ、ちなみにデバイスの方は転生後に渡すからな。あと転生後はちゃんと赤ん坊からになるからな。」

自「へ？」

神がそう言うといきなり俺の足元に大きな穴が開き俺はそこに落ちていった。あ、これも、テンプレだね。

プロローグ（後書き）

当「おい、作者！なんでプロローグなのに4ページもあるんだよ！」

作「アレでも減らしたんだぞ！」

当「何をだ！」

作「君の能力だ！」

当「あれでか？」

作「そうでもない可他の2人の能力がなくなるんだよ。」

当「あつそ。でその2人の能力は決まったのか？」

作「うんにゃ、まだだよ」

「

当「設定作ってから書けよ！」

作「大丈夫だよ大体の輪郭は出来てるから。」

当「ならいいが、でその二人はいつ出るんだ？」

作「いや、大体分かるだろ。」

当「まさか、……3人目乙」

作「そういうこと。」

当「で次回はどうなるんだ？」

作「多分、主人公設定だと思う。」

当「そうか、わかった。

ではコレを読んでくださった皆さん。こんなダメ作者だが応援して
やってくれ、あと感想待ってるぜ。」

作「これからよろしくお願いします。」

無印編主人公設定

上条当麻（転生後ある理由で高町家に引き取られ高町当麻になる。）

年齢 なのはと同年（転生前21歳）

誕生日 3月14日

魔力ランク S（年齢と共に上昇予定）

魔力光 黒

レアスキル

地球の本棚

この本棚には、ほぼ全ての地球の出来事が入っており、「地球の記憶」と呼ばれ、本の形で当麻の脳内に莫大な数でデータが収まっている。この本棚にアクセスする事で事件に関連している「KEYWORD」からその言葉に関連している資料、文献、由来を検索し事件のヒントを探り当てる。インターネットで同じくキーワードを元にWEBサイトに記されている語句を絞り込み探す「検索エンジン」と理屈は同じ。一つのキーワードに他の語句を付け足す事で検索対象を狭める。

本棚は記された語句が増える事に本棚と本は減り、最終的に検索キーワードが記された本棚の中の1冊にたどり着く。

幻想殺し

どんな魔法も右手で触れると打ち消す。ちなみに砲撃や魔力変換での攻撃は右手以外のところに当たるとダメージをつける。

しかし、幻術など当麻全体を対象する魔法はきかない。禁書目録本

編とは違い能力のON・OFFはコントロールできる。

脳量子波

相手の思考を読み取る事が出来たり、驚異的な空間把握能力を生む。

邪眼

一分間の幻術を見せる。しかし、24時間で三回しか使えない、また同一人物に対しては一回しか出来ない。

写輪眼

みた技をコピーできる。しかし、希少能力は無理。

万華鏡写輪眼

天照

視界に捕らえたものを黒い炎で燃やし尽くす。

神威

視界に捕らえた空間を捻じ曲げてどんな技や物でもぶち壊す。
しかし、発動までに時間がかかりそこを狙い撃ちされると案外きつい。

上記の万華鏡写輪眼は当麻自身が神に頼み封印をもらっている。

備考

転生前はある人とした2つのうち1つの約束として誰かを守るため、フリーのボディガードをしていた。

私生活では広く浅い趣味をもつヲタクである。（作者と同じ）

使える魔法は基本はなのはと同じだが写輪眼のおかげで一度見た魔法はレアスキルでなければ再現可能。

容姿はゲットバッカーズの美堂蛮の幼少期。
声は進藤尚美

デバイス

ストライクハート

インテリジェントデバイス

設定人格 女性

バリアジャケットは種の地球連合のキラの制服に両肘、両膝までの部分と胸から首元までがストライクの装甲に覆われている
モード

エール

近中距離高速戦闘型であるがフェイトほどの速さはない。
基本的にシューターとライフルでの中距離戦闘を主体とする。
この状態でもバスターなどの砲撃も放てるがランチャーと比べると威力は劣る。

ソード

身の丈ほどの長刀による近接格闘戦型。
パワーを活かした近接格闘を主体とする。
斬撃を飛ばす事は可能。

ランチャー

強大なバズーカーによる長距離砲撃戦型
こちらにもシューターと一緒に使う事を主体とするが、エールほどの

速さはないので

おもに敵への牽制のために使っている。

バスターはこちらの方がエールとくらべると数倍威力が高い。

性格は陽気であるが弄り過ぎると周りの人間に泣きつく主に当麻であるが当麻にいじられると春雨に泣きつく事が多い。

簡単にいうとスズノネセブンの九条要である。（知らない人は調べてねキラ！）

声はそのまま、風音様。

春雨

インテリジェントデバイス

設定人格 男性

バリアジャケットはアーチャーの服装の黒版

モード

ムラマサ

日本刀や馬孫刀などになる。

主に魔法以外の力の中でオーバーソウルなどの刃物を使うときに使う。

アンリミテッドブレードワークスやゲートオブバビロンなど例外あり

シュバルツ

右手にリストバンドになってくつついている。

主に魔法以外の力のなかでスネークバイトなどを使うときに使う。

またアンリミテッドブレードワークスやゲートオブバビロンはこの

状態で使う。

性格はアーチャーそのままストライクに泣きつかれることもあるが基本的には突き放す。

声は諏訪部順一

使役竜

スターダストドラゴン

言わずと知れた5D・Sに出てくる主人公のエースモンスター
攻撃力が凄い。

セイバースタードラゴン

スターダストの進化系

攻撃力はスターダスト以上

シューティングスター

同じくスターダスト系の進化系

攻撃力はセイバー以上

幻術も使える。

ユウヤ・ブリッジス（転生後はプロジェクトFによってフェイトと共に生み出され、ユウヤ・テストロッサとなる。）

年齢 フェイトと同じ（転生前21歳）

誕生日 5月28日

魔力ランク S（年齢と共に上昇予定）

魔力光 青っぽい白（イメージとしては御坂美琴の電撃の色）

レアスキル

ギアス

ルルーシュと同じ王の力でその目で見つめながら命令すると必ず聞かす事が出来る。

SEED

機動戦士ガンダムSEEDのキラ・ヤマトの同じで発動すると驚異的な瞬発力と空間把握能力を発揮する。

備考

転生前は当麻と同じフリーのボディガードだったが当麻が死んだ日別の自爆テロに巻き込まれ死亡した。

一応当麻の影響でいろいろなアニメの知識はある。使う魔法は基本はフェイトの魔法を五元素それぞれに変換して使える

見た目はゲットバツカーズの天野銀次の幼少期。

声は白石涼子

デバイス

バルウイング

インテリジェンスデバイス

男性

モード

イージス

バリアジャケットはザフトの赤服にイージスの装甲を胸部、肘、膝、に展開した感じ。

このモードでは近中距離戦闘を主体にした戦法を取る。ストライクのエールフォームと同じ

デュエル

バリアジャケットは装甲で覆われている部分がデュエルのものになる。

ストライクのソードフォームと同じ戦法を取る。

アサルトシュラウドを展開すると火力が大幅に増加する。

バスター

バリアジャケットは装甲で覆われている部分がバスターの装甲に変わる。

ストライクのランチャーと同じ戦法を取る。

二つのライフルを合体させることによってランチャーのよりも大威力の砲撃が打てる。

性格はバルディッシュとほぼ同じだが、時々キャラが崩れる。

声は石田明。

暁

インテリジェンスデバイス

女性

バリアジャケットはディーグレイマンのエクソシストの制服

モード

斬月

見た目は斬月そのまま。

このモードではブリーチに出てくる死神の全ての技が仕える。

クラウン

左手にリストバンドとしてついている。

このモードではナルトに出てくる忍術が使える。

性格は楽しい事だったら何でも大好きな性格

もちろん、マスターであるユウヤの事もからかうことも大好きである。

声は進藤尚美

使役竜

レッドデーモンズドラゴン

スターダストと同じく遊戯王5D・Sにでてくるドラゴン

セイヴァーデモンドラゴン

レッドデーモンズの強化竜

スカーレットノヴァドラゴン
最強のパワーを誇る竜

無印編第一話 転生後の世界と出会い（前書き）

はい第一話です。疲れた
。

では、本編をどうぞ。

無印編第一話 転生後の世界と出会い

はい、俺は山にいます。そして、なんと転生後の両親がなんと、上条刀夜と上条詩菜だった。

まあ、あっちでは俺が生まれてすぐに母さんは病気で死んで、父さんは仕事で殉職しているからあまり記憶がないんだけど、

詩「あら〜当夜さん。また他の女性にフラグを立てたのですね〜。」

刀「いや、母さん、これは何かの間違いだ。」

詩「そうですか？ならなんであの人達はさっきから刀夜さんのことを顔をすこし染めて見つめているのですか？」

刀「いや、なんでだろうな。」

はあ、父さんいくらなんでも崖から落ちそうな人を助ければフラグ立つつて。

ちなみに、俺は2人の痴話喧嘩(?)を見ています。

え、今俺が何歳かって、4歳だよ。え生まれてからの事を教えるだつて？ふざけるなあれはホント黒歴史なんだから。

他の転生主人公の気持ちかわかるよ。うん、今思い出すだけで鬱になるよ。

詩「刀夜さん？少しO H A N A S H I しましょうか。」

アレ、何でだろう目の前に白い悪くいえごめんなさい母さんその目でこっち見ないで一応俺子どもですよ。

？「やあ、当麻元気そうじゃな。」

当「この声は神か？」

神「そうじゃ。」

当「で、何？」

神「お主のデバイス、春雨が出来たから渡そうと思ってな。」

当「おい、いきなりかよ！」

神「仕方ないじゃろ、こっちもいろいろと忙しいんじやから。」

当「で、どうやって渡すの？」

神「そこに、桜並木があるじゃろ、その一番奥の桜の枝に引っ掛けておくから取りに行くのじゃ。」

もちろん、お主以外には見えぬようにしておるから安心せい。」

当「了解。」「お母さん、僕、あっちの桜見てくるね。」

詩「ええ、いいわよ。」

刀「助けてくれ当麻。」

詩「子どもに助けを求めない！」

うん、父さんががんばって。生きてたらまた会おう。
そして、俺は神が言っていた場所に着いた。

そして見上げると、春雨があつた。が、おい、もう少し取りやすい所に置けよ。

それは今の俺では届かないところにあつた。
はあ、しかたねえ

当「ハッ！」

ジャンプ一番つてこういうことを言っんだな。
俺は普通に飛んで春雨をもった。

春「初めましてだな。主」

うお！諏訪部さんボイスだ。神も少しいいところあるじゃん。

当「ああ、よろしくな。春雨。そういえばストライクは？」

春「それは、もう少ししてから渡すと言っていた。」

当「そうか、なら明日から修行開始だな！」

春「そのとうりだ。ビシビシ行くぞ！」

当「え、春雨が教えてくれるの？」

春「ああ、いくら技や力がどういうものか分かっていても戦略がないと意味がないからな。

それに、主のレアスキルとの相性も知りたいからな。」

当「わかった。」

ちなみに俺は今く地球の本棚> <脳量子波> <邪眼> <写輪眼>を使いこなせる。

ちなみに、邪眼は幼稚園の俺をいじめてくる奴らにつかった。まあ翌日から来なくなっただけだね。

そいつらの親も馬鹿なヤツだったから、特に心も痛めてないけど。

詩「おい、当麻く！帰るわよ。」

あ、母さんが呼んでるからいけないと。

あれ、荷物と一緒に何か白いものが・・・って父さん！
母さん何をしたんだろう？しりたくないな。

春雨と出会った翌日俺は昨日の山に修行しに行こうと公園を通りかった。

そこには、1人悲しそうにブランコに乗っている女の子がいた。

当へごめん、春雨修行は明日からにしてくれる。へ

春へあの少女に声をかけるのか？へ

当へうん、なんかほっとけないんだ。へ

春へ父上のようにになるなよ。へ

当へ大丈夫だよ。へ

ちなみに、春雨は昨日家に帰った後、父さんがどうという人間かを父

さんと母さんの痴話喧嘩を見て察したらしい

当「君、どうしたの？」

少女「なんでもない。」

当「1人で寂しくないの？」

少女「寂しくないよ。私は1人で良い子にしないといけないんだもん。」

当「なら、僕も1人だから一緒に遊ぼうよ。」

少女「いいよ。私はもつと強くないといけないんだから。」

当「そうかな？」

少女「え？」

当「別にそんなに急に強くならなくてもいいと思うよ。まだ僕達はまだ子どもだから寂しいときは寂しいって言ってもいいと思うよ。」

少女「でも。」

当「なら、2人で一緒に強くなろうよ。それなら良いでしょ？」

少女「うん！」

当「君の名前を覚えてくれる？」

少女「なのは！私、高町なのは！きみは？」

当「当麻、上条当麻だよ。それじゃあ遊ぼ！」

な「うん！」

そして、これが俺と高町なのはの出会いだった。そして、この時、俺の家族に待ち受ける残酷な運命を知る事はなかった。

無印編第一話 転生後の世界と出会い（後書き）

今回は、初の連続投稿なので後書きはありません。すみません。

無印編第二話残酷な運命そして新しい家族（前書き）

本日二話目です。めっちゃ急展開です。

無印編第二話残酷な運命そして新しい家族

なのはと出会い俺は一日の殆どを外で過ごしていた。まず山で春雨と修行して、その後、なのはと遊んだ。

そんな関係が続いていつの間にか家族ぐるみで仲良くなった。そして、そんな事が続いて一年がたっていた。

春「主、本当になのはに懷かっているな。」

当「まあな。でも、あの父親と兄はどうにかできないのか？」

なのはの父、士郎さんが退院したと聞き、挨拶に行つたときなのはが俺の腕に抱きついていてのを見たたん、

士郎さんとなのはの兄である恭也が木刀をかまえて襲ってきた。

2人とも小太刀二刀御神流の使い手であるので少々やばかったがなのはの母である桃子さんと姉である美由希さんが

2人に O H A N A S H I をしてどうにか止めてくれた。

しかし、俺がなのはの家に行くたびに襲ってくるのである。最近は士郎さんは襲つてこなくなってきたが、

なのはが俺に抱きついてくると恭也さんと一緒に襲ってくる。まあその後は桃子さんと美由希さんの O H A N A S H I があるが。

春「主がなのはにフラグを立てるのが悪いのです。」

当「はあ？俺がいつの間にフラグを立てたんだよ！」

春「はあ、マスターはやはり父上の子どもなんですな。」

何言ってんだ？こいつ今度神に言っでメンテして……………これは

春「主、どうしたのだ？」

当「春雨、一応セットアップの準備だ。この匂いは嫌な予感がする。

」

春「了解した。主」

そして、俺は家に向かって全速力ではしった。

この匂いはまさか、そんなはずはない！こんな日本のど真ん中で、昔よく嗅いだ事のある匂いがするなんて、しかも、家に近づくにつれて強くなるなんて、嫌な予感しかない。

そして家に着きリビングに入るとそこは、

当「父さん、お母さん、どうしたの！」

体を真つ二つにされた父さんと、全身から出血してかろつじて息をしている母さんがいた。

詩「と、当麻、お、おかえ……………」

当「喋らなくてもいいよ。とにかく救急車を」「春雨、治癒魔法を」

春「無理だこれではもう」

当「そんな」

詩「……………うま。こ……………これを」

そういつと母さんは何か白い宝石を俺に渡した。

詩「つ．．．よく．．い．．．きる．．の．．．よ」

そして、母さんは心臓を止めた。また俺は大切な人を守る事が出来なかった。

それから三日後、母さんと父さんの葬式があつた。

父さんも母さんも2人とも親戚がいなかったのでこの一年で親友と呼べるくらいまで仲良くなった高町家の皆さんが葬式やらなにやらいろいろな事をしてくれた。そんな中俺はなのはの家で1人でいた。

春雨Side

春「主、一つ言っておくが、神に対して憎しみを持つなよ。」

当「うん、分かってる。でも、2回も大切な人を目の前で失うと少し気がめいるよ。」

ここで、ヤツが目覚めてくれるといいんだが、まだ目覚めるのは当分先だからな。

春「主、もう一つなのはにあまり心配かけさせるなよ。」

当「ああ、分かってる。」

だめだ、目に生気がない。このままでは闇に落ちてしまう。

どうすれば、

コンコン

すると誰かが部屋に入ってきた。まあ結界を張っていたので会話は聞かれていないと思うが。

ガチャ

入ってきたのはなのはだった。彼女にかけてみよう。
それで、ダメだったら神に頼んで彼女を目覚めさせよう。

なのはSide

事件の後、いろいろあつて当麻君と話す機会がなかったけどようやく話せる。

でも、大丈夫かな目に光がなかったから。

コンコン

私はノックをした。返事はないけど私は構わず入った。

な「当麻君入るね。」

当「うん。」

当麻君はベッドの上に座って月を眺めていた。だけど目に光がなかった。

な「当麻君もしかしてこれから1人で生きようって考えてるの?」

当「え？どうして？」

それは自分の心を見抜かれた顔だった。

な「当麻君、あの時の私の目と同じような目をしてたから。」

当「だめだよ。なのはちゃん。僕のそばにいる大事な人たちは皆いなくなっちゃうんだ。」

だから、近くに来ちゃダメだよ。僕はもう大切な人をなくしたくない。」

な「大丈夫だよ。当麻君私はいなくなるから。」

当「でも。」

な「あの時、当麻君言ったよね、一緒に強くなろうって。私は当麻君が嫌だっけって思ってたけど隣にいるよ。」

そして、私は見てられなくて当麻君を抱きしめた。

当「なのはちゃん。うわああん」

そして、当麻君は私の胸の中で泣き始めた。

当麻Side

俺はわき目も振らずになのはの胸の中で泣き、しばらくして高町家

の皆と一緒に夕食を食べた。

そして夕食を食べ終わったあと、土郎さんが俺に、言った。

土「当麻君。うちの子供にならないか？」

当「え？」

土「もちろん。今すぐに答えを出さなくても良い。」

当「それでも。」

桃「大丈夫よ。誰もあなたのそばからいなくならないからね。もちろん、君がいやだって言ってもね。」

桃子さんそれってさっきなのはが、やっぱり親子なんだな。

な「にや、お母さん聞いてたの？」

桃「さあね。それじゃあ当麻君あせらずにかんがえてね。

あ、聞かれていたのか。でもそんな事より

当「お願いします！僕をこの家のこどもにしてください。」

桃「ええ分かったわ。高町家へようこそ。当麻。」

な「そういえば、当麻君って私と同じ年だけど誕生日っていつなの？」

当「え、3月14日だよ。」

美「へえ、なのはの一日前なんだね。」

な「それじゃあ、当麻君がお兄ちゃんだね!」

当「へ、でも一日しかちがわ「だめなの?」……ダメじゃないです。」

な「やったー」

なのは、上目遣い＋涙目は反則だからって恭也さんに士郎さんなどでそんなに殺気をむけてくるんですか?

桃「それなら、当麻、私たちのことはお父さん、お母さんって呼んでね。」

美「私はお姉ちゃんね。私、弟ほしかったんだ。」

恭「好きに呼べ。」

当「うん、母さん、父さん、お姉ちゃん、恭にい、なのはちゃん」

そして、俺は騒がしくも暖かい家族を手に入れた。

さらに心から何があってもこの暖かい空間を守ろうと思った。

無印編第二話残酷な運命そして新しい家族（後書き）

作「ごめん、当麻」

当「いいよ、もうすんだ事だし。でも、どうしてあんな展開に？」

作「それは、まだ言えないな。」

当「そうなんだ。で、第一話で春雨は出たけどストライクはいつ？」

作「多分次あたりかな。」

当「そうなんだ。」

作「まあ、当分は春雨と一緒に修行するんだな。」

当「うん、そして、もう二度と大切な人をなくさないように強くないと、それに母さんからの遺言でもあるし。」

作「まあ、頑張れよ。」

当「ああ、ではまた次回」

作「感想や意見待ってます。」

無印編第三話 新しい日常（前書き）

ついに、始まったぜ新学年！ここから、俺の時代が……す
みません。調子に乗りました。

では、本編をどうぞ！

無印編第三話 新しい日常

俺が高町家の一員となって一年が過ぎて今は、私立聖祥大附属小学校に通っている。

まあ、入学してすぐになのはと俺はアリサとすずかと出会った。そう、あの喧嘩だ。でもなのは、

「痛い？でも、大事なものを盗られたらもつと痛いんだよ。」

って君、ホントに小学生になったばつかの子どもなの？

ちなみに、俺の成績はもちろんトップだよ。

当たり前じゃん、俺、義務教育二回目だよ。しかも、中学のときから仕事してたんだから、

その差を埋めるためにメツチャ勉強したし嫌でも体力と英語力は付いたんだから。

そのおかげで、俺は高校でもトップだったんだけどね。

？「ちよつと！アンタ聞ってるの？」

当「ああ？ゴメン、ゴメン。ちよつち今までの事思い出してた。」

今、俺に話しかけてきたのはアリサ・バニングスだ。うん、いいね釘宮ボイス癒されるよ。

？「当麻君はなんか私たちと比べると凄い大人っぽいよね。」

そして、この子は月村すずかである。

この2人の家は両方とも凄いお金持ちである。

当「そ、そうかな？」

す「そうだよ。あの時アリサちゃんたちの喧嘩を止めたときだって凄かったもん。」

そう、なのはとアリサが喧嘩していたとき、俺は武力kゲフン、ゲフン2人の間に割って入って2人の脳天に拳骨を喰らわした。教室の端から移動して。その時一秒もかからなかった為、同じ学年の中では有名になってしまったが。

な「なんか、お兄ちゃん、楽しそうだね？」

当「え？」

ちなみに、なのはは俺の事をあの日からお兄ちゃんと呼ぶようになった。

ってか何？そのめっちゃすがすがしい笑顔は？ハイライトが無いですよ。

何ですか？あなたはあk

な「なにかな？お兄ちゃん？」

なんで、高町家の女性はこんなにも怖いんですか？

ア「ホント、アンタはコイツにベタ惚れね。コイツの何処が良いんだか？」

な「ええー？お兄ちゃんのカッコいいところを知らないからだよ。」

ア「はあ、コイツの何処がカッコいいのよ？」

当「全てじゃない？キリ」

ア「なんて使うんじゃない！」

当「フゴ！」

ナイスパンチ！アリサ。流石夜兎族ですな。

す「アリサちゃん、やめなよ。」

ア「大丈夫よ。コイツなら。」

当「まだだ、まだ終わらんよ。」

担「はい、休憩時間はおわりね。」

なんという。バッドタイミングさすが俺の担任ですね。そして、一日が過ぎた。

な「アリサちゃん達は今日は習い事？」

ア「そうよ、でもヴァイオリンとピアノなんてめんどくさいわね。」

当「まあ、頑張れよ。」

ア「アンタに言われると嫌味にしか聞こえないわよ。」

す「当麻君は何でも出来るもんね。」

俺は先日、すずかの家に遊びに行ったとき、家にあったピアノとヴァイオリンを弾いてみたら、プロ並みだった。たぶん、美堂蛮の能力の一つだと思うが。

ア「それなのにあんな正確だから余計に馬鹿に見えるのよ。」

当「俺よりも成績が低いやつには言われたくないね。まあ、頑張れよ。2人とも。」

す「うん、ありがとね、行こ、アリサちゃん。」

ア「ええ、さっさと行きましょ。」

そして、2人は習い事に行った。

当「なのは、今日は翠屋で手伝い？」

な「うん、お兄ちゃんはやっぱ山で修行？」

そう、俺はあの日からずっと山で修行している。最初は両親との思いが強すぎて辛かったが今は何とかなっている。

そして、山に着いた俺は結界をはり、修行をはじめた。

当「春雨、準備はいい？」

春「ああ、準備はいいぞ。主、というかなのはに修行をしているとというのは話してもいいことなのか？」

当「ああ、少し本当の事を話しておくのは自分の正体を隠すには一番有効な事なんだぜ」

春『そういうものなのか。』

当『そういうものだ。』

ちなみに、二年間も一緒にいると少しだけ春雨ともタメで話せるようになったてきている。

当『それじゃあ、春雨セットアップだ。』

春『Yes, sir. Get set.』

そして俺は春雨をセットアップし、シュバルツフォームになった。

当『それじゃあ、まずは、無限の剣製から行くか』

春『ああ、行くぞ主!』

当『I am the bone of my sword. (体は 剣で 出来ている)』

Steel is my body (血潮は鉄で) , and fire is my blood (心は硝子)

I have created over a thousand brades. (幾たびの戦場を越えて不敗)

Unaware of loss. (ただ一度の敗走もなく、)

Nor aware of gain（ただ一度の勝利もなし）

Withstood pain to create weapons．（担い手はここに孤り。）

waiting for one's arrival（剣の丘で鉄を鍛つ）

I have no regrets．This is only path（ならば、我が生涯に意味は不要ず）

My whole life was（この体は、）“unlimited blade works”（無限の剣で出来ていた）

すると、あたり一面が、真つ赤な世界になった。

当「ふう、よし、まずは仮想敵をレベルAAで5対出してくれ。」

春「了解した。」

すると、目の前には百体以上の人形が出てきた。

当「えっと。俺は5体って言ったよな。」

春「大丈夫だ、主最初に動くのは5体だけだその後は知らないがな。」

当「はあ、これってレベルで行くといくつぐらい？」

春『全て、A A + だが。』

当「はあ、今日はこの後、翠屋に行かないといけないから、これで終わりでもいいよね。」

春『ああ、そのかわり、明日は休日だから一日中レベルSで行くかな。』

何当たり前みたいに言ってるの？あれやると一週間は筋肉痛とれないんだよ。

小学生の俺には行き過ぎた訓練じゃない？

春『大丈夫だ。君の体はチートだから。それと、もう攻撃してきたぞ。』

当「心を読むな！ああもう行くぞ！投影、開始！」

そして、俺は干将・莫耶^{かんしょう ばくや}を投影して人形に切りかかった。

当「ハッフツハアア！まずは一気に3体行くぞ！」

そして、俺は右手に持った剣を投げた。そして投げた瞬間2体の人形を真つ二つに切り裂き、

そのまま俺は3体目の後ろに回りこみ上段から切り込んだ。

しかし、それを人形は前転して避け、体制を整えようとした。しかし、さつき投げた剣が後ろから切り裂いた。

これは干将・莫耶^{かんしょう ばくや}は互いを引き合うので何処へ投げても必ず戻ってくるという特性を応用したものだ。

当「次！ハアアアア」

そして俺は残りの2体をクロスに切り裂いた。

春『では、残りの百対を動かすぞ。』

当「ああ！一気に行くぞ！投影、終了！」

そして俺は干将・莫耶を消した。

当「真名開放！偽・螺旋剣（カラドボルグEE）！」

そして俺は偽・螺旋剣（カラドボルグEE）を放ち一気到人形を消した。

当「ふう、終わった！」

春『主、これでは修行の意味が無いのでは？』

当「いいんだよ、」

春『これなら明日はレベルS+の二百体決定だな』ボソ

なんか聞こえた気がしたが気にしない気にしない。

そして、俺は結界を解いて麓に下りた。が目の前を一台の車が通った。

春へ主、あの車にあの2人が

当へああ、追いかけるぞ！」

そして、俺は車を追いかけた。

ちなみに走って追いかけてるから、ちゃんと認識障害の魔法をかけてあるよ。

見つかったら次の日には海鳴市の七不思議になっちゃうからね。

Side Out

アリサSide

はあ、習い事の帰りに寄り道するんじゃなかった。

でも、それよりどうしょ。誘拐されるのは今回が初めてじゃないけど、今回のヤツは明らかに今までのヤツとは違う

あの目はヤバイ。それに今回はすずかもいるし私が守らないと。

男その1

「おい、付いたぞ。お前らソイツを連れて来い。」

男その2

「はい、リーダー」

アイツがリーダーね、それよりここは何処かの倉庫みたいね。

男その3

「リーダーそいつらが？」

リーダー

「ああ、そうだ。ちょうど2人一緒に居たから楽だったな。」

男その4

「そんな事よりリーダーこいつら少し味見していいスツカ？」

リーダー

「まあまで、あいつらの家から金をふんどくつてからにしろ。」

男その4

「へい！リーダー！」

何？こいつらホントに危ないんだけど特にその4が。
はやく助けにきなさいよ。当麻！

アリサSide Out

すずかSide

どうしてこうなったんだろう？確か今日はめずらしく、お迎えが来ないからアリサちゃんと一緒にクレープのお店に行ってクレープを食べ終わって帰ろうとしたら、いきなり車に押し込まれて誘拐されて、
もう訳が分からないよ。

男その1

「おい、付いたぞ。お前らソイツを連れて来い。」

男その2

「はい、リーダー」

私たちは、どこか分からない工場につれて来られちゃった。

男その3

「リーダーそいつらが？」

リーダー

「ああ、そうだ。ちょうど2人一緒に居たから楽だったな。」

男その4

「そんな事よりリーダーこいつら少し味見していいスツカ？」

リーダー

「まあまで、あいつらの家から金をふんどくってからにしろ。」

男その4

「へい！リーダー！」

どうなっちゃうんだろう私たち。もう皆とは会えないのかな？当麻君

Side Out

リーダーSide

まさか、バニングスだけじゃなく月村の餓鬼も掻っ攫えることができるなんてな。

これで俺の人生をむちゃくちゃにしたバニングスと月村の一族に敵討ちが出来るぜ。

男その3

「リーダーそいつらが？」

リーダー

「ああ、そうだ。ちょうど2人一緒に居たから楽だったな。」

男その4

「そんな事よりリーダーこいつら少し味見していいスツカ？」

ほんと、アイツは危ないヤツだな。

まあ、2人とも数年たったら良い女になるから海外の奴らにでも売るか。

もちろん、最初は俺達が頂くがな。

リーダー

「お前ら、電話を用意しろ！さっさとやる事やって頂くぞ！」

ドガン！

なんだ？いきなり扉が吹っ飛んだだと！

Side Out

当麻Side

俺は、2人を乗せた車の後を追って何処かの工場に来ていた。

やっぱ、こういう場所のほぅがこういう奴には都合がいいのかな？

春『主、どうする？一応結界は張っておくか？』

当「いや、こんな奴らに魔法を使う必要ないでしょ。それに、一応警察には連絡しないといけないしね。」

「リーダーそいつらが？」

リーダー

「ああ、そうだ。ちょうど2人一緒に居たから楽だったな。」

男その4

「そんな事よりリーダーこいつら少し味見していいスッか？」

リーダー

「まあまで、あいつらの家から金をふんどくってからにしろ。」

男その4

「へい！リーダー！」

その時、中から声が聞こえた。

やべ、こいつら、いろんな意味でヤバイ奴らだ早く助けないと。ええっと、まづはコイツを蹴破ろうかな？

ドガン！

うん、上手い具合にドア吹っ飛んだね。あ、一人伸びてるよ。

リーダー

「てめえ。なにもんだ！」

そこで、リーダーらしき人が俺に叫んだ。

当「俺か？俺は通りすがりの奪還屋だ！」

うん、言ってみたかったんだ。これ

男その2

「なに、言ってるんですか。この餓鬼はヨオ」

そう言つとその2は俺に殴りかかってきた。

俺はそれをポケットに手をつ込んで避け、背後に回り思いつき蹴り飛ばした。

男その4

「このガキヤ！ナメンジャねえよ！」

今度はその4がパイプで俺を殴ろうと上段から振り下ろしてきた。

バキッ！

俺はそれを右手で握りつぶした。やっぱ握力200kg葉伊達じゃないね。

そして、俺はその4の頭を鷲掴みにして思いつき投げ飛ばした。これで、あと1人だな。

リーダー

「おっ、おいデメエこいつ等がどうなってもいいのか？」

すると、そこにはさすがとアリサに銃を突きつけたリーダーが居た。

ブチッ

そして、俺の中の何かが切れた。

当「てめえ、今お前は一番やっちゃいけない事をしたんだ。覚悟は出来てんだろうな？」

そして、俺はソイツに一気に近づき銃を奪い、銃をソイツの額に突きつけた。

当「さあ、お前の罪を数えろ！」

バン！

銃弾はソイツのこめかみをカスって床にめり込んだ。そして、銃をソイツに放り投げた。

そして、俺はさすがとアリサの縄を解いた。

ア「アンタ、何もんなの？」

まあ、あんな小学生を見たらこう思うよね。

当「まあ、通りすがりの奪還屋だな。」

ア「はあ、やっぱりアンタはアンタなのね。」

す「あはは、でもありがとね。助けてくれて。かっこよかったよ。当麻君」

ア「いつ、一応お礼は言っておくわ、べっ別にかっこよかったん
て思っていないんだからね。……………当^{ボツ}麻」

当「ありがと。一応警察には連絡しといたから。あ、漸く来たみた
いだね。それじゃあね。」

そして、俺は家に帰った。

そういえば2人とも顔が赤かったけど大丈夫かな？

春へ主はやっぱり主なんだな。ゝ

俺が、家に帰ると

な「ねえ、お兄ちゃん。なんで翠屋に来なかったのかな。かな？す
こしO H A N A S H Iしようか。」

そこには、あくm……………ゲフン、ゲフン般若がいました。

な「あまり変わらないの。」

その日から一週間なのはが怖かったです。

無印編第三話 新しい日常（後書き）

当「まずは、なぜこうも遅くなったのか聞こうか。」

作「すみません、春休みの課題がおわらなかったんです。」

当「スネークバイト！」

作「ギャアアアアア」

当「たつく、もっと計画的にやっとけば楽になっただろうに。」

作「仰るとおりです。ホント申し訳ありません。」

当「今年は受験なんだからちゃんと計画的にやれよ。」

作「はい。先ほどから言っているように私は今年受験なので、更新が全く出来なくなる可能性があります。なるべく一ヶ月に一度は更新できるようにしたいんですが、どうなるかわかりません。本当にもうしわけありません。」

当「まあ、コイツも応援してもらったり、褒められると伸びるタイプだから応援してやってくれ。」

で、いきなり話し変わるけど次回はどうなる予定？」

作「うん、一応無印本編にはいれるかな？」

当「疑問形かよ！」

作「予定は未定だ！」

当「はあ、ダメだコイツ早くどうにかしないと。」

作「あと、君の決め台詞考えてるんだけどなかなかしぼれないんだよね。」

当「どんなのがこうほにあるんだ？」

作「こちらになります。」

「通りすがりの〜だ！」

「さあ、お前の罪を数えろ！」

「倒してもいいよね、答えは聞いてないけど！」

「その幻想を打ち殺す！」

「コレが、高町当麻だ！地獄に言っても忘れるな！」

当「ほとんど、パクリじゃねえか！」

作「だってオリジナルが思いつかなかったんだもん。」

当「すまないが、みんなこの仲から自分はコレが好きだというものをえらんでいただきたい。もちろんこれ以外の物もあれば教えていただける嬉しい。」

作「では最後にこれからは更新が大変遅れると思いますが、感想や

意見など、どしどし待ってます。」

当「では、全ての悲しみ、撃ち貫け！」

無印編第四話 出会い（前書き）

久しぶりの投稿です。

無印編第四話 出会い

あれから2年が過ぎました。え、話が飛び過ぎだっけ？仕方ないじゃない、特に何もなかったんだから。

そして、俺はこの2年でシャーマンキングに出てくる超・占事略決を使えるようになったぜ。

これで、俺がすべき準備は一つを残して全部完了した。いつになったらアイツはくるんだろうか。

さて、もうそろそろ俺も起きるか。うん？なんか重いぞ？

な「んにやお兄ちゃんそこはダメだよ。」

俺の隣にはなのはが腕に抱きついていていた。

2年前、俺がずずかとアリサを助けて以来こうなってしまった。

なのは曰く

な「あの2人には絶対渡さないなの。」

だそうだ。さっぱり訳がわからん。ちなみにこの事を春雨に聞いたら

春『主はやはり主だな。』

なんて言われた、こちらもさっぱりわからん。

てかなのはどんな夢見てるの？めっちゃ怖いんですけど。

春『主早くしないと学校に遅れるぞ？』

当「ありがとう。春雨。おい、なのは！起きろ、早くしないと学校に遅れるぞ！」

というより早くしないとアイツが来る！

恭「おい、当麻早くないと学校n」

あゝあ、来ちゃったよ。一応言い訳はしておくか。

当「恭にい、一応言っておくけど俺は昨日鍵をk」

な「だめだよお兄ちゃん、もう少し暗くなるまでまってよ。」

その時俺の部屋に原爆級の爆弾が投下された。

あ、俺終わったな。つか、なのは！ホントどんな夢見てるの？俺の貞操がやばくね？

恭「当麻、覚悟は出来てるようだな。」

当「ちよつと、恭にい、冷静になって。俺がなのは連れ込んだわけじゃないからね。

てか、その木刀どこから出したの？」

恭「問答無用だ！さあ、お前の罪を数えろ！」

ちよつ、それ俺の台詞！というより、小学生に神速使わないでよ！普通の小学生だったら死んでるよ！

恭「チツ、外したか。次は確実に殺る。」

目がヤバイ。これはマジで俺の命がヤバイ！

桃「恭ちゃん、何をやってるのかな？」

そこには、満面の笑みを浮かべた母さんがいた。

恭「え！母さんこれはちよつと当麻とあそぶ」

桃「小学生に神速を使って遊ぶんですか？ちよつとO H A N A S H Iしようね。」

一応俺、転生者だからただの小学生じゃないんだよね。
でも、恭にいドンマイ君の事は忘れないよ。

恭「ぎゃあああああああ」

恭にいの悲鳴を聞きながら俺は朝食を食べにリビングへ向かった。

S i d e O u t

朝食を食べているときなのはがいきなり今日見た夢について話し始めた。

当「で、その男の子はお化けと戦ったけど負けちゃったと。」

な「うん。」

てか、なのは、その夢を見てどうしたらあんなヤバイ寝言をいえるんだ？

そして、多分なのはが見た夢はあの獣のことだろう。

という事は、今日から始まるのか。だが、もう一つのデバイスは何

時になつたらくるのだろうか？

士「というより、なのは、当麻、早くしないとバスの時間じゃないのか？」

な「そうだった。お兄ちゃん早くしないと・・・もういない！」

当「それじゃあ、父さん、母さん、姉さん、恭にい、いつてきまーす！」

な「ちょっと、待ってよー！」

そういうと、なのはは三秒で朝食を食べ終わると、当麻を追いかけた。

俺がバス停でバスを待っているとなのはが走ってきた。

な「はあはあ、お兄ちゃんもう少し待ってくれててもいいじゃん。」

当「なのはが話すのに夢中でご飯を食べないのが悪い。」

な「私にはそんな器用な事出来ないよ。」

当「そんな事より、バスが来たぞ。」

俺がなのはと話しているとスクールバスが来た。

ア「当麻ー、なのはーこっちこっち。」

俺達がバスに乗るとアリサが俺達の事をよんだ。

す「それじゃあ今日もやろつか。」

ア「そうね。今日も私が勝つからね。」

な「今日こそお兄ちゃんの隣を取り戻すんだ！」

す「うふふ、いくら、なのはちゃんやアリサちゃんでも当麻君の隣は譲らないよ。」

そして、なのは、アリサ、すずかの三人による

俺の隣争奪じゃんけん大会が始まった。ちなみにこの恒例行事は2年まえぐらいからいきなり始まった。

その時俺は、他の男子からめちやくちや痛い視線を受けていた。しかも、その視線が

「朝っぱらから私立聖祥大附属小学校三大女神とイチャつきやがって。」

と言ってるからなおさら痛い。全く俺はそんな気はないのだから。

三大女神

「「「最初はグーじゃんけんポイ！」」」

なのは↓グー

すずか↓チヨキ

アリサ↓パー

三大女神

「『『あいこでシヨ!』』」

なのは↓パー

すずか↓グー

アリサ↓チヨキ

運転手さん毎朝この3人の馬鹿騒ぎのために出発が遅れてしまってますみません。

でも、なんでいつも時間どつりにちゃんと学校に着くんだろうこで10分ぐらい遅れるのに、不思議だ。

そして十回ぐらいあいこが続く勝負が決まった。

そして席順は左から順にすずか、俺、アリサ、なのは、となった。

はあ、今日家に帰ったら絶対に大変な事になるな。

特になのはとそれを見た恭にいが。

Side Out

俺は、今なのはたちと一緒に屋上で昼食をとっている。

な「アリサちゃん、すずかちゃん、2人は将来の夢についてどんな風に考えてるの?」

なのはは今日授業で言われた将来の夢について2人に聞いていた。

ア「うーん、私は両親の会社を継ぐことかな。」

アリサは両親がやっている会社を継ぐことを考えているようだ。

す「えーっと、私は機械とかが好きだから工学系に進めればいいかな。」

すずかは工業系に進みたいと思っているようだ。

でも、すずかそういうことは普通高校で決めないか？

す「なのはちゃんは翠屋二代目？」

な「うーん、それも未来のビジョンの一つなんだけどなんかしっくりこなくてね、

私特に何も取り柄がないから。」

ピタ！

なのはがさういうとアリサがレモンをなのはに投げ、それがほっぺに引っ付いた。

ア「何言ってるのよ。アンタは理数系だけは私より成績良いんだから。それで取り柄がないなんて言わせないわよ！」

当「そうだぞ！なのは、お前にはお前にしか出来ないような事もあるかもしれないんだからな。俺とはち」

ア「当麻にも言わせないわよ。当麻は私たちのよりも成績も運動神経も良いんだからね。」

す「そうだよ、でも、当麻君の将来は私との幸せな家庭をつくる」とだよね。」

え、すずかさん何を仰ってるのでしょうか？

な「え、何言ってるのすずかちゃん！お兄ちゃんはずっと私と一緒に居るんだよ。」

え、なのはさん？

ア「違うわよ！私と幸せな家庭をつくるんだから！」

アリサさんも何言ってるんですか？

当「つつか3人とも何勝手に俺の将来を決めちゃってくれるんですか？」

な「え？何？あの時の事は嘘だったの？」

男子生徒

「「「「「てめえ、何、いつもいつも三大女神とイチャついてるんだよ！」「」「」「」

そして、いきなり学年中の男子生徒が俺に襲い掛かってきた。

当「お前らどこから湧いてきたんだよ！」

男子生徒

「「「「「てめえを殺るためなら何処からでも湧いて出てきてやるよオ！」「」「」「」

遂に来たか、この時が。

す「え、何も聞こえなかったよなのはちゃん。」

すずかがそう言うとなのはは行き成り林の中へ走り出した。

当麻Side Out

なのはSide

今、私はお兄ちゃん達と一緒に帰っています。

お兄ちゃんがアリサちゃんと楽しくお話しているので私もその中に混ざろうと思ったたら。

？へ助けて。ゝ

どこからか、声が聞こえてきました。

な「ねえ、みんななんか聞こえなかった？」

す「え、何も聞こえなかったよなのはちゃん。」

すずかちゃん達は何も聞こえなかったみたいだけど確かに私は聞こえた。

どうしてか分からないけど、私は声が来たほうに向かって走り出した。

そして、林の中を暫く走っているとそこには一匹のフェレットが居ました。

なのはSide Out

当麻Side

なのはが林の中へ走っていったのを追いかけるとそこにはやはり、一匹のフェレットが倒れていた。

ア「なのは行き成り走り出さないでよね。で、どうしたのよ。」

す「なのはちゃんそれってフェレット？」

な「多分そうだと思うけど怪我してるよ。どうしようお兄ちゃん。」

当「アリサ、この辺に動物病院なかったけ？」

ア「ええ、私がいつもお世話になってるところが確か此処の近くだったわ。」

当「そうか、それじゃあそこに行くぞ。」

そして、俺たちは動物病院へ向かった。

病院へついて暫くしてアイツの治療が終わって俺達が呼ばれた。

ア「先生この子どんな種類のフェレットなんですか？」

先「そうね、私も見たことないから分からないわね。」

す「そうですか。」

な「でも、こんな街中にいたってことは飼いフェレットなのかな？」

先「そうかもしれないわね。」

当「そんな事より、お前ら塾の時間は良いのか？」

ア「あー！そうだった！では先生今日はこの辺で失礼します。」

す&な

「まっつてよアリサちゃん！」

そついうと三人は急いで塾に向かった。この時間ならギリギリ間に合うかな？

当「では先生また明日様子を見に来ます。あと誰が預かるかも相談しときますね。」

先「ええ、よろしくお願いね。」

まあ、俺となのはが預かる事になるんだろうけど。

Side Out

なのは達が塾から帰ってきて、夕食を食べ終わるとなのははフェレットをうちで預かりたいと言い出した。
ちなみに、すずかは猫、アリサは犬を飼っているため無理だという事らしい。

ここはやはり原作と同じみたいだ。

恭「俺は別にいいけど美由紀はどうだ？」

美「私も賛成だな。当麻は？」

当「俺も賛成だよでもうちは飲食店だけどその辺はどうするの？」

桃「そうね、どうします。士郎さん？」

母さんが父さんに聞くと父さんは腕をくみ真剣に考え始めた。
ってことはこの後はあの迷台詞がでるな。

士「なのは、」

な「はい。」

士「フェレットってなんだ？」

やっぱり出たよ。そして、俺以外全員が扱けた。

そして、俺は父さんにパソコンでフェレットの写真を見せた。

当「父さんこれがフェレットだよ。」

士「このぐらいの大きさなら籠の中で飼うならなんら問題はないから良いぞ。」

な「ほんと！お父さん！ありがとう！」

そして、なんだかんだで夜中になった。誰がなんと言おうと夜中になった。

当「春雨もうそろそろだな。」

春「そうだな。」

当「とうとうストライクは来なかったが何とかなるだろう。」

春「そうだな、それと主現場に向かうのなら詩菜から渡された宝石も持っていくといいだろう。」

当「まさか、こいつが、誰か僕の声が聞こえたら僕に力を貸してください」チッもうそんな時間か。いくぞ春雨！」

春「ああ！」

そして、俺は階段を駆け下りると。ちょうどなのはが出て行くところだった。

士「なのは！こんな時間に何処に行くんだ！」

当「父さん！俺がなのはについていく！」

そして、俺はなのはを追うために家を飛び出した。

当麻Side Out

なのはSide

今日もどうやってお兄ちゃんの布団に潜り込むか考えていると行き成り

？「誰か僕の声が聞こえたら僕に力を貸してください」

と誰かわからない声が聞こえてきたそして私は嫌な予感がして急いで病院に向かいました。

そして、病院に着くとそこには夢にでてきたお化けが夕方みつけたフェレットをおそっていました。

？「すみません、どうか僕に力を貸してください。」

な「フェレットが喋った！って、そんな事より今は此处から逃げなきゃ。」

そして、私はフェレットを拾い上げ、逃げ出しました。
しかし、黒いお化けは私たちを追いかけました。

化「ギシャアアアアアアアア！」

お化けは私たちに攻撃をしかけてきました。

私は何とかその攻撃を避けたけど、腰を抜かしてしまいました。

化「ギシャアアアアア！」

そして、お化けはまた私たちに攻撃してきました。

しかし今回は私は腰を抜かしていたので避ける事が出来ませんでした。

助けて、当麻君！！

なのはSide Out

無印編第四話 出会い（後書き）

当「漸く本編の第一話に入ったな。」

はい、すみませんあまりネタが思いつかなくて。

当「はあ、次回は漸く銭湯に入るのか？」

そうだよ、でも本格的な先頭はまだかな？

当「早く戦いたいぜ！」

まあ、もう少ししたらあの子達が出てくるから待っててね。

当「楽しみだぜ！」

次話は出来れば今日中には上げたいです。

無印編第五話 星と流星の力

当麻Side

俺は家を飛び出し、なのはを追いかけていた。

当「春雨！病院までの最短コースわかるか？」

春「いや！今主が取っているルートが最短だ！」

当「チッ！」

くそ！原作とあまり変わらないと思うが、さつきから嫌な予感しかない。

暫く走ると、そこはまさにジュエルシードの思念体が腰を抜かしているのはに攻撃をしようとしているところだった。

なんで、原作ではすぐにレイジングハートを起動させるのに、でもそんな事よりなのは助けないと！

当「春雨！セットアップ！」

春「Set Up!! Mode MURAMASA！」

俺は春雨をセットアップし、俺は麻倉葉のオーバーソウル（以下OS）バージョン2の阿弥陀丸シールドで思念体の攻撃を防いだ。

当麻Side Out

なのはSide

私が殺されると思ったけど、いつまで待っても何も衝撃がこなかったので目を開けるとそこには
いつでも私を助けてくれた、お兄ちゃんがいました。

当「おい、そのフェレット！俺が時間を稼ぐから、早くこの状況をなのはに説明しろ！」

？「はっはい！えっと、僕はユーノスクライアというものです。あれはジュエルシードの思念体です。」

すると、フェレットさんが私に今の状況を説明してくれました。
その内容は、あのお化けの正体はジュエルシードという物の思念体で私にはそれを封印できるというものでした。

な「つまりは、私にはお兄ちゃんを助ける事が出来るってこと？」

ユ「はい、そうなります。」

な「どうやればいいの？」

ユ「まずはこれに触れてください。」

ユーノ君は赤い宝石を私にさしだしました。

ユ「ぼくが、言う事を繰り返してください。」

な「わかったなの。」

ユ「では、行きます。我、使命を受けし者なり。」

な「我、使命を受けし者なり。」

ユ「契約のもと、その力を解き放て。」

な「契約のもと、その力を解き放て。」

ユ「風は空に、星は天に。」

な「風は空に、星は天に。」

な&ユ

「そして、不屈の心はこの胸に！この手に魔法を！」

な「レイジングハート！セーットアップ！」

レ「Standby Ready！Set Up！」

そして、私が叫ぶと私の周りをピンク色の何かが包み込みました。

レ「初めましてマスター、魔法についての知識はありますか？」

な「えー！そんなものないです。」

レ「わかりました。それではあなたの身を守るバリアジャケットの形を想像してください。」

な「はい！えつとこれで！」

レ「わかりました。それでは、バリアジャケットを構築します。」

すると、私は学校の制服に似たバリアジャケットというものを装着しました。

しかし、お兄ちゃんが戦っている場所から黒色の柱がみえました。

なのはSide Out

当麻Side

なのはがレイジングハートを起動するまでの時間を稼ぐために俺は思念体と戦っていた。

当「チツ、思ったよりも動きが早い。」

春「だが、今までの訓練に比べれば余裕だろ。」

当「ああ、だがなのはがレイジングハートを起動させるまで時間を稼がないといけないからな。」

春「それは大丈夫みたいだぞ。」

すると、なのは達がいるあたりからピンク色の柱がでてきた。

当「漸く起動させたか。というかやっぱあの魔力は軽くチートじゃ

ねえのか？」

春『主は人の事を言えないのではないのか？』

当「そついえばそうだった。」

するとその時、母さんから貰った宝石が輝きだした。

？『レイジングハート起動確認。スリープモード解除します。』

当「え？」

？『初めまして、マスター私がストライクハートよ。』

当「なんで、母さんから貰った宝石がストライクなんだ？」

ス『それはこの後説明するわ。まずは私と契約して、契約文は自然とマスターの頭の中に浮かぶはずよ。』

当「ああ、わかった。だけどまずはこいつ等の動きを止めないと。」

そして、俺はリゼルグのOSマステマ・ドルキームを発動し、思念体を縛り上げた。

当「それじゃあ行くぞ！」

ス『はい！』

当「我、使命を受けし者なり、故に我は契約を求む。
風は空に、流星は宇宙^{ソラ}に、

そして、全てを撃ち抜く力はこの胸にこの手に魔法を！
ストライクハート！セットアップ！！」

ス『Stand by Ready！ Set Up』

そして、俺はストライクハートをセットアップし、青と白を主体としたバリアジャケットを装着した。

当「ストライク、エールモードだ！」

ス『All right！ AILE Mode！！』

そして、俺の背中にエールストライカーが、右手にはビームライフル、左手にはシールドが装着された。

当「さあ、お前達の罪を数えろ！」

そして、俺は思念体へ攻撃を仕掛けた。

当麻Side Out

なのはSide

お兄ちゃんが居るところにつくとそこではお兄ちゃんが銃でお化けに攻撃していました。

当「ジュエルシールド封印！」

そして、あっという間にジュエルシールドを封印しました。

ギシャアアアッアアアアア

しかし、後ろから別の思念体がお兄ちゃんに近づこうとしていました。

な「危ない！お兄いちゃん！」

レ『私をお使いください。』

な「うん。わかった。」

そして、私はビルの屋上に降りるとレイジングハートを構えました。すると、レイジングハートがカノンモードに変形し、狙いを定めました。

ユ「まさか！砲撃型！」

そして、私は思念体へ向かって撃ちました。

なのはSide Out

当麻Side

当「当たれー！」

俺は思念体へ向けてライフルを撃った。

攻撃は命中したが威力が低く、すぐに再生してしまった。

当「チッ、普通の射撃じゃ意味がないか。」

ス『ならランチャーに切り替えますか？』

当「ストライク確かエールでもバスターは撃てるよな？」

ス『はい、ですがランチャーと比べると威力は落ちます。』

当「大丈夫だ。このまま砲撃で封印する。」

ス『了解しました。』

当「当たれよ、デイバインバスター！」

そして、俺はジュエルシードを封印した。

ス『シリアルナンバー21封印』

春『主、後2つ残っているぞ。』

当「ああ、わかっている。」

そして、俺は後ろから近づいてきている思念体に向けてバスターを撃とうとしたが、桃色の砲撃が俺の目の前を掠めていった。

当「どんな威力だよ。」

そして俺がなのは元に向かうとなのはは自分で撃った砲撃の反動で尻餅をついていた。

当「なのは大丈夫か？」

な「うん、大丈夫だよ。これがジュエルシードなの？ユーノ君」

ユ「うん、そうだよ。レイジングハートに触れてみて。」

すると、二つのジュエルシードがレイジングハートの中に吸収されていった。

レ「ジュエルシードナンバー13」

春「そういえば、主あと一つ残っているはずだがいいのか？」

当「そういえばそうだった！ストライク！どこにいるか分かるか？」

ス「此処から西へ約3キロの地点よ。」

レ「残念ながら私の射程外ですね。」

な「なら、飛んで追いつけないの？」

春「いや、あの速さでは追いつけないだろうな。」

当「エールの最高速でもか？」

ス「可能だけど、マスターの体に大きな負担がかかるよ。それよりもあのモードならいけると思うわよ。」

当「そうか、ならモードチェンジだ」

ス「All Right! Mode Change! LAUNCHER Mode!」

すると、エールストライカーが解除されそのかわりにランチャーストライカーが装備された。

そして、俺はアグニを手にとると思念体に照準を合わせた。

当「出力は最低にしてくれ。」

ス「わかったよ。」

当「デイベインバスター！！」

そして黒色の砲撃が思念体を包み込んでそのままジュエルシールドを封印した。

ユ「あれで、最低の出力だなんて。どんな性能なんだ。」

当「さて、なのはさっきはよくも俺を巻き込もうとしたな。」

な「にや！だって当麻君がやられちゃうって思ったんだもん！」

当「あれ？今俺の事当麻って。」

な「にや！いついつ今によにやしでえ！」

当「おい何赤くなってるんだよ大丈夫か？」

春「やはり、主は主だな」

ス「そうみたいね。」『マスター此処でイチャついてるのもいいけどパトカーが近づいてきてるわよ。』

当「そうだった。おいなのは！いつまで呆けてるんだ！早く逃げろ！」

な「私と当麻君がイチャついてるって周りから見えてるんだ。／／／／」

そして、俺は呆けているなのは手を掴み此处から逃げた。もちろんユーノも忘れずにだよ。

Side Out

そして、俺達は家に着いたんだが、正直言つと家に入りたくない。なぜなら、家に近づくに連れてだんだんと殺気が強くなってきているからだ。

な「なにやってるの？お兄ちゃん。」

当「あつああ、わかった。」

ちなみになのはは正氣に戻るのと同時に俺の呼び方をお兄ちゃんに戻した。

でも、なんでさっき顔が赤かったんだ？いきなりの戦闘で疲れたのか？

そしていろいろと考えているうちに家に着いてしまった。

当&な

「「た、ただいま」」

恭「トオオオオオオウウウウウウマアアアアアクウウ
ウンコンナヨナカニナノハトドコデナニヲシテタノカナアアア
ア？」

当「ちょ、恭にい？どこかの一方通行さんみたいになってるよ！」

怖い目茶苦茶怖い目が人間じゃない。

すると、そこに女神2人が降臨なされた。

美「あら、かわいいね、この子でご飯の時に言ってた子？」

桃「何をやってるのかな？恭ちゃん？」

恭「え？ごめんなさい流石に一日で二回もあの部屋には入りたくない！」

桃「問答無用ね、あ、そうだなのは、当麻、士郎さんがリビングで
待ってるからちゃんとなんで家を飛び出したのか話なさいよ。」

当&な

「「はい。」」

その後俺達は父さんにごつてり絞られ一日を終えた。

無印編第五話 星と流星の力（後書き）

今回は後書きはありません。すみません。

無印編第六話いろいろな説明と新たなチート

なのはが魔法と出会った翌日なのははユーノからジュエルシードの話を聞いていた。

俺はあの後、ストライクから聞いた事を思い出していた。

回想開始

当「で、ストライクなんでお前を母さんが持っていたんだ？」

ス「えつとそれは、最初は私も春雨と一緒にマスターのところへ送られるはずだったんだけど

神がそれだと、世界に与える影響が大きすぎるからって、管理局局員だった詩菜のデバイスとして生まれるようにしたのよ。

ちなみにさっきレイジングハートが起動されるまで、このことは私にも封印されていたわ。

しかもモードは三つはそのままだったけど威力や性能は本来の半分以下にまで下げられていたわ。」

当「母さんが局員だったなんて、でもなんで俺の記憶ではそんな様子はなかったのに。」

ス「ええ、詩菜はあなたが出来たと分かるとすぐに局を止めたのよ。」

当「そうか、母さんは強かったのか？」

ス「ええ、そうよ、刀夜と詩菜のコンビは管理局最強っていわれていたんだから。」

当「え？父さんも局員だったの？」

ス「ええ、使っていたデバイスは普通のインテリジェンスだったけどね。」

ちなみに、刀夜と詩菜のコンビに目を付けられた組織は最長でも三日で壊滅してたわよ。」

当「マジ？父さん達も案外チートだったんだ。」

ス「まあマスターを生む方々だから無理がないようにって神が手を出したんじゃない？」

当「あいからわず。むちゃくちゃだな。」

神「むちゃくちゃで悪かったな！」

いきなり神から通信が入った。

当「いきなり、通信を入れるな！結界をはるこっちの身になれ！」

神「そこは、チートでどうにかなるじゃろ。で、早速本題に入るぞ。」

当「了解。で、何なんだ？」

神「さつきお主が戦っている時に分かった事なんじゃが、お主が転生する時に言った世界の闇については覚えておるな。」

当「ああ、だが、そいつはお前が封印したんだろう？」

神『ああ、大体はな、しかし、完全には封印できずに闇の力の一部がお主がいまおる世界に流れてしまったみたいなんじゃ。』

当「そうか、それをぶちのめして欲しいという事か。」

神『簡単に言うとなんじやが、その力が自我をもってしまったておるみたいでどこにおるのか分からんのじゃ。』

当「そうか、わかったこつちでも何かあつたら連絡すればいいのか？」

神『そうじゃ。お主デバイスからワシに通信できるようにしておるからな。』

それと今のおぬしの能力では闇を探すのには少し無理があるからあるものを送っておいた詳しい座標はストライクに送っておいたぞ。』

当「わかった。ありがとな。」

俺は神との通信を切ると気になったことをストライクに聞いた。

当「そういえば、ストライクどうしてレイジングハートの起動までスリープモードになっていたんだ？」

ス『それは、一応詩菜の遺言であなたが魔法の事件に巻き込まれるまで魔法について触れないようにして欲しいって言ってたからよ。』

そうか、ごめん母さん、俺はもともと魔法について首を突っ込むつもりだったんだ。もともと母さんの遺言を聞く事はできなかったんだ。

当「そうか、でもどうして、レイジングハートが起動するまでスリープモードだったんだ？」

ス「そつそれは、魔力を感知してからすぐに起動しようとしたけど自分でかけたプロテクトを破るのに時間がかっちゃって。」

当「大丈夫か？このデバイス。」

ス「そつそれに、この世界のレイジングハートは私のデータを元に作られてるのよ。」

当「それで、レイジングハートの形が少し原作とは違ってトリガーがついていたのか。でも、お前を元に作られたんだったら人格的に大丈夫か？」

ス「それはどういう意味よ！」

当「そのまま意味だよ」

ス「春雨〜マスターが虐めるよ〜」

春「主、心配は要らないあくまで元にしたのはランチャーモードの砲撃性能とエールモードのスフィア性能だけだから
AIは原作のままだぞ。」

当「そうか、よかった。」

ス「春雨まで〜もういいわよー！いじけてやる！」

そして、ストライクはそのままスリープモードになってしまった。

回想終了

まさか、父さんも母さんも管理局員だったとはな、しかも超一流の、でも、なんで母さん達は殺されたんだ？
まさかあの馬鹿達に接触したのか？

担「当麻君、当麻君、さっきから呼んでるのに何をしてるのかな？」

当「す、すみません。」

担「では、この問題を解いてください。」

黒板には確立の期待値の問題だった。

これって数Aの問題じゃなかったっけ？まあかく場合の確立は簡単
だけど。

当「はい、これで」

もちろん数秒で解いた。

担「嘘、高校の数学から持ってきたのに。」

当「先生、小学生にCを使った問題を出さないでください。全員が
どうしてこうなったって顔してますよ。」

担「ごめんね、いつも簡単に解かれて悔しかったから。」

そして、そのまま授業が終わり、アリサたちが近づいてきた。

ア「どうして、あんな難しい問題が解けるのよ。」

当「まあ家では高校の数学を勉強してるからね。」

す「ホント？」

な「そうなんだよ、お兄ちゃんの部屋には高校の難しそうな問題集がたくさんあるんだよ。」

ア「当麻ってどんな頭してるのよ。」

当「まあね、あ、そうだ今日はよるところがあるから一緒には帰れないから。」

す「そうなんだ、じゃあまた明日ね当麻君。」

ア「まあ、私達もこれから塾だしね。また明日ね当麻。」

な「またあとでね。お兄ちゃん！」

す&ア

「「明日はその代わりにうふふふ」」

な「私は今日の夜にうふふふ」

後ろで三人がなにか言っていたが気にしない。

暫くして、俺が人気のないところに着くと俺は転移魔法を作動させた

ス『座標確認、転移開始します。』

そして、無事に転移が完了し目を開けるとそこにはあの某私設武装組織の頭脳の粒子演算コンピューターだった。

当「なんでヴェーダ？」

ス『えつと今神からメッセージが来ました。再生します。』

神『えーっとこれを見ておるという事は無事にソレスタルビーイングへ転移できたという事じゃな。

ちなみにそこは地球から約5億光年ほど離れたところにある。恒星の近くじゃもちろん君の魔法なら一瞬で着くから問題ないぞ。

あとそいつの中にはトレミーが一隻あるぞ。さらに次元航行もフォールド航行も出来るぞ、

しかもフォールド断層など気にせずにな。あとヴェーダならどこにでもハッキング、クラッキングしほうだいじゃ。』

当「なんか、すごいチートだな。」

？「初めましてマスター」

するとどこからか声がした。

ヴ「私はヴェーダです。神が命令を出しやすいように私にAIを付けてくれました。」

当「そうか、なら早速闇がどこにいるのか調べてくれ。」

ヴ「わかりました。」

当「じゃあなまた今度。」

ヴ「はい、いつでもお待ちしております。」

そして、転移して俺は家に帰った。だが、

な「お兄ちゃん一緒にお風呂はいろ！」

なのはが暴走していた。

無印編第六話いろいろな説明と新たなチート（後書き）

当「まずは最初にスネークバイトオオオオオオ」

ギヤアアアアアアア！

なんでエエエエエ？

当「なんで、こうも無理なチートがでてくるんだよ！」

無印編で基本的なチートを出しておきたいんだよ。

当「コレを使いこなせるのか？」

頑張ります。まあ原作ブレイクは目茶苦茶するよていだから。

当「はあ、こんなんで大丈夫なのか？」

大目に見てください。

では今回はこの辺で

当「では、全ての悲しみ、撃ち貫け！」

無印編第七話プールは危険だよ（前書き）

今回はサウンドステージの話です。しかし、ノエルさんたちは出てきません。すみません。

あと、前回書き忘れましたが、この話でのレイジングハートは劇場版のレイジングハートです。あと当麻が転生前に生きていた世界ではなのはは映画化していないという設定です。

無印編第七話プールは危険だよ

俺となのはがジュエルシードを集める事になって一週間が過ぎた。
今日はアリサたちとプールに遊びに来ている。

当「はあ、恭にいなんて女性って着替えるのに時間がかかるんだろ？」

恭「しかたないだろ。そういうもんなんだから。」

そして、暫くしてなのはたちがやってきた。

な「お兄ちゃん！お待たせ！」

当「漸く来たか。」

ア「なによ、当麻！私達の水着姿をみても一言もないわけ？」

当「まあ、似合ってるんじゃない？」

三大女神

「「「そっそうかな？／＼」」」

なんで、3人とも赤くなってるんだ？風邪か？朝から元気だったのに。

その間に恭にいが美由希姉さんに注意をしていた。

恭「美由希、大丈夫だと思うが荷物には常に注意をしておけよ。この間も女性の下着とかを盗もつとしていた不審者が捕まったからな。」

まあ、まだ痴漢とかの被害が出てなかったからよかったんだがな。」

美「うん、分かったよ。お兄ちゃん。」

すると、アリサが恭にいに質問をした。

ア「恭也さん、あのお立ち台みたいなものって何ですか?」

恭「そのままお立ち台だよ。希望者はあれに乗って歌えるんだよ。」

す「えー! たくさんの人の前ですか?」

恭「ああ、でも、若い人たちには案外人気なんだよ。ちなみに受付で申し出れば誰でも出来るぞ。」

当「そうなんだ、それじゃ、皆これ引いて。」

ちなみに、くじは投影しました。

皆「どうして?」

当「まあいいから、いいから。」

そして、皆がくじを引くと、まあどういことでしょう、全てのくじが真つ白ではありませんか。(某リフォーム番組風に)
ということとは、やっぱり

当「当たりは俺か!」

ア「策士策に溺れるってことね、どうせ当たりを引いた人にあそこ

で歌わせようってことでしょ。」

当「まさか、自分で作ったくじなのに自分にあたるとは。まあ行ってくるわ。」

しかし、俺の目が光っていた事に気づいた高町家全員の顔はひきつっていた。

高町家

「ま、まさか、あれを？」

当「そんじゃ、いきますか。もちろんダンスつきで。」

もちろん歌ったのはハレ晴れユ。イだよ。（フルでダンスつき。）

ア「当麻っていったい何？」

な「家族でカラオケに行ったときもアレやってたよ。」

す「そうなんだ。」

当「ふう、すっきりした。やっぱフルで踊ると気持ちいいわ。」

そして、俺達はプールに向かった。

す「そういえば、ユーノ君って泳げるの？」

当「泳げるってふちよっ当麻何言って」「ほらよ気持ちいいだろ？ユーノ？」

ユ「キュー」　「後で見てるよ当麻。」

当「おーこわいこわい」　「そういえば、恭にはどこに？」

美「なんかボイラー室の見回りだつて。」

当「そうなんだ。それじゃあ俺はあっちでもう一回泳いでこようかな？」

そして、俺は競泳用のプールで泳ぎ始めた。

ユ「当麻、なのは、僕は少しジュエルシードを探してくるよ」

当「ま、頑張つてね」

な「うん、気をつけてね。」

そして、ユーノはジュエルシードを探しに行った。

ま、俺はどこにあるのか知っているけど、なのはの力を上げるためにまだ原作ブレイクしないって決めてるしな。

そして、ユーノがジュエルシードを探しに行つてから暫くたつと。

いきなり、プールの水が遊びに来ていた客を襲い始めた。

す「キャアアアアア」

ア「なんなのよコレ？」

な「お兄ちゃん、ユーノくん！この感じってまさか？」

ユ「うん、ジュエルシードだと思う。」

な「でも、どうして、女性客だけを襲ってるんだろう?」

当「多分先日捕まったやつ女性の服が欲しいっていう欲望をくみ
とって暴走してるんじゃないか?」

す「水着が脱がされちゃう!」

ア「はなせ!」

ユ「見ちゃダメだ見ちゃダメだ!」

な「お兄ちゃんもだよ!」

ブス!

当「ギャアアアア!目がアアアアア!」

なのは、いくら何でも目潰しはだめだろ!

ユ「なのは僕が結界を張るから早く2人を!」

な「でも、アリサちゃん達がいるんじゃない魔法なんて使えないよ。」

当「仕方ねえな。俺が助けるからその間にコイツをどうにかしろ。
行くぞ春雨!」

春『Set Up! Mode Schwarz!!』

そして、俺はスピリットオブウォーターをだし水から2人を救出し、2人を眠らせた。

当「ごめんな2人とも少し此处で寝ててくれ。」

そして、ストライクをノーマルフォームでセットアップし、なのはと合流した。

当「なのは、大丈夫か？」

な「うん、ユーノ君が結界を張ってくれたおかげでなんとか。」

ユ「なのは！早く封印を！」

な「うん、リリカルマジカル封印すべきは忌まわしき器ジュエルシールド！シリアルナンバー……えっとナンバー見えないけど一応封印！」

ユ「だめだ、なのは。まだジュエルシールドの反応が残ってる！多分これは分身だ。」

な「そんな！それじゃ本体はどこに？」

当「それならストライクがサーチしている。」

ス「こつちよ。マスター」

な「うん！」

俺たちが本体のところへ向かおうとしたとたんいきなりユーノが倒

れた

な「どうしたの？ユーノ君？」

当「まだ体が万全じゃないのに広域結界なんて使うからだ。結界を解け。俺がかけなおす。」

ユ「ありがとう。当麻」

そして、ユーノが結果を解くのと同時に俺は結界をかけ直した。

な「ユーノ君私の肩に乗って。」

ユ「え？」

な「今日から私の肩はユーノ君の特等席だよ。」

ユ「うん、ありがとう。」

当「ユーノ家に帰ったらO H A N A S H Iな」

ユ「なんで？」

こつちが聞きてえよ。なんで、なのはがユーノと仲良くしてるところを見てるとイラつくんだよ！

そして、俺たちが本体のところに着くとそこには気絶した恭にいた。

な「お兄ちゃん大丈夫？」

当「なのは、恭にいはそのままにしておけ。」

な「どうして?」

当「ここで起こすといろいろと説明しなきゃいけないのだろ。」

な「うん。」

ユ「それはそうとなのは、当麻はやくジュエルシードを封印しないと。」

当「そうだな、なのは、こんなにもばらばらになっている相手を一気に封印するにはどうすればいいと思う?」

な「えっと、でっかい砲撃で一気に殲滅?」

当「殲滅って怖い言葉を使うなよ。一応それでも出来なくはないが、いまなのは屋内でそんな起用ことはまだ出来ないだろ。」

な「うん。」

当「ならどうする?」

ユ「当麻、なのは、危ない!」

当「大丈夫だ。」

そして、俺は春雨をムラマサモードに変形させ阿弥陀丸オーバーソウルVer2の盾で攻撃を防ぐ。

な「えーっと、それなら、一つにまとめて一気に封印？」

当「正解だ！」

ユ「そんな、無理だ。まだなのはにはそんな事教えてないのに。」

な「大丈夫。レイジングハートとお兄ちゃんが教えてきてくれたことの応用だから。」

まずは、イメージをレイジングハートにのせて、」

なのはが魔力をこめ始めた、だが思念体は容赦なくなのはに攻撃を仕掛けてきた。

当「なのはには手を出すな！俺は今機嫌が悪いんだよ。」

そして、俺は真空仏陀切りを思念体に放った。

しかし、一部の分身が消し飛んだだけで何も変化はなかった。

な「お兄ちゃん！準備完了したよ。」

当「わかった。」

ユ「魔力が収束していく！まさか収束系の上位魔法！」

な「レストリクトロック！」

そして、なのはは一気に思念体を拘束した。

当「まあ、ギリギリ合格だな。」

な「うゝん厳しいなの。」

当「それじゃ封印しますか。」

な「うん、ジュエルシード封印！」

そして、プールでの一騒動は終わった。

そして、俺はもう一度お立ち台に立ち、むしゃくしゃした気持ちを発散させるために歌うためにもう一度受け付けに向かった。

当「あのゝもう一度歌いたいんですけどできますか？」

女「もちろん、いいですよ。」

今回は俺が一番好きな曲（まさかこの世界にもあるとは思わなかった。）ゼロからの。襲を歌った。

俺が歌い終わると、アリサとすずかが起きていた。

ア「なんか、変な夢を見た気がするけど、当麻の本気の歌を聞いて落ち着いたわ」

す「うん、でもあんなに気持ちの入った歌を歌う当麻君はじめてみたよ。」

な「うん、私も始めてみた。」

当「そ、そうかありがとう。」

そして、暫く皆で遊んだ後家に帰った。

当「それじゃあ、ユーノ O H A N A S H I しようか。」

ユ「えっ！ギヤアアアアアアアア」

もちろん、その後ユーノと O H A N A S H I をした。

無印編第七話プールは危険だよ（後書き）

レ『作者さん』

どうした？レイジングハートが来るなんて珍しいじゃん。

レ『今回は私だけではありません。』

へ？

春『おい、作者、』

ス『何で私たちの出番が無いんですか？』

すみません、完全に忘れていました。

レ『姉上と春雨は少しだけ台詞がありました、私には一言もなかったんですよ。』

春『私は起動時の台詞だけだったがな。』

ス『私も一言だけだったのよ』

本当にすみませんでした。

アレ？そっいえばレイジングハート、姉上ってまさか、

レ『はい、ストライクハートさんの事ですよ。』

春『まあ、この話の中ではレイジングハートはストライクのエール

モードを参考に作られてるから仕方ないな。』

ス『どうだ、凄いだろ。』

はあ、自分でそうしたんだし、仕方ないか。

ス『でも、マスターのあの踊りは凄かったわね。』

ああ、一応当麻はオタクだから、お立ち台とかあったらやりそうだなって、思って躍らせてみました。二曲目はまんま名前ネタです。

春『やっぱな』

ちなみに、当麻は歌詞中の「君」は無意識のうちにある誰かの事を思って歌っています。

ス『誰の事なの？』

春『それは、話が進むに連れてわかってくるのだろっ？。』

まあそのつもりだよ。

では、今回はこの辺でまた次回お会いしましょう。

デバイスズ

『『『全ての悲しみ、撃ち貫け！』』』

無印編第八話海鳴市大ピンチ！（前書き）

すみません、今回は当初の予定とはかなり異なったものになりました。

無印編第八話海鳴市大ピンチ！

今日はサッカーの試合の日です。メツチャ眠いです。

なぜなら昨日久しぶりにソレスタルビーイングにいったら

ヴ『マスター、お久しぶりです。』

当「ああ、闇についてなんか分かったか？」

ヴ『はい、そのことなんですが、彼はうまく身を隠しているみたいでなかなかみつきりません。』

当「そうか、俺達に接触する可能性は？」

ヴ『まだわかりません。』

当「そうか、他に何かあるか？」

ヴ『そうですね、あと、マスター私の中にこういうデータがあったのですがどうしますか？』

そして、俺の目の前のモニターには俺の好きなアニメ全話のデータがあった。

それをみた俺はもちろん

当「全て見るぞ！」

そして一晩中俺はヴェーダとアニメを見ていた。

そんなわけで俺は寝不足だ。

士「はい。分かりました。それではお大事に。」

俺が昨日の事を思い出していると。父さんが電話をしていた。どうやら、選手の1人が風邪でこれなくなるみたいだ。なんでだろう？嫌な予感がする。

士「当麻、悪いが今日の試合出てくれるか？」

当「やっぱそうなるんですね。控えの選手はいないの？」

士「いるにはいるんだが、今日の試合相手が相手だからな。」

そう今日の相手はこの地域ではトップクラスの相手だった。

当「分かったよ。」

な「やったー！お兄ちゃんのカッコいいところが見れる！」

そして、俺達は川原のサッカー場に向かった。

そこに到着するとすでにアリサとすずかがいた。

ア「おはよう、当麻、なのは」

す「おはよう、当麻君、なのはちゃん」

な「あはよう、アリサちゃん、すずかちゃん」

当「おはよう、アリサ、すずか」

アリサとすずかに挨拶すると土郎さんがこっちにやってきた。

土「当麻、準備運動はしっかりしておけよ。」

当「分かってるよ。父さん」

すると、アリサが質問してきた。

ア「ユニフォーム姿ってことはまさか」

当「ああ、そのまさかだ。今日の試合俺も出る事になったんだ。」

ア「鮫島、聞いたわね」

鮫「はい、お嬢様、すでに準備は万全です。」

するとサッカー場を囲うようにテレビカメラを持った人がたくさんあらわれた。

当「どこにいたんだこんなにも。」

ア「当麻の勇士を録画しないなんてこの私がするわけないじゃない。」

す「アリサちゃん後でそのビデオ4本ぐらいちょうだい。」

な「私もお願い。」

当「おい、何で4本もいるんだよ。」

三大女神

「「「見る用、保存用、布教用、あと使用用？」」」

当「最後のはなんなんだ最後のは。」

春&ス

『『マスター（主）頑張ってください』』

士「おゝい当麻試合が始まるぞ。」

当「はい」

そして、試合が始まった。

俺はMFというポジションだまあ簡単に言うと攻守両方に参加するポジションだ。

いま、ボールは相手チームが持っている。

そして、一気に上がってきたまあ俺が奪いに行けば簡単に取れるが今俺がとりに行けばこの試合が面白くなるからドリブルコースをふさぐ事に専念する。

すると業を煮やした相手は俺を無理矢理に抜こうとして前に出る。

それに合わせて俺も前に出るが、ワザと遅らせ相手が俺を押し倒すような形に持っていく

もちろん、その後ファールとなり俺達のボールになる。

キ「大丈夫か？けっこう無茶な事するな。」

当「でも、こっちのボールになっただろ。」

キ「それもそうだが君を倒したヤツに対してあの3人が物凄い殺気

を出しているんだが。」

当「どうしてだろうな。」

ユ「当麻助けて、3人の殺気が怖いよ」

当「まあ、諦める。俺もなんでこうなったのか分からないんだから」

ス「マスターそれ本気で言ってるの？」

春「まあ、それが主だということだ。」

レ「当麻さんって本当に凄い方なんですな。」

デバイス達がなにか言っているが無視する事にした。
そしてそのまま俺が守備に専念している間は相手に点をあたえずに
前半は0-0で折り返した。

士「よくやった皆、後半もこの調子で行くぞ。」

当「父さんもうそろそろ俺も本気出してもいいよね。」

士「いいが、半分ぐらいにしろよ。」

当「了解。」

そして、後半が始まった。後半はこっちのボールで始まるから。俺
は一気にドリブルで駆け上がった。

そして三人も俺にマークがつく。抜く事は簡単だがもちろんそんな
事はせずに三人をあざ笑うかのようにフリーになっている

選手にパスを出す。パスを受け取った選手はそのままキーパーとの一騎打ちに勝ち、一点をもぎ取った。

当「よくやったな。」

選手A

「当麻が三人も引き付けてくれたおかげだよ。」

当「それでも決めたのは君だ。」

選手A

「ありがと、よしこのまま一気に行くぞ！」

選手達

「おお〜！」

そして、みんなの活躍もあって試合結果は5 - 0という圧倒的勝利となった。ちなみに俺はハットトリックを決めている。

まあ、完封勝利を収めたのはキーパーのおかげでもある。まあ、俺も本気を出せば一回もこっちの陣地にボールを入れることなく勝てたんだが

それじゃあ面白くないからな。

そして、今俺達は翠屋で祝勝会をしている。

A「でも、改めて見るとユーノって本当にフェレットなのかしら？」

す「そうだね、先生も見たことがない種類だつて言ってたし。」

な「えっえっとユーノ君は変わったフェレットという事で、ほらお手」

お手つてなのはいくらなんでもそれはないだろ。

ユ「キユ」

当「おいユーノお前にプライドって物はないのか？」

な「ごめんね、ユーノ君」

ユ「べつにいいよなのは、当麻その事には触れないでくれ。」

春「お主も大変なんだな。」

ス「まあ、頑張つてね。」

士「今日はみんな動きが良かったぞ！この調子で次の大会も勝とうな！」

選手

「はい！」

士「では解散！」

選手の皆が解散したみたいだった。

当麻Side Out

なのはSide

アリサちゃん達がユーノ君で遊んでいるとき選手の1人の子がジユ

エルシードを持っているのを私はみてしまいました。
そして、しかし、私は気のせいだと思う事にしました。

ア「ふゝ楽しかった。はい、なのはありがとう。」

ユ「キュ〜」

な「ユーノ君大丈夫？」

ユ「何とか、」

そしてジュエルシードを持った。子はマネージャーと一緒に何処かへ行ってしまいました。

ア「それじゃあ私達も解散ね。」

当「おうそれじゃあまたな」

す「うん！また明日ね！」

な「それじゃあ学校でね！」

そして、私達は解散し、私とお兄ちゃんは一端家に帰る事にしました。

なのはSide Out

当麻Side

なのはのやつっぱりアイツがジュエルシードを持っていることに

気づいていたな。

でも、そのままにしていたか。ま、俺はなのはを守るだけだからあまり関係ないけどな。

そして暫くして町の中心のほうでジュエルシードが発動するのが分かった。

暫くして俺達はジュエルシードが発動した場所に到着した。
そこではでっかい木が街中を覆っていた。

な「なんで、あんなにでっかいの？」

ユ「これだけでかい反応となると、多分人間の願いをジュエルシードが吸収してしまったんだと思う。」

ス「やっぱ、一番怖いのは人間の欲望ってことね。」

当「そうだな、でもこの場合は多分純粋なねがいなんだったんだろうな。」

春「どんなに美しい願いでもジュエルシードは正しくは叶えてはくれないということだな。」

俺たちが人間の愚かさについて話しているころ、なのはの様子がすこしおかしかった。

それに気づいたユーノがなのはに声をかけた。

ユ「なのは、大丈夫？」

な「ごめんなさい。お兄ちゃん、ユーノ君こうなったのは私のせいなの。」

俺はだいたいどういふことは分かっているが、黙ってなのはが言う事を聞く事にした。

な「私、さっき翠屋である男の子がジュエルシードを持っていることに気づいていたんだ。だけどそれも気のせいだろうと思って、そのままにしちゃったんだ。」

当「なのは。」

な「何？お兄ちゃん。」

俺はなのはのおでこにでこピンをした。

な「イッター」

当「なのは、これがそのままにした罰だ。それに、まだなのはは魔法については素人なんだし人間だれだってミスをする。

そして、大事なものはミスをしないことじゃなくて、ミスをした後どう取り戻すかだ。」

な「うん、ありがとう。お兄ちゃん」

ユ「当麻、君は本当に9歳なのか？」

ユーノ、そこはスルーしてくれ。

な「でもこういうときはどうすればいいんだろう。」

ユ「うん、封印するにはまず接近しないとだめだ。その前に元となつて場所を探さないと。」

でも、こんなにも広範囲に広がっちゃうとどうやって探せばいいか。

「

な「元を見つければいいんだね。」

なのはが解決策を見つけたが、まだあの木は広がり続けていた。

当「そうだな。だが木の根っこがこっちに来るぞ。」

な「にゃあああ！どうしよう？。」

そして、その中の根っこに一つから何かが出てきた。そしてそれは、なんと遊戯王に出てくるブルーアイズホワイトドラゴンだった。

当「どうして、ヤツが此处に？」

そして、ブルーアイズはそのまま、こっちに攻撃をしかけてきた。俺達はそれをギリギリ避けたが、ブルーアイズは追いかけてきた。

当「ちっ、なのは！お前は本体の探索に専念してくれ。」

な「え、大丈夫なの？お兄ちゃん！」

当「大丈夫だ。」

そして、俺はなのは達から離れてブルーアイズの元に向かった。

当麻Side Out

なのはSide

お兄ちゃんが竜のところに向かって行った後私はユーノ君と一緒に
本体を探す事にしました。

な「お兄ちゃん大丈夫かな？」

レ「彼なら大丈夫でしょう。彼なら。」

ユ「そうだよ。なのは、当麻なら、多分あつという間に片付けてこ
つちに来てくれるよ。」

な「うん、それじゃあ行くよ！レイジングハート！」

レ「All right！」

な「リリカルマジカル探して、根源を！」

レ「Area Search！」

レイジングハートから光が出てきて辺りに広がっていった。

な「見つけた！」

レ「Canon Mode！」

ユ「ここから？無茶だ！いくらなのはでももっと近づかなくちゃ封

印できないよ。」

な「大丈夫、出来るよね？レイングハート」

レ『Divine Buster』

な「デイベインバスター！！」

レ『Ceiling』

な「リリカルマジカルジュエルシード、ナンバー10封印！」

私の砲撃が木の中心に命中し周りが元どつりになりました。

そして、お兄ちゃんのところに向かおうとしましたが、そこではさつきの竜とは別の竜がいました。

なのはSide Out

当麻Side

なのはと分かれた俺はブルーアイズと対峙していた。

当「なんで、お前がここにいる！」

ブ「それは君が一番分かっているのでは？」

当「まさか、お前が神が言っていた。闇！」

ブ「私達はパラドックスだ！」

春『貴様らの目的はなんだ？』

ブ「そんな簡単に目的を言う馬鹿がいると思うか？」

ス『それが、アンタなんじゃないの？』

ブ「私を馬鹿にするな！滅びのバーストストリーム！」

すると、ブルーアイズが必殺技を放ってきた。

俺達はそれを避けたが、砲撃が着弾した場所はでっかいクレーターができていた。

当「テメエ！結界がはってあるから周りに影響はでねえがもし、結界がはってなかったら大変な事じゃすまなかったぞ！」

ブ「そんなこと私には関係がない！」

春『主、このままではなのは達に被害が出るぞ！』

当「ああ、分かっている！ディバインシューター、シュート！」

シューターがブルーアイズに向かって放たれたがブルーアイズはそれを難なく避ける。

当「予想どうりだ！ディバインバスター！」

ブルーアイズが避けたところにバスターを放ち命中するが、ブルーアイズは無傷でそこにいた。

当「くそ！やっぱエールじゃダメか。それなら、ストライクランチ

ヤーだ！」

ス「ダメよ！いまランチャーになったらあの砲撃にやられるわよ！」

それもそのはず今はエールの機動力でギリギリ避けているし、避けきれないものは何とか盾で防いでいるのである。

しかも、その盾も一回でも受けると使い物にならなくなるのですぐに作り変えている。

そんななかで機動力も最低、いくらラウンドシールドを張れるとはいえ盾を持たないランチャーになれば一発で沈められるのは目に見えている。

当「チツ！なら白鵠じやうこでいつきに決める！」

春「主、いきなりで悪いんだがこの際ドラゴンにはドラゴンで戦ったかどうか？」

当「確かに今まで召喚する機会がなかったから今回召喚するのもない。だが、設定上はあっちの方が攻撃力が高いんだぞ？」

ス「そこは、大丈夫よ。こっちではマスターの魔力が彼らの攻撃力に上乗せされるから。」

当「そうか、ならいつちょやってみつか！」

そして、俺はブルーアイズに一発バスターをフルパワーで放ち、一瞬怯んだ隙に離脱して詠唱を開始した。

当「集いし願いが、新たに輝く星となる。

光さす道となれ！シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダストドラゴン

！
」

そして、俺の足元に魔方陣（C・Cさくらのクロウリートの魔方陣っぽいもの）が現れそこからスターダストが現れた。

スターダスト

「初めましてマスター。」

当「ああ、始めましてだな。早速で悪いがあいつを倒すのを手伝ってくれないか？」

スターダスト

「わかりました。すみませんが今回は今の私の力がどの程度なのか私自身が知りたいので1人でやらせてもらえませんか？」

当「別に構わないが、いくら俺の魔力が攻撃力に加算されているとはいえ大丈夫なのか？」

スターダスト

「大丈夫です。ご安心を。」

ス「そうよ、マスターの魔力量は現時点でSランク級なんだから。」

当「マジ？」

春「主、自分で気づいていなかったのか？」

当「いや、俺が成長するにつれて魔力量も上がっていくって聞いたからまだAぐらいだと思っていた。」

俺たちが話しているといきなり下からブルーアイズが攻撃してきた。

ブ「フツ、何をするかと思ってワザと攻撃しないでおいだが私より攻撃力が低いスターダストを召喚するとはな。」

スターダスト

「それは、原作の中だけでの話です。この世界での私は強いですよ。」

「

ブ「やれるもんなら、やってみろ！滅びのバーストストリーム！」

スターダスト

「受けてたちましよう！シューティングソニック！」

そして2体のドラゴンの砲撃がぶつかったと思うと一瞬も均衡せずスターダストの砲撃がブルーアイズを飲み込んだ。

ブ「ナゼダアアアアアアアア！」

スターダスト

「案外簡単に落とす事が出来ましたね。それではマスターまた私の力が必要なときはまた読んでください。」

当「ありがとな。スターダスト、また今度よろしく頼むな。」

スターダスト

「はい、では失礼します。」

そして、現れたときと同じ魔方阵が現れスターダストは帰っていった。

その直後なのは達が来た。

な「お兄ちゃん大丈夫？」

当「ああ、大丈夫だ。そっちも無事に封印出来たみたいだな。」

な「うん、ありがとう！」

ユ「そういえば、当麻さっきのドラゴンは何だったんだ？」

当「ああ、俺達を襲ってきたドラゴンはブルーアイズホワイトドラゴンって言うんだがどうして此処に来たのかはわからない。もう1体はスターダストドラゴンって言う俺の召喚獣だ。」

ユ「ドラゴンが召喚獣って君は何者なんだい？」

当「ただの、小学生だが？何か？」

ユ「はあ、君に聞いた僕が馬鹿だったよ。」

俺とユーノが話している間なのは何かを決めた目つきで俺に話しかけてきた。

な「お兄ちゃん！私決めた！今まではただ何となくでジュエルシードを集めてきたけど、これからは誰にも傷ついて欲しくないから自分の意思でジュエルシードを集めるって！」

当「そうか、頑張れよ、俺がなののはのを守るから。」ナデナデ

そして、俺はなののはの頭をなでた。

な「にゃ／＼／／／」

なのは顔が真っ赤になった。何故だ？エリアサーチで疲れたのか？

当「それじゃ帰るか。」

な「うん！当麻君！」

あれ、また当麻って、最近俺の事を名前で呼ぶ事が多くなってきたな。まっいつか。とくに問題もないだろうし。

春「主、この後はやはり、」

当「ああ、一応神に連絡する。」

そして俺達は家に帰っていった。

無印編第八話海鳴市大ピンチ！（後書き）

当「今回なぜスターダストをだしたんだ？」

えつとこのまま話を進めるとスターダストを出す機会がなくなりそうだったので出してみました。

当「はあ、そういえば、俺が召喚獣を持っているって事は他の2人も持っているのか？」

それは、今後のお楽しみということで。

当「そうか、楽しみだな。」

そして次回ついにもう1人の魔法少女と2人目の転生者が現れます。

当「ついに、来たか、転生者はどんなチートを使うのか楽しみだな。」

ま、多分君よりかはましになるかな？

当「なぜ疑問系？」

ま、いいじゃん

では今回はこの辺で失礼します。感想、ご意見お待ちしております。

当「全ての悲しみ、撃ち貫け！」

無印第九話 2人目の魔法少女と転生者（前書き）

漸く、この2人をだすことができました。

無印第九話 2人目の魔法少女と転生者

家に帰ってすぐ俺はソレスタルビーイングに向かい、神と連絡をとることにした。

春『主、なぜわざわざソレスタルビーイングに？』

当『いや、お前達を使えば簡単に神と連絡を取れるんだが、なのは達にばれるとやばいからな』

ス『そうね、神の存在を私達以外に知られるわけにはいかないからね。』

当『そういうことだ。』

そして、俺はヴェーダに入り神に回線をつないだ。

神『久しぶりじゃな、当麻』

当『ああ、今日は時間がないからすぐに本題に入るぞ。』

神『闇、パラドックスのことじゃろ。』

当『分かっているのなら話は早い、なぜあいつ等はブルーアイズを？』

神『おそらく封印から逃れたときに三人の転生者たちの記憶を覗いてその中から選んだのじゃろ。』

当「そうか。そういえば他の転生者たちとは連絡をとれないのか？」

神『ああ、元々は取れる手はずになっておったのじゃが、パラドックスの影響で残りの転生者たちとはこちらもうまく連絡を取れぬのじゃ。』

だが、一応はデバイスは渡せる事は出来ておるから安心せい。』

当「そうか、わかった。あともう一つこの世界は俺達がアニメで見ていたなのは世界とは少し違うのじゃないか？」

神『よく、気づいたのう。そのとうりじゃ、その世界はおぬしらがみていたアニメのなのは世界の平行世界の一つじゃ。』

当「やはりな。最初のジュエルシードが三つって時点でもしかして思ったがやはりそうだったが。」

神『すまないな。騙すようなことをして。』

当「何を言っている。あんたはちゃんと俺をなののもとに導いてくれたじゃないか、それだけで十分だ。」

神『そう言ってくれると助かる。．．．．．当麻氣をつけるのじゃ、その世界では将来なの』

神が何かを言いかけたときいきなり通信が切れた。

当「どういうことだ？」

春「たぶん、何者かに通信が切られたのだろう。」

当「パラドックスか？」

ス「恐らくはね、マスター通信が切られたという事はこの座標が
ばれたかもしれないわ。すぐに移動しないと。」

当「そうだな。ヴェーダ！すぐに移動だ。」

ヴ「了解！マスター！」

そして、俺達はソレスタルビーイングを別の銀河に移動させ、家に
帰った。

俺達がソレスタルビーイングで神と通信した翌日俺となのはと恭に
いはずずかの家に遊びに行くことになっていた。

恭「なのは、当麻準備はいいか？」

な&当

「「うん」「

士「気をつけて行って来るだよ」

な「うん！それじゃあ行ってきます。」

春「主、今日がとうとうフェイトとの出会いですね。」

当「ああ、あと多分2人目の転生者とも出会っただろうな。」

スへそれでも、マスターなら大丈夫よ！」

そして、俺達が念話で今日起こるであろう事について話しているとあつという間にすずかの家の前に着いた。

恭にいがベルを鳴らすとノエルさんが出てきた。

ノ「本日はようこそ。恭也様、当麻様、なのは様。」

恭「様は止めてくれ、なんかむず痒い。」

当「俺もです。」

な「私もです。」

ノ「いえいえ、未来の旦那様、お2人とすずかお嬢様の友を呼び捨てにするなど。」

恭「え、当麻はともかくいやまだ早いんじゃないのか？僕と忍はまだ。／／／」

そう、恭にいとすずかの姉、忍さんは付き合っているのである。

当「ちょっと待って、何勝手に俺の将来の伴侶を決めちゃってくれるの？それに俺はまだ小学生だよ！

恭にいいかげん覚悟決めなよ。忍さん待ってるんだから。」

恭「いや、まだ僕も学生だし、それに／／／／／」

恭に、本当に早く覚悟を決めて結婚しちやえばいいのに。ホント

そう思うよ。

ゴゴゴゴゴ！！！！！

何か俺の後ろから感じるが俺は気にしない、というより気にさ

な「トウマクン、スコシ O H A N A S H I シヨツカ？」

当「はい。」

何故だ？はあ、不幸だ。

ノ「なのは様、すずかお嬢様とアリサ様がお庭でお待ちになられて
おります。O H A N A S H I が終わり次第そちらにお向かい
ください。」

では、恭也様、忍お嬢様がお部屋でお待ちです。」

恭「あつああ分かった。なのは、ほどほどにしておけよ。」

な「ウン、ワカッテルヨ。オニイチャン」

誰か、助けてくれ。

そして、なのはの O H A N A S H I が終わって、俺達は庭で
待っていたすずか達のところへ向かった。

ア「ちょっと遅いじゃない。なのは、当麻って当麻どうしたの？真

っ白じゃない。」

な「え？ちよつとO H A N A S H Iしただけだよ。」

当「燃え尽きたよ、真っ白にな。」

す「大丈夫そうだね。当麻君。」

おい、すずかこれの何処が大丈夫に見えるんだ？

ア「あ！ユーノも久しぶりね。」

ユ「キュ！」へねえ、当麻もしかして僕の事忘れてた？」

当「ナ、ナンノコトカナ？」

ア「そういえばすずか、今日は猫達がいらないわね。どうしたの？」

す「え、当麻君がくると当麻君に迷惑がかかっちゃうから私の部屋
でおとなしくしてもらってるよ。」

当「そうか、良かった。今日も前みたいに猫にもみくちゃんにされち
や適わないからな。」

だが、甘かった。それは翠屋のケーキより甘かった。
猫達はすずかの部屋の窓の鍵を開け外に飛び出してきた。

猫

「「「「「にゃー「「「「「「「「「「「」

す「なんで？鍵をかけたのに。」

当「そりゃ、猫の運動神経舐めたらあかんぜよ。」

ア「なんで、当麻はそんなに余裕なのよ！」

当「諦めた。キリッ！」

そして、俺は猫にもみくちやにされた。

そして、暫くたち俺猫と格闘しているとさすがの専属のメイドであるフェリンが紅茶を持ってきた。

だが、フェリンは躓き紅茶を乗せた盆をこぼし紅茶がたまたま猫をどかし終えた俺の頭に思いつきりかかった。

それだけじゃなく体制を立て直そうとしたフェリンが猫を避けるためにまた、体制を崩し俺に倒れ掛かってきた。

しかも、フェリンさんの胸が丁度俺の手の中に納まってしまった。

フェ「きゃーーーーー！」

バチン！

フェリンさんのビンタが綺麗に俺の顔面にヒットした。

フェ「す、すみません。本当に申し訳ありません。」

フェリンさんが凄いい勢いで頭を下げてきた。

当「いえ、いつもの事なんで気にしないでください。」

そう、いつもの不幸を考えればこのぐらい俺にとっては普通の事だ。だが、怖いのは俺の後ろからどす黒いオーラを放っている3人娘達だ。

3人娘

「トウマ（クン）スコシO H A N A S H I ショッカ」「」

当「ははは、ふっ不幸だ！」

ちなみに俺が覚悟を決めたときユーノは猫に追いかけていた。

ユ「キューーーーー！」　「誰か助けて！」

そして、俺達が話しているといきなりジュエルシードが発動した。

な「お兄ちゃん、ユーノ君ジュエルシードが」

当「そうだな、ユーノ発動した所へ走っていけ。その後俺たちが追いかける。」

ユ「分かった！」

すると、ユーノは森へ向けて走っていった。

ア「あ！ユーノどうしたの？」

当「俺たちが追いかけるから2人はここにいて。行くぞ！なのは！」

な「うん、お兄ちゃん。」

す「気をつけてね！」

そして、俺たちが森につくとそこには、やはりでっかい子猫が気持ちよさそうに寝ていた。

な「なんで？こんなにでっかいの？」

ユ「多分、子猫の早く大きくなりたいって言う願いが正しく叶えられたんじゃないかな？」

当「でも、限度ってものがあるだろうが。」

ユ「でも早く封印しないといつ暴走するか分からないから。」

うん、というよりも今目覚められたら確実に俺に飛び掛ってくるし、そんなことされたら俺確実に死ぬ。

な「うん、行くよレイジングハート！」

レ『Stand by Ready!』

なのははレイジングハートをセットアップし、ジュエルシードを封

印する準備に入った。

俺も春雨をムラマサモードでセットアップし襲撃に備える。

そして、なのはと猫に向かって金色のスフィアと青色の斬撃が放たれた。

それを俺は白鵠をOSし防ぐ。

ユ「君達はいったい？」

？「ジュエルシードを渡して。」

？「そうしないと、痛い目を見るぜ！」

上空を見上げるとそこにはフェイトと

当「なぜ、お前がここにいる？」

俺の転生前の親友の1人ユウヤ・ブリッジスがいた。

そして、ユウヤは刀を構えると消えた。

いや、早すぎて見えなかったんだ。後ろから殺気を感じ俺は上昇する事によって回避する事に成功した。

当「これは瞬歩かユウヤ。」

ユウ「そうだ、でもまさかこれを避けられるとはな。当麻」

当「まあ、俺にはどこに逃げればいいか見えるからな。」

そう、俺は巫門遁甲を使い避けたのである。

ユウ「ま、俺の知らない技って事か。その武器を見る限りじゃシャーマンキングか？」

当「そっちこそ、その刀はブリーチの斬月か？」

ユウ「そうだ、だが、名前は暁って言うんだ。で、コイツがバルウイングだ。」

暁「以後お見知りおきを。」

ウ「初めまして。」

当「そうか、んじゃ、こっちもだな。まず俺がいま使っている刀が春雨だ。で、こっちがストライクハートだ。」

春「よろしく頼む。」

ス「私もね。」

当「それじゃ、」

ユウ「やりますか！」

俺とユウヤは暁と春雨で切り合いをはじめた。

ユウヤが瞬歩で俺の後ろを取るが俺はそれを巫門遁甲で避ける。そして真空仏陀切りを放つがユウヤは月牙天衝で相殺する。

それが、長い間続き、いつまで続くか分からなくなってきたが。

ユ「当麻！なのはが！」

当「何！」

ユウ「その様子じゃ、フェイトが勝ったみたいだな。」

当「そうみたいだな、原作通りにな。」

ユウ「こっちはあまり原作どおりじゃないがな。」

当「ああ、神から大体の話は聞いている。」

ユウ「何！お前、神と連絡が取れるのか？」

当「その分じゃやはり、連絡が取れてないみたいだな。その事について今度話がしたい。」

ユウ「分かった。それじゃ。」

そして、ユウは後ろからきたフェイトと合流し帰っていった。

当麻Side Out

なのはSide

お兄ちゃんが女の子と一緒に居た金髪の男の子と何処かへ戦いに行つた後、

女の子がいきなり襲ってきました。

な「何であなたはジュエルシードを集めてるの？」

私は女の子にジュエルシードを集めている理由を聞いたけど女の子は何も答えてくれない。

な「私は誰も傷ついて欲しくないから集めてるの。あなたは？」

私は再度女の子に話しかけるけど、女の子は私に向かって斬激を飛ばしてきました。

私はそれをラウンドシールドで防いだけど、その後ろから魔力弾が襲ってきて私に命中しました。

たけど確かにその女の子は私に魔力弾を撃つ前に、

フ「ごめんね。」

と言ってるのが聞こえました。そして私は意識を手放しました。

なのはSide Out

当麻Side

俺がなのはのところに行くと、なのはが気絶していました。

ま、今のなのはがフェイトに適うわけがないよな。

当「ユーノ、なのははどうだった？」

ユ「うん、なのははがんばったよ、でも、あのこの方が何枚も上手だったよ。」

予想通りだな。でも、なんか原作よりも悲しい目をしてたな。

どうしてだろう、ユウヤにでも聞くか。
そして、俺はなのはを背負ってすずか達のところへ帰った。

無印第九話 2人目の魔法少女と転生者（後書き）

ユウ「おい、作者どうして俺たちの出番がこんなにも遅かったんだ？」

フ「そうだよ、答えてよ。」

はい、ユウヤの設定を考えるのに時間がかかりました。あと、主人公設定を更新しました。前回の話を読み直したらおかしい点がありましたので一部当麻の設定も変更しました。

ユウ「そうか。だが、時間がかかったわりには微妙なチートだな。」

フ「しかも、君、あまりナルトに詳しくはないよね。」

だって、ジャンプが好きなんだもん。

ユウ「はあ、で俺は誰をモデルにしたんだ？」

えっと、見た目は当麻と同じでゲトバの天野銀次で名前は俺が好きなゲームのスピノフ小説の主人公の名前です。

フ「へえ、そうなんだ。で、デバイスは？」

やっぱ、当麻のデバイスがストライクをモデルにしているからそれの対称になるようにザフトの三機を基にしたんだ。

フ「でもブリッツはなかったよね。」

うん、ブリッツは俺じゃあ上手く表現できないとおもったからね。

ユウ「まあ、確かにブリッツは魔導戦で表現するのは作者には無理だろうからな。」

フ「本当に文才ないね。」

グハッ！

さすがに正面から言われるときついね。

ユウ「作者が悪い、作者が。」

君も案外酷いね。

フ「で、次回はどうなるの?」

多分、当麻との対談になると思います。あとなのはの修行にかないます。

ユウ「では、今回は此処までだな。」

フ「そうみたいだね。また次回。」

全員

「全ての悲しみ、撃ち貫け!」

ユウ「なんで、作者も言っただよ!」

言ってみたかったから!

ユウ「ふざけんな！螺旋丸！」

ギャアアアアアアア！

キラーン

無印編第十話 修行（前書き）

今回はなのはとユーノの修行の話です。

無印編第十話 修行

フェイトとであった翌日なのはが俺に相談してきた。

な「お兄ちゃん、どうすれば強くなれるの？」

当「なのは、逆に聞くがお前は強くなってなにがしたい？」

な「それは、あの女の子とお話したいから！」

当「話しをするだけなら強さはいらないんじゃないか？」

な「でも！あの子は多分普通にお話するだけじゃダメだと思う。それに、もう何も出来ないのはいやだ。」

当「そうか、分かった。レイジングハートを渡してくれ、訓練メニューを考える。」

な「うん！ありがと！お兄ちゃん！」

そして、俺はなのはの訓練メニューをデバイス達とユーノと一緒に考える事にした。

春「主、なのはの訓練を考えるとってたがどうするつもりだ？」

当「そうだな、レイジングハートはどうすればいいと思う？」

レ「マスターは中遠距離タイプでありますので、如何に相手を近づかせずに動きを止めるのが重要になると思います。」

さらに、近接戦に持ち込まれたときにすぐに自分の距離まで下がる事が出来るほどの判断力とスピードも必要ですね。」

当「そうだな。だが、距離をとる方法はアレを教えて応用させればいいが、俺の戦闘スタイルは近中距離が基本だから難しいな。」

ユ「そういえば、当麻はあまりランチャーを使わないね。」

当「ああ、俺は動いて撃つタイプだからな。止まって砲撃のランチャーは苦手なんだ。ソードは今のところ使う機会がないから使えてないが。」

ス「春雨のムラマサモードもあるしね。」

当「ま、俺の事はここまでで、早くなのはの訓練メニューを考えないとな。」

そして、翌日の放課後俺達はいつも修行に使っていた山にきていた。

当「それじゃやるかなのは」

な「うん！」

そして、俺は結界をはり、シューター九つと三つのターゲットを出した。

当「なのは、まずはターゲットだけを破壊しろ。シューターの攻撃に当たったり、撃墜したら最初からやり直した。」

な「分かったなの！」

そして、なのはは空に上がった。俺はそれをシューターで追う。なのはは抜群の空間把握能力を発揮し回避する。

さらに、回避しきれない攻撃はデイベインシューターで上手く叩いている。そして一発ターゲットに命中し、煙に包まれるが、ターゲットは無傷だった。

当「言い忘れていたが、ターゲットには全部シールドをはってあるぞ。」

な「それは、はやく言ってなの！」

そして、全ての状況を説明した俺はさらに攻撃の手を強める。

最初のうちは回避できていたが、時間がたつうちに少しずつ回避しきれない攻撃が出てきたようだ。

当「なのは、動きが悪くなってきたぞ！」

な「そんなこと言ってたって」

そして、俺はワザと攻撃の手を緩める。なのははその隙に砲撃の体制をとる。

だがなのはが砲撃を撃とうとしたとき俺は後ろからスフィアを当てる。

な「にゃ〜当たっちゃったよ。」

当「ま、最初からクリアするような訓練はしないさ。」

ユ「案外厳しいんだね、当麻。」

当「まあな。で、なのはお前は中遠距離での戦いが主体だ。だから無理に近接格闘のスキルを上げる必要はない。」

な「でも、この間の子は近距離での戦闘が主体なんだよ。」

当「そうだ。そこで、いまからちよつとした技を教える。」

な「どんな、技なの？」

当「まあ、言うより実際に見たほうがいいかな？

なのは今から俺が空に上がるからユーノと一緒にバインドを使ってもいいから俺に攻撃してくれ。」

な「え？大丈夫なの？」

当「ああ、全力でこい！」

な「それじゃ、ユーノ君、レイジングハート、行くよ！」

ユ「うん！分かった！」

レ『All Right!!』

俺が空に上がるといきなりなのはの砲撃が来た。

俺はギリギリでそれを回避する。そのあと俺が回避してきたところにユーノのバインドが来る。

そしてそれも俺はギリギリでかわす。また、その後すぐになのはのシューターが俺の行く手をさえぎる。

もちろん、それも俺はギリギリでかわす。そう、俺は全ての攻撃を当たるか当たらないかの瀬戸際でかわしていた。

ユ「なんで、全部ギリギリでかわされるんだ？」

な「まるで、全部の攻撃がどこから来るのかわかってるみたいなの。」

「どうやら、なのはは少しだけ気づいたみたいだな。さて、種明かしとするかな。」

当「なのは、ユーノ、ここまでだ。で、2人ともさっきのを見てみた感想は？」

ユ「えっと、当麻は全て僕が攻撃をする直前に動いてるみたいだ。」

しかも、直接僕が発動した魔法はもちろんだけど設置したバインドも発動直前にかわしてるみたいだった。」

な「うん、私もそう感じたの、まるで攻撃がどこからそしていつ来るのか分かってるみたいに。」

当「2人ともよく気づいたな。俺はなのはが言ったようにどこからそしていつ攻撃が来るのかが直前に分かる。」

ユ「もしかして、未来予知なのか？もしそうならそれはレアスキルなんじゃ？」

当「ちがう、この技は攻撃がそこから来るのかが見える技だ。」

な「どういうことなの？」

当「2人とも魔力の流れは感じ取れるよな。」

な「うん。」

ユ「なんとか。」

当「この技はその延長みたいなもんだ。名前は巫門遁甲っていうてな、あらゆる形に変化する敵の魔力を読み取り、魔力の波に乗って己の進むべき方位を見定める方位術だ。

コイツを会得できれば大体の攻撃はかわす事も受け流す事もできる。

」

ユ「それじゃ、君には攻撃が効かないって事じゃないか。」

当「そうでもない、あくまでも読み取れるのは魔力の流れだけであり実際避けたり受け流すのは術者の実力に左右されるし、

広域殲滅魔法に対しては範囲が広すぎてかわせない事が多い。だが、これが出来ればたとえ敵を見失ったとしても不意打ちされる事は少ない。」

ま、最初魔力でも巫門遁甲ができるのには自分でも驚いたんだけどな。

な「それじゃあの子の攻撃も避けられるって訳だね。」

ユ「それだけじゃないよ、なのは、この技が出来ればたとえ近接戦に持っていかれたとしてもすぐに自分の距離まで持っていけるよ。」

当「ただし、それに反応できるだけの反応速度が必要になってくるけどな。で、そこでさっきやった訓練だ。

魔力の流れの読み方は俺が教える。その後の使い方はこの訓練でなのは自身が身に着ける。」

な「うん！ありがとう、お兄ちゃん！」

当「で、ユーノにも教えるから。避けながらバインドをかけれるようにしろよ。」

ユ「え！僕も修行するの？」

当「ああ、これからは俺となのはだけじゃきつくなりそうだからな。少しでもこちらの手数は増やしておきたい。」

ユ「分かった。」

当「それじゃお前の相手はこいつな。」

そして、俺は前鬼・後鬼を出しユーノの修行をするように指示したのはの訓練に集中した。

ユ「当麻！なんか僕に恨みでもあるのか！」

そして、もうそろそろ夕飯の時間になったとき俺達は修行を止め家に帰る事にした。

それにしてもシユールな映像だったな2体の鬼が一匹のフェレットを追いかけるなんて。

ユ「でもひどいよ当麻、巫門遁甲のやり方を教えないうちに修行を始めるなんて。」

当「スマン、スマン。一応今のところどれだけ回避能力があるのか知りたかったんだよ。」

な「もうだめ。」

バタッ

ユ「なのは！大丈夫？」

当「大丈夫みたいだ。ただ寝ているだけみたいだ。」

少しなのはには無理をさせすぎちゃったかな。これからはなのはが後悔しないようにちゃんと考えて訓練しないとな。

そして、俺はなのはをお姫様抱っこして家に帰った。

無印編第十話 修行（後書き）

今回は三話連続投稿です。

無印編第十一話 作戦会議（前書き）

連続投稿二話目です。

無印編第十一話 作戦会議

なのはが訓練を始めて三日たち大体魔力の流れが見えるようになって来たから、2人の修行を前鬼・後鬼に任せ、放課後俺は隣町のあるマンションの前に来た。そう、もう1人の転生者ユウヤに会うためだ。

当へユウヤ、今から外に出られるか？

ユウへ当麻か、分かった。今すぐ行く。

そして、2、3分ぐらい待っているとユウヤがやってきた。

当「ユウヤ、まずはついてきてくれ。」

ユウ「了解」

俺達は人気のないところにやってきてソレスタルビーイングに向かった。

ユウ「何じゃこりゃーーーーー！！」

ついた瞬間ユウヤは叫んだ。

ま、いきなり何も分からないまま転送されて目の前にヴェーダがあったらびっくりするよな。

当「落ち着いたかユウヤ。」

ユウ「ああ、どうして神と連絡できないんだ？」

俺はユウヤに神から聞いたことを話した。

ユウ「どおりで、プレシアが原作じゃありえない事になっていたんだな。」

当「どうゆうことだ？」

ユウ「それはな、プレシアがフェイトを生んだのは原作どおりでアリシアともう一度暮らしたいって理由なんだが、ふと気づいたらしいんだ、アリシアの最初で最後の我俣をな。」

当「妹が欲しいってヤツか。」

ユウ「ああ、そうだ。それでプレシアはアリシアの蘇生を諦めフェイトを自分の娘のように育てていたんだ。」

当「そうか、で、さしづめお前が生まれた理由はプレシアが亡くなったあとプロジェクトFで生まれたフェイトを最高評議会のクソ共から守るためって訳か。」

ユウ「本当にお前は頭の回転が速いな。」

当「そうでもないさ。

で、プレシアが母親として接していたのにフェイトがあんなに悲しい目をしていたのはさっき俺が説明したパaddockスの影響ってわけか。」

ユウ「多分な。ある日、時の庭園の機能が全て落ちたときがあっつな、その翌日からプレシアもおかしくなっつて、

さらに庭園のあっちこっちから変な気配がするようになってきたんだ。そこで神に連絡しようとしたら出来なくなっていたんだ。」

当「そうか、こっちも最近になって神との連絡もできなくなっている。俺達で何とかしないといけないな。」

ユウ「そうだな、もう1人の転生者と連絡が取れればいいんだが。」

当「大体どこに居るかは分かるんだが、こつもはやくアイツと接触するとパラドックスがどんな手を打ってくるかわからないからな。」

ユウ「そうだな、なら基本は原作どおりに進めるってことで良いかな？」

当「そうするほかないだろうな。あと、必要以上に庭園に帰らないようフェイトを見てやれよ。」

ユウ「分かってるよ。そういえばなのはがお兄ちゃんって言ってたから苗字はやっぱり高町なのか？」

当「ああ、名前は変わらないがな。」

ユウ「ということはまさか、禁d「違うなのはと俺は血は繋がっていない」そうなのか、それじゃあどうして。」

当「俺のこつちでの両親は殺されてその後に士郎さんに拾われたんだ。」

ユウ「すまない、不謹慎だった。」

当「いいさ、今は新しい家族も居るし、なにより守りたい人もいる。」

ユウ「お前は変わらないな。」

当「お前こそ。」

ユウ「さてと、早く帰らないと夕飯の準備が出来ないな。」

当「やっぱお前が料理を作ってるのか。」

ユウ「まあな、フェイトも出来るには出来るんだが今の精神状況ではやらせないしな。」

当「アルフは頭数に入れてないのか？」

ユウ「アイツは台所を破壊するだけだ。リニスもいれば良いんだが、あいつもプレシアと一緒にパaddockスに取り付かれているからな。」

当「フェイトの心の拠り所はお前とアルフだけってことか。」

ユウ「そうでもないさ、俺はアイツの心までは助けてやれなかった。」

本当にそうかね、あの時フェイトが合流したとき心のそこから安心しきってるような顔をしているように見えたんだが。

そして、俺とユウは今後の予定を確認しそれぞれの家へと帰って行った。

無印編第十一話 作戦会議（後書き）

あと一つだ。がんばろ。

無印編第十二話 温泉はやっぱり良いよね。(前書き)

連続投稿最後です。

無印編第十二話 温泉はやっぱり良いよね。

今日俺達は毎年恒例の温泉旅行に来ている。

メンバーは高町家にすずかとアリサと忍さんとユーノだ。

当へなのは、今日は訓練はなしだ。ゆっくり体の疲れを癒してくれ。
〜

なへありがとうなの。お兄ちゃん〜

暫くたち温泉地に着いた。俺達は到着して少し休憩したら温泉に入ることになった。

な「お兄ちゃん、一緒に入ろうよ。」

当「いや、俺、男だし。」

な「でも此処にちゃんと書いてあるよ。」

そう、このポスターには「十歳以下は男女どちらの風呂に入ってもよい。」と書いてあった。

当「そ、それに忍さんやファリンさんもいるんだぞ！」

ファ「特に私は気にしませんよ。」

忍「私も気にしませんわ。それに未来の弟の世話なら喜んでみてさしあげますわ。」

恭「なっ何を言ってるんだ忍！」

当「恭に早くプロポーズしなよ。」

恭「そっそれはやぶさかではないというか……ボソボソ」

恭に何か言ってるうちに俺はなのはが持っているユーノを掴み男湯に入っていた。

当「なのは、ユーノは俺が連れて行くからな。」

な「へにゃ！いつのまに！うゝん次はこっちに入れてやるなの！」

ユ「ありがと、当麻。あのままなら僕も女湯に連れてかれるところだったよ。」

当「別に、いいよ。」

ああ、胸糞ワリイ！この間から何なんだよ、なのはがユーノと話してるとなんかユーノに殺意が沸くし、
もやもやしたものが残るし。こんなじゃアイツを守ってやれないじゃないか。

ま、気にしたってしょうがない、今はゆっくり温泉につかって疲れを取るか。

それにしても、やっぱりユウヤは強かったな。俺も巫門遁甲と脳量

子波があつたから何とか避けれたけれど、
どっちか片方でもなかったら一撃でやられてたよ。

俺が温泉から出るとなのは達が女の人に詰め寄られていた。

女「君かな？うちの子達にあれしてくれちゃっててくれるのは。」

な「え？何の事ですか？」

それは、フェイトの使い魔アルフだった。

ってことは、やはりユウヤ達も来ているのか。

俺はなのはの前に立ちなのはを庇った。

当「なんですか？あなたは？うちのなのはに何か用ですか？」

アル「あつもう一人も来てたんだ。うーん、この子達ただ力が多い
だけでうちの子たちの脅威になるようなことはないとおもうんだけ
どな〜。」

ア「なんなんですか？なのは、当麻、知り合い？」

な「ううん、知らない。」

一応ここは知らないフリをするか。

当「いや、俺も知らないな。すみませんが人違いではないんですか

？」

アル「ハハハ、そうみたいだね、ごめんねあまりにも私の知り合いにそっくりだったから。」

そして、アルフは去っていった。その時。

アル「君達は魔導師だね」

突然の念話になのははびっくりしていた。

アル「あいさつはこの辺で止めておくよ、でもあまりにもおいたが過ぎるとガブツといくよ。」

そう言うと、アルフは再び歩き出そうとしたが、そこで俺は

当「そちらも、十分に気をつけることだね、なのはを傷つけたらこっちはグチャッだよ」

少し、いや、かなり殺気を含んでアルフに念話を飛ばした。

ア「ああもう、なんなのよあの人！昼間っから酔ってんじゃないの！」

な「い、いろんな人が居るんだよ。でも当麻君助けてくれてありがとう。」ニコッ

当「あ、ああどういたしまして／＼／＼」

やべ、なのはの顔を見ると顔が熱くなる。温泉につかり過ぎたのか？

当麻Side Out

アルフSide

いったいなんだったんだ。女の子の方は本当にただ魔力が強いただけだったけど男の方は最後に見せたあの殺気はただものじゃない。フェイトとユウヤに教えないと。

アルフフェイト、ユウヤ、聞こえる？

フェ「うん、聞こえるよ。どうだった？アルフ。」

アルフさつき見てみたけど女の子の方は大丈夫フェイトの敵じゃないね、でも男の方はやばいよ、本気でやったらユウヤでもヤバイんじゃないかな？

ユウハアルフ、どうしてそう思うんだ？

アルフさつき見に行ったついでに挑発してみたんだけど、そのあと器用に私にだけ向けて尋常じゃない殺気を向けてきたんだ。

ユウハはあ、アルフもしかしてそいつにガブツと行くよとかいったんじゃないか？

アルフえ？なんで分かったんだい？

ユウハ多分そいつは一緒に居た女の子を守るためにならどんな事でもするタイプなんだよ。

アル「一回しか戦ってないのに良く分かったね」

ユウ「俺、人を見る目はいいんだよ。じゃこっちはジュエルシードの搜索を続けるからな。」

アル「うん、早く見つけて今日はゆっくり休もうね。」

私は念話を切ると私もジュエルシードを探し始めた。

アル「Side Out」

ユウ「Side」

まったくアルフのヤツあれほど挑発するなって言っておいたのになにやってんだか。

ユウ「フェイト、ジュエルシードは見つかったか？」

フェ「もう少し。」

なんでだろう？フェイトはイラついてるようだ。今夜の戦いが終わったら温泉に入るよう薦めてみるか。

ユウ「フェイト、ジュエルシード探しは大切だけど無理はするなよ。」

フェ「うん、わかってる。私は大丈夫だから。」

はあ、これだから頑固者を守るのはきついんだよな。それはアイツ

も同じかな。

ユウヤSide Out

フェイトSide

私とユウヤがジュエルシードを搜索しているとアルフから念話が飛んできてあの二人のことを教えてくれた。

アルフフェイト、ユウヤ、聞こえる？

フェ「うん、聞こえるよ。どうだった？アルフ。」

アルフさつき見てみたけど女の子の方は大丈夫フェイトの敵じゃないね、でも男の方はやばいよ、本気でやったらユウヤでもヤバイんじゃないかな？

ユウハアルフ、どうしてそう思うんだ？

アルフさつき見に行ったついでに挑発してみたんだけど、そのあと器用に私にだけ向けて尋常じゃない殺気を向けてきたんだ。

ユウハはあ、アルフもしかしてそいつにガブツと行くよとかいったんじゃないか？

アルフえ？なんで分かったんだい？

ユウハ多分そいつは一緒に居た女の子を守るためにならどんな事でもするタイプなんだよ。

アルハ一回しか戦ってないのに良く分かったね」

ユウ「俺、人を見る目はいいんだよ。じゃこっちはジュエルシードの搜索を続けるからな。」

アル「うん、早く見つけて今日はゆっくり休もうね。」

どうして、ユウやとアルフが話してるのをきいてるだけで心がもやもやするんだろう？

こんなんじゃないだめだ。私がすっかりしないとあの優しかったプレシア母さんは帰ってこないんだから！

フェイトSide Out

当麻Side

アルフが去った後なぜか小学生とメイド組みで卓球大会が開かれる事になった。

ワンセットマッチで決勝は俺とすずかになった。

得点は10-11で俺のマッチポイントだった。

すずかがサーブを打つ、それはフェイントで下回転に見せかけた右上回転だった。

しかもハーフロング（二回目のバウンドが台から出るかでないか微妙なボールの事）で打ってきたからたちが悪い。

俺はそれをツツッキ（ボールの下をこすり台上に落とす技術）で返すが

それを読まれたみたいでフリック（台上のボールをバウンド直後に擦り上げ相手のコートに返す高等技術）で俺のバックを抜いてきた。

当「フリックとは初心者の小学生が打つ技じゃないだろ。」

す「そういう当麻君も何気にナックル（無回転）のツツキを打ってきたんだからお相子でしょ。」

やっぱ、見抜かれてたか、でも今度はこっちのサーブだな（卓球ではデユース「10-10」になるとサーブが一球交代になる。）

なら、俺はフエイントをかけ、下回転のスイングでロングナックルサーブをすずかのミドルに打つ、

すずかはそれをフットワークでフォアで返してくるが如何せん上回転のサーブと殆ど変わらないスピードで打ったもんだから

チャンスボールが返ってきた。それを俺はスピードドライブ（上回転の強打でスピード重視の打球）ですずかのバックに返す。

だが、ここからがすずかの本領発揮だった。すずかは俺のドライブを後ろに下がりバックカット（強烈な下回転を与えたやまなりのボール）で返してきた。

そして、俺はそれをループドライブ（スピードドライブとは違い回転重視のドライブ強烈な下回転に対してのドライブはコイツのほうが入りやすい）

で返球する、またそれをすずかはカットで返す。それが暫く続き俺は勝負に出た。すずかのカットをナックルのツツキで返す。すずかはなんとか

返球するが体制が崩されているためボールはもちろんこっちにとつてはチャンスボールで返ってくる。

それを俺はパワードライブ（スピードドライブとループドライブの両方の性質を持ったドライブ）ですずかのバックむかって打ち抜く！

す「やるね、当麻君でもこのままじゃ終わらないよ。それとさっきの約束はちゃんと守ってもらっただからね！」

そう俺は大会の前にもし俺に勝ったら勝った相手の言う事をなんでも聞くことを約束させられた。

当「そういうのは俺に勝ってからにしろよ。」

ま、そんなことになったらやばいんで俺も割かし本気でやっている。

す「フッフ、今日の夜のためには負けられないからね。」

そして、すずかはしゃがみこみサーブを打ってきた。しかし、あまりなれていない為少しばかり浮いたボールが俺のフォアにきた。俺はそれをボールの外側を巻き込むようにドライブをすずかのフォアに返す。

す「せっかくのチャンスボールだったのに残念だったね」

すずかは俺が打ったボールをライジング（バウンド直後でボールを打つ事）で返そうとしたがバウンド直後にボールの起動が変わりラケットの縁に当たりボールはあさってな方向にいつてしまった。

当「ふう、何とか勝てたな。」

す「うーん、まさか最後にカーブドライブ（ボールの外側を巻き込むように打ってバウンド直後に起動を変える超高等技術）を打ってくるとは思わなかったよ。」

危なかった。マジで俺の貞操がやばかったよ。
そして、卓球大会は俺の優勝で幕を下ろした。

その夜俺は寝ようとしていたがその隣にはなのはがいた。しかもその反対側にはアリサとすずかも寝ていた。どうしてこうなったかというときっかけはなのはの一言だった。

な「当麻君、一緒に寝ようよ。」

当「ふえ！なんで？」

な「一緒に寝たいからだよ」

当「で、でもアリサとすずかもいるし。」

ア「私も一緒に寝たいな。」

す「わ、私もだよ。」

俺は恭にいに助けを求めようとしたけど

恭「忍、今日は……………」

なにか、18禁的な匂いがしたため諦めた。
次は父さんに助けを求めようとしたが

桃「士郎さん私達も今日は……………」

なんか妹か弟が出来そうだったのでこちらも諦める事にした。

な「一緒に寝ようよ」涙目＋上目遣い

なのはの涙目＋上目遣いで見つめられた俺は

当「分かったよ。」

白旗を上げました。

という訳で俺は今なのはの隣で寝ていた。

な「ユーノ君、お兄ちゃん起きてる？」

当「起きてるぞ」

ユ「僕も起きてるよ」

な「また、あの子達と戦わないといけないのかな？」

ユ「ごめんね、なのは、当麻、僕がしっかりしていれば」ユ「ユーノ（君）」「え？」

なのはもユーノが言わんとしていることが分かっているのか俺と同時にユーノの言葉にストップをかけた。

な「ユーノ君それ以上言ったら怒るよ。」

当「そうだ、確かに最初はユーノに頼まれたからはじめたが、今俺達は俺達自身で集めてるんだ。」

な「そうだよ、これからは１人でやるって言ったら許さないんだか

らね。
」

「うま、この後なにが起こるかわからないんだからさっさと寝るぞ。
」

「うなのは、当麻、ありがとう。」

暫くしてジュエルシードが発動したのが感じた。

当麻Side Out

ユウヤSide

池がありそこには光の柱があった。

その光の柱はジュエルシードのよるものだった。

ユウ「やつばすげえなジュエルシードってのは。」

アル「アイツはいつたい何に使おうとしてるんだろうね。」

フェ「関係ないよ。母さんが欲しがってるんだもん。行くよバルデ
イッシュ。」

バ「Yes, Sir」

一番良いのは本当の事を話すことなんだろうけど、そんなことしたらパラボックスのやつらが何をしてくるかが分からないからな。

ま、今回は当麻との勝負に集中するか。

ユウヤSide Out

当麻Side

俺となのはがストライクハートとレイジングハートをセットアップして池についた。

俺達はそこでまたユウヤたちと出会った。

な「それをどうするつもりなの？」

フェ「君に答える義務はない。」

アル「フェイト達の邪魔をするなー！」

するとアルフが俺達に攻撃を仕掛けてきた。

ユ「させない！」

だが、ユーノがそれを防ぎ何処かへ転移していった。

な「どうして教えてくれないの？」

フェ「あなた達も私達もジュエルシードをそれぞれ違う目的で集めてる、だから私達は敵同士、敵に自分たちの目的を話す義務はない、それに話しても何も変わらないから。」

そう言つと、フェイトは俺たちの視界から消えた。
いや、速すぎて俺たちの目では追えなかったただけだ。

そして、フェイトはなのはの後ろに回りこんで攻撃をしてきた。
それをなのははギリギリのところで上空へ飛んで避けた。

巫門遁甲を教えという正解だったな。ま、まだ完全に会得したわけじゃないけどな。

フェ「ユウヤ男のこの方は任せても良い？」

ユウ「任せろ。」

どうやら、俺の相手はやはりユウヤのようだな。

当「やっぱ、やらないとダメか？」

ユウ「ただ見てるだけじゃつまらないだろ。それに、俺はお前と戦いたい！」

当「相変わらずの戦闘狂^{バトルマニア}ぶりだな。」

ユウ「お前だつて顔が笑つてるぞ。」

当「ま、俺もお前と戦うのを楽しみにしていたしな。それじゃ、いくぞ！ストライク！」

ユウ「やっぱ俺達はこのなるみたいだな。こつちもだ！バルウィン
グ」

ス『Stand by Ready!』

ウ『Get Set!』

そして、俺たちの戦い第2ラウンドが始まった。

ユウヤはイージスの様な装甲を展開し、フォトンランサー（追尾版）を俺に向かって撃ってきた。

しかも、それは全て俺の死角からの攻撃だった。

もちろん俺は脳量子波と巫門遁甲をフルに使いかわしつつける。

ユウ「どうした、当麻！避けてるだけじゃ意味がないぞ！」

当「そう言うならフォトンランサーを追尾させながらも、死角から攻撃してくるなつての！シュート！」

俺はデイバインシューターで全てのランサーを打ち落としユウヤに向けて撃つ、もちろん死角から。

ユウ「うおっと、お前もえげつないところから攻撃してくるじゃないか。」

ユウヤはそれを瞬歩で回避し、そのまま俺の後ろに回りビームサーベルを展開して攻撃してきた。

俺はそれをシールドで受け止め足止めし、後ろに配置したシューターをユウヤに向けて撃った。

ユウ「危ね！やるじゃねえか！これだからお前との死合いは面白い！」

当「字が違えだろ！」

次は俺がビームサーベルで切りかかる。それをユウヤはビームサーベルで受け止める。

そして、斬っては受け、斬っては受けという事が暫く続いた。

当麻Side Out

なのはSide

な「話し合っても変わらない？でも、変わらないからって話さなくてもいいなんて訳がないよ！」

フェ「なら、賭けよ互いのジュエルシードを一個ずつ。」

な「デイベインバスター！」

フェ「プラズマスマッシャー！」

私とあの子の砲撃がぶつかり合って暫くの間均衡していたけど、私の砲撃があの子の砲撃を押し切った。

私は勝ったと思ったけどそこにいるはずのあの子はいなくて気づいたら後ろから私に斬りかかろうとしてました。

私は何とか避けようとしたけど間に合わず、私は地面に叩きつけられました。

そして、あの子は私に金色の刃を向けてきました。

レ『Release』

すると、突然レイジングハートがジュエルシードを一つ出しました。

な「レイジングハート！何を！」

あの子はレイジングハートが出したジュエルシードを回収しました。

フェ「主人思いのいいデバイスだ。」

あの子は帰ろうとしたけど私は

な「名前を教えて！」

あの子に叫びました。

フェ「私は、フェイト、フェイトテストロッサ。もう私達の前に現れない方がいい。次は手加減できないだろうから。」

な「私は・・・あ！待って！」

私も名前を言おうとしたけどあのフェイトって子はその場からいなくなっていました。

なのはSide Out

当麻Side

俺とユウヤが戦っているといきなりユウヤが攻撃を止めた。

ユウ「どうやらここまでのようだな。」

当「そうみたいだな、というよりフェイトの速さが原作よりもすくないか？」

ユウ「なのはだって原作より回避能力が上がってんじゃないのか？」

当「もしかして、俺達やりすぎてる？」

ユウ「まあ、なんとかなるんじゃないかね？それより早くなのはのところに
へ行ってやれよ。」

当「ああ、それじゃあまたな。」

そして、俺がなのはのところに行くと、

な「ごめん、当麻君負けちゃった。」

当「仕方ないさ、なのははまだ魔法と出会って日が浅いんだ。
これから練習すれば問題ないさ。」

そして、俺、ユーノ、なのははこの後、ずずかとアリサに何とか気
づかれずに部屋に戻る事ができた。

無印編第十二話 温泉はやっぱ良いよね。（後書き）

えっと、今まですみませんでした！（土下座）

な「どうしたの？いきなり。」

いやね、今までこの後書き何か足りないなと思ってたんだよ。

な「で、何なのそれ、また何で最初の土下座につながるの？」

はい、では発表します。

今まで感想を書いていただいていた方々、お礼を申し上げていなくて本当にもうしわけありませんでした！（再び土下座）

な「ええー！そんなに大事なことを忘れてたの！」

本当に申し訳ありません。

な「それじゃ、O H A N A S H Iだね。」

今回は甘んじてO H A N A S H Iを受けます。それではまた次回生きていたら会いましょう。

な「全ての悲しみ、打ち貫け！それじゃ作者さんあっちに行くなの！」

俺、生きてられるかな？

無印編第十二話 分かり合えない気持ち（前書き）

最近ネタが浮かばない。

無印編第十二話 分かり合えない気持ち

なのはSide

私はこの間からずっと考えてた。

フェイトちゃんについて、ジュエルシードを集めてたらまた戦わないといけないのかな？

どうして、あの子はあんなに悲しい目をしてるんだろう？なんであの子は戦うんだろう？

優しいのに生きる希望がない目。

なのはSide Out

当麻Side

最近、なのはは学校にいる間はずっと上の空だ、修行にはちゃんと集中してるから修行は続けている。

だが、今日の昼休みに事件は起きた。

ア「いい加減にしなさいよ！」

アリサが机をドンと叩き怒りをあらわにする。

そう、いつまでも上の空のなのはに対してアリサが切れた。

ア「私達が何か話しかけてもいつも上の空で、そんなに私達と一緒に居るのがいやなら、ずっと当麻と一緒に居ればいいじゃない！」

なのはがジュエルシードやフェイト達の事を考えていたせいで、アリサやずずかと話していても上の空だったからだ。

そして、アリサは怒って何処かへ行ってしまった。

当「スマン。すずか、アリサのこと頼んでもいいか？それと多分今日は一緒に帰れない。」

す「うん、なのはちゃんの事頼んだよ。」

そして、俺はなのはの元に向かった。

当「大丈夫、じゃないみたいだな。」

な「大丈夫だよ。当麻君私は強いもん。」

当「はあ、お前さ俺と最初に会ったときした約束忘れたのか？」
な「え？」

当「俺は言つたよな一緒に強くなるうつて、1人で抱えるなよ。それに誰だつて考え事してる時はあるんだから。」

そついうと、俺はなのはと一緒に昼食をとる事にした。

当麻 Side Out

すずか Side

アリサちゃんは私達がいつもは使わない階段の隅にいた。

す「アリサちゃん、あれは言いすぎだよ。」

ア「うるさい！だってなのは何を言っても上の空、しかも当麻はその理由を知ってるくせに私達に何も相談しないなんて。」

す「なのはちゃん達にも人には話せないこともあるよ。」

ア「それがム力つくのよ！私達は親友なのよ！私達じゃ力になって上げられない事が一番ム力つくのよ！」

す「アリサちゃん、なのはちゃんの事友達として好き？」

ア「当たり前じゃない！」

す「それなら、なのはちゃん達が私達に話してくれるのを待とうよ。」

ア「ええ！いくらでも待ってやろうじゃない！」

ふふ、ホント、アリサちゃんは素直じゃないな。でも、当麻君もか、あゝあ悔しいな。でも、負けないからねなのはちゃん！

すずかSide Out

なのはSide

アリサちゃん達と仲直りできないまま放課後になってしまいました。

ア「行くわよ！すずか！」

す「え？うん、ごめんなのはちゃん。」

な「うん、お稽古だもんね。」

そして、アリサちゃんとすずかちゃんは行ってしまいました。

当「それじゃ、帰るか。」

な「うん。」

そういえば、当麻君と2人つきりで帰るのは初めてだな。
入学してからずっと4人で帰ってたから。

そして、私達は家に着きました。

な「お兄ちゃん、私の部屋に来てくれる？」

当「ああ、いいぞ。」

そして、私達が部屋に入るとお兄ちゃんが私に話しかけてきました。

当「なのは、俺が昼間に行った事覚えてるか？」

な「うん、私達が初めて会ったときに言ったことを覚えてるかって
事だね。」

当「ああ、俺達、人は弱い生き物だ。だが、変に知能があるから誰
かに頼ろうとしない事が多い。それは何よりも愚かな事だ。」

な「でも、魔法の事はアリサちゃんとすずかちゃん達には。」

当「はあ、なのは魔法の事もお前が一番悲しんでいた時の事も知ってる奴が目の中にいるじゃねえか、それとも俺はお前の事支えてやれないのか？」

な「当麻君．．．．うわあああん」

当「今は泣け、心ゆくまでな。」

私は当麻君の胸のに飛び込んで泣きました。

暫く当麻君の胸の中で泣いた私はすっかりしました。

な「ありがとう。お兄ちゃん。」

当「別に構わないさ。それじゃジュエルシード集めに行きますか。」

な「うん！」

なのはSide Out

アルフSide

この世界の食べ物おいしい、というよりユウヤの料理もおいしいから余計においしく感じる。
おっと関係ないことを考えているうちにいつの間にかこんな時間だ。

お姫様を起こしに行きますか。
それと

アル「ユウヤ、一緒にフェイトの様子見に行こ。」

木刀を振ってるユウヤを呼びに行く。

ユウ「ああ、分かった。」

フェイトの部屋に着いたら驚いた。

アル「フェイト、またあまり食べてない。」

最近はずっとそうだった。

フェ「少し食べたよ。」

ユウ「だけど、フェイト今日は広域魔法をやるんだろ？魔力と体力を使っただから、もっと食べて体力を付けないと。」

フェ「大丈夫だよ、私は強いから。」

アル「でも、」

フェ「行こう、早くしないと母さんが悲しむから。」

私は何も出来ないのかい？

なら、私の大切な主、フェイトを守るだけだ。

アルフSide Out

士郎Side

僕は今、桃子と一緒に夕飯の準備をしている。

桃「ねえ、士郎さん最近なのはの様子がおかしくない？」

士「うん、僕もそう思う。でも、僕達に話さないってことは自分で解決したいと思ってるんじゃないのかな。」

桃「そうかもしれないけど、あの子苦しいときも自分の中に抱え込んでんじやう癖があるのよね。」

確かにそうだ、でもその原因を作ったのは僕だ。

僕があの時怪我をしたから、家がいろいろと大変になって桃子も恭也も美由紀もなのは事を構ってあげる事が出来なくなってしまったんだ。

士「でも、当麻と一緒に居るだろ。当麻は絶対になのはを1人にはしない。」

桃「それもそうね。でもなんか悔しいわ、自分の娘なのに相談に乗って上げられなくて。」

士「それは、僕もだよ。でも、僕達の子どもの成長を喜ばうよ。」

桃「そうですね。」

当麻、なのはの事は頼んだぞ。

士郎Side Out

当麻Side

俺となのは、ユーノは街でジュエルシードを探していた。
だが、日も暮れて来たのもうそろそろ帰る事になるだろう。

春へ主、今日は次元震が起こる日だな。ヾ

スへどうするの？ヾ

当へそりゃあ決まってるだろ。俺達が止める。ヾ

春へ俺達？なのはと一緒に止めるのか？ヾ

当へまさか、必要以上の危険な事はさせないさ。もう1人はあのバ
カさ。ヾ

ユ「タイムリミットみたいだね。」

な「そうみたいだね、お兄ちゃんもう夕ご飯の時間だよ。」

当「そうみたいだね。ユーノどうする？」

ユ「僕はもう少し探してから帰るよ。」

な「わかったなの。」

さて、もうそろそろだな。今日は十分に気をつけないとな。

ユーノと別れてから暫くたつと、大量の魔力を感じた。

ユ「魔力を放って強制発動！？間に合え！広域魔法！！」

さてと、今日はちょっと無茶するか。

当麻Side Out

ユウヤSide

まったくほんと無茶するよな。ホントは俺がやればいいんだが、この後のことを考えると今の俺の魔力じゃ少しも無駄にできない。

アル「あいつ等も来てるみたいだよ。」

やっぱな、そういえば、この間ブルーアイズが出たって言ってたな。今日も何かでそうだな。

アル「な、何なんだいアレは？」

そうするとジュエルシードの周りの大地が割れそこからリオレウスが大量に出てきた。

ユウ「アレは俺が何とかするからフェイトとアルフはジュエルシードを取りに行け。」

フェ「大丈夫？」

アル「大丈夫なのかい？」

アルフとフェイトは俺に心配そうな目を向けてくるが関係ない。

ユウ「大丈夫だ。俺にはアイツがいる。」

フェ「そうだね。」

アル「アイツがいれば百人力だもんね。」

さて、今日は無茶をするか。

当麻Side

ジュエルシールドが発動し俺達は現場へ向かったがそこには大量のリオレウスがいた。

ユ「いったいアレは何なんだ？」

な「でもこのままじゃいくら結界を張ってあっても街が大変な事になるよ。」

チツ「今日はあまり魔力を使いたくなかったんだがな、仕方ない竜には竜で行くか。」

当「なのは、ユーノ、あの竜は俺が何とかする。」

ユ「いくら君でもアレだけの数を1人で相手するのは無理だ。」

当「無理じゃない。それに俺にはアイツがいる。」

な「もしかして、この間の？」

当「その通り、というわけだからなのはフェイトって子と思いつきりやって来い今のお前なら負けることはない。自信を持って行け！」

な「うん！お兄ちゃんもがんばってね。」

そついうと、なのはとユーノはジュエルシードの元へとむかった。

当麻Side Out

なのはSide

ユ「なのはジュエルシードが見える？」

な「うん！行くよ！レイジングハート！」

レ『All Right!』

な「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアル19・・・封印！」

私がジュエルシードを封印しようとするや金色の砲撃が放たれました。

それはフェイトちゃんでした。

ユ「よし、こっちの砲撃が封印したみたいだ。なのは、早く回収を。」

アル「させないよ！」

すると、アルフさんが襲ってきました。私とユーノ君はお兄ちゃんに教わった巫門遁甲でかわしました。

ユ「なのは、こっちは任せて。ジュエルシードをお願い！」

な「うん！わかったなの。フェイトちゃん、この間は自己紹介してなかったね。私、なのは、高町なのは。」

アリサちゃんとすずかちゃんとは最初から友達じゃなかった。だけど、互いの思いをぶつけ合って友達になれた。
だから！

な「ねえ、フェイトちゃん、どうしてジュエルシードを集めてるの？私は前にも言ったように誰にも傷ついて欲しくないから集めてるの！」

フェ「前にも言ったけど君に言う義務はない。」

なのはSide Out

三人称Side

フェイトはなのはにフォトンランサーを放つ。

なのははそれをディバインシューターで防いだり巫門遁甲で軌道を

読んで避ける。

そして、さらにフェイトの軌道も読みディバインシューターで足止めをし、ディバインバスターを放つ。

フェイトもソニックムーブでディバインバスターを避け、なのはの背後を取る。

だが、これもなのはに読まれすぐに距離を離されてしまう。

フェーまるでこちらの攻撃全て読まれてるみたいだ。短い間にすごい成長してる。あの男の子が影響してるのかな？

でも、母さんのためにもユウヤのためにも負けられないんだ！」

フェイトはなのはの攻撃を避けながら詠唱を開始した。

フェーユウヤが私に教えてくれた魔法まだ完璧にはできないけど。」

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる。

破道の六十三！雷吼炮！（らいこうほう）」

フェイトはユウヤから教わった雷吼炮を放つ。それをなのはは巫門遁甲で読んでいたがあまりにも早すぎたため避けきれない。

な「ラウンドシールド！」ふう、お兄ちゃんに密度濃いシールドの張り方教えてもらって良かったなの。」

どうやらなのはは当麻に甲縛式OSを応用したシールドの作り方を教わっていたようだ。

な「ねえ教えてよ、もしかしたら私達も手伝えることかもしれないんだよ。」

そういうとフェイトは動きを止めた。

なのははそのまま話し合いをはじめようとしたが、

アル「フェイト！そんな温室育ちのやつの事なんて聞く必要ない！そんなことより早くジュエルシードを！」

アルフの叫びを聞いたフェイトは体を翻しジュエルシードの元へと急降下していく。

それに反応したなのはもジュエルシードの元へと急ぐ。

距離はなのはの方が近い、しかし、スピードはフェイトの方が上だ。よって、ほぼ同時にジュエルシードの元へとたどり着く。

そして、バルディッシュとレイジングハートがジュエルシードに触れた瞬間大量の魔力が流れた。

S i d e O u t

当麻 s i d e

俺はなのはと別れてユウヤと合流した。

ユウ「当麻、さっさと終わらせてあつちに合流するぞ！」

当「ああ、で、ユウヤ、召喚獣いるのか？」

ユウ「ああ、俺にぴったりのかな。」

当「んじゃ、やりますか。」

そして、俺とユウヤはそれぞれの召喚獣を呼び出す。

当「集いし願いが新たに輝く星となる！

光さす道となれ！

シンクロ召喚！飛翔せよ！スターダストドラゴン！」

俺の目の前に魔方阵が現れそこからスターダストが現れる。

ユウ「やっぱ、お前はソイツを選んだのか。なら俺も行くか、王者の鼓動、今此処に列をなす！

大地鳴動の力を見るが良い！

シンクロ召喚！我が魂！

レッドデーモンズドラゴン！」

今度はユウヤの目の前に俺と同じ魔方阵が現れ、レッドデーモンズドラゴンが現れた。

当「やっぱ、お前のエースモンスターを召喚獣にしたか。」

ユウ「お前こそ自分のエースモンスターを召喚獣にしてんじゃねえか。」

当「ま、お互い様って事で、それじゃやりますか。」

ユウ「ああ。」

当「さあ、お前達の罪を数えろ！」

ユウ「気をつけろよ俺たちはかなり強い！」

そして、俺達はそれぞれの相棒と一緒にレウス狩りを始めた。

スターダスト

「シューティングソニック！」

レッドデーモンズ

「アブソリュートパワーフォース！」

当「デイベインバスター！」

ユウ「ウイングスマッシュャー！」

それぞれの必殺技で最後のレウスを倒し、スターダストとレッドデーモンズは帰っていった。

当「ハアハア、ユウヤ、魔力は大丈夫か？」

ユウ「ハアハア、なんとかな。」

すると、なのは達がいる辺りから大量の魔力があふれ出した。

ユウ「チツ、おい！早く行くぞ！」

当「いわれなくても！」

そして、俺達が到着するとなのはとフェイトが吹き飛ばされてきた。俺達は2人受け止めた。思ったよりダメージが酷いな、レイジングハートもバルディッシュもボロボロだ。

このままじゃ結果が持たないな。

当「ストライク、春雨、お前達の全ての演算能力で結果を維持してくれ。」

ユウ「バルウイングと暁もだ。」

デバイスズ

『『『『了解!』『』『』』』』

当「レイジングハートとバルディツシユも待機状態に戻れ。」

レ『マスターを頼みます。当麻。』

バ『マスターを頼む。ユウヤ。』

な「お兄ちゃん、ごめんなさい。ジュエルシード上手く封印できなかったみたい。」

フェ「ユウヤ、ごめんなさい。ジュエルシード暴走させちゃった。」

当「大丈夫だ、今は休めユーノ、なのはを頼む。」

ユウ「フェイトもだ。アルフ、フェイトを頼む。」

ユ「どうするんだ?」

アル「そうだよ。いくらユウヤが規格外だからってアレをどうするんだい?」

当「何、簡単なことさ。な、ユウヤ。」

ユウ「ああ、俺達2人でアレを封印する。」

ユ「何言ってるんだい！？デバイスなしでアレを封印するなんて無茶だ。」

アル「そうだよ、どうなるか分からないんだよ。」

当「確かにデバイスなしはきついか？でも、」

ユウ「俺も此処までやばくなるなんて思ってなかったし、でも、」

俺とユウヤは声を合わせて言う。

当麻&ユウヤ

「「無茶だけど、無理じゃない!!」」

そして、俺達はジュエルシードのどこまで飛ぶ。
俺達はそれを両手で包み込む。

当「なんで生まれ変わったのにお前と両手で握手しないといけないんだ？」

ユウ「フツ、いやならそこで見てろヘタレ。」

冗談を言い合うが、ジュエルシードからの魔力がさらに増してきた。

当「クッ！冗談言ってる余裕ねえな。」

ユウ「そうだな。クソツさっきので魔力がたりねえ。」

俺とユウヤは持てる魔力全てをジュエルシードの封印に注ぐが、さっきの戦闘の影響で魔力が底をつきかけている。

当麻&ユウヤ

「「止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ止まれ！」」

そして、俺達の限界が来たとき漸く魔力の流出は止まった。

ユ「す、凄いデバイスなしでジュエルシードの暴走を抑えるなんて。」

アル「ユウヤは相変わらずだけどアンタも案外規格外なんだね。」

当「ハアハア、褒め言葉として受け取っておくよ。あと、今回はそっちに譲るよ。」

ユ「何言ってるんだ当麻！」

当「ユーノ、今の俺達にはアルフに勝てるヤツはいないんだぞ。なら今回はおとなしく引いてまた次回取り返せばいいさ。」

アル「一応礼は言っておくよ。フェイト、ユウヤ、帰るよ。」

ユウ「ああ、だけど飛べないから俺も運んでくれるか？」

アル「うん、今回は何も出来なかったからね、このぐらいはさせてくれよ。」

そして、アルフは狼形態になり、フェイトとユウヤを背負って帰っていった。

当「さてと、俺達も帰るか。なのは大丈夫か？」

スー

ユ「なのはは寝てるみたいだね。」

当「仕方ないな。」

俺はなのはを背負って家に帰った。
その後、俺は自分の部屋に入った途端俺は倒れた。

無印編第十二話 分かり合えない気持ち（後書き）

やっちまったよ。

当「どうしたんだよ？」

いやね、あまりにもネタが浮かばないからつい、フェイトに破道を使わせちゃったんだよ。

ユウ「まあ、いいんじゃないかね、なのはも巫門遁甲使ってるし、フェイトも他のアニメの技使っても。」

そうかな、ああ感想が怖いよ。

当「はあ、そんなことより今回の謝礼の言葉だろ。」

はい、ユウキさん、感想ありがとうございました。今後もがんばります。

ではまた次回、お会いしましょう。

当麻&ユウヤ

「「全ての悲しみ、撃ち貫け！」」

誤字脱字やご意見ご感想お待ちしております。

無印編第十三話 作戦会議その？（前書き）

今回はめちゃくちゃグダグダです。

無印編第十三話 作戦会議その？

ユーノSide

まさか、レイジングハートが壊れるなんて思わなかった。

レイジングハートはある程度の高出力に耐えられるように作られてたのに、此処までボロボロになるなんて。

やっぱりジュエルシードは危険な物なんだ。

な「ユーノ君、レイジングハート、大丈夫なの？」

ユ「うん、大丈夫だよ。今、自己修復機能をフルでかけてるから、明日には直ると思うよ。」

でも、当麻は大丈夫なの？」

な「うん、お兄ちゃん今回は無茶をしたからね。」

当麻も心配だ、あの後、自分の部屋に入ってから一日中目を覚まさない。

今朝、なのはが当麻を起こしに行ったら、当麻が倒れていた。

デバイスなしで、暴走しかけたジュエルシードを封印したんだ、五体満足なだけましかもしれない。

僕がもう少ししっかりしていればこんな事には、

な「ユーノ君、今、今回の事は自分の責任だっと思ってない？」

ユ「え？どうして？」

な「多分、お兄ちゃんなら自分のことを攻めるなっと思うよ。」

ユ「でも、」

当「でも、だけでも、ないぞ。」

部屋の入り口には当麻がいた。

ユノSide Out

当麻Side

目覚めると目の前には見覚えのある天井があった。

俺には自分の部屋に入った後の記憶がない。

当「どうやら俺は倒れたみたいだな。」

春「すまない、結界維持に想定以上の負荷がかかっていて私達もつい先ほどスリープモードが解けたのだ。」

ス「ごめんなさい、マスター私達がもつとしっかりしていれば、」

当「しかたないさ、俺もパラドックスが介入してくる事を想定してなかったのが悪いんだ。」

さてと、レイジングハートの様子でも見に行くとしますか。

俺がなのはの部屋に向かっていると声が聞こえてきた。

な「ユーノ君、今、今回の事は自分の責任だっと思ってない？」

ユ「え？どうして？」

な「多分、お兄ちゃんなら自分のことを攻めるなっと思うと思うよ。」

ユ「でも、」

当「でもも、だけでも、ないぞ。」

どうやら、ユーノは自分のことを攻めていたようだ。

ユ「当麻、大丈夫なのか？」

な「お兄ちゃん、どこか調子に悪いところない？」

当「ああ、特に異常はない。ユーノ、今回は俺が考えなしに行動した結果だ。だからお前の責任じゃない。」

ユ「でも、」

当「はあ、いい加減にしろよ。ユーノ、何度も言ってるだろ、今回は俺の責任だ。だから必要以上に自分を責めるな。」

それに俺達は自分の意思でジュエルシードを集めてるんだ。今回の様な事が起きることも覚悟している。」

な「そくだよ。ユーノ君、レイジングハートもちゃんと直るんだから。」

ユ「うん、分かったよ。」

はあ、ホントこの世界の人間は頑固者が多いな。
ま、そこが好きなところの一つなんだがな。
多分、あつちは一端庭園に帰ってるんだろうな、パラドックスに取り込まれないといいけど。
そして、ヴェーダに呼ばれている俺はソレスタルビーイングに向かった。

当麻Side Out

ユウヤSide

アル「ユウヤ、本当に大丈夫なのかい？」

ユウ「大丈夫だ、それよりフェイトは大丈夫なのか。」

アル「うん、ユウヤほどじゃないけど魔力を大量に使ったからね、そっちの方が心配だよ。」

ユウ「そくだな。」

俺はあの後アルフの背中で気を失ってついさっき目を覚ました。

ユウ「そくだ、アルフ。今日だったな、母さんのところに行くのは。」

アル「そうだよ、でもほんとどうしちゃったんだろうね。昔はあんなに優しかったのにね。」

ユウ「そうだな。」

本当は原因も分かってるんだけどな。でも、俺にはまだ何も出来ない。

なら、今は俺に出来る事をするだけだ。

フェ「ユウヤ、アルフ、大丈夫？」

ユウ「ああ、フェイトこそ大丈夫か？」

フェ「うん、私は強いから。」

アル「私も大丈夫だよ。というより、昨日は私何もしてないから。」

俺は自分の机の引き出しから2つのお守りを取り出し2人に渡す。

アル「何なんだい？これは？」

ユウ「これは俺が作ったお守りだ。2人がどこに行っても無事に帰ってこられるようにな。」

今、2人に渡したお守りはブリーチで一心がコンに渡したものを俺が改良したものだ。

フェ「でも、なんで？」

ユウ「フェイト、昨日俺達があそこに行かなかったら、自分で封印するつもりだっただろ。」

フェ「え？どうして？」

ユウ「はあ、やっぱな、いつもお前は無茶をするんだから。ちゃんと帰ってこられるように渡したんだよ。」

アル「それなら私よりもアンタの方が必要なんじゃないの？」

ユウ「俺は大丈夫だよ。俺は。」

フェ「でも、嫌だよ。ユウヤもちゃんと帰ってきてくれないと。」

ユウ「分かってるって。」

そして、フェイトとアルフは庭園へ、それを見送った後ヴェーダに呼ばれたため俺はソレスタルビーイングへと向かった。

ユウヤSide Out

当麻Side

ヴェ「お久しぶりです。ファーストマスター」

当「そうだな。」

ちなみに、ヴェーダは俺の事をファーストマスター、ユウヤのことをセカンドマスターと呼んでいる。

当「ヴェーダ、庭園の監視は進んでいるか？」

ヴェ『はい。ですが、何分ジャミングが酷くあまり進んでいません。』

すると、ユウヤがやってきた。

ユウ「相変わらず此処はでかいな。」

当「ま、外宇宙航行艦だからな。仕方ないだろ。」

ユウ「分かってるよ。」

当「早速で悪いんだが、庭園の方は何か変わってるところはあるか？」

ユウ「特にはないな。あと、アルフとフェイトにはパラドックスに取り込まれないように対策はしておいた。」

当「対策って何をしたんだ？」

ユウ「ブリーチで一心がコンに渡したお守りがあるだろ。その改良版さ。」

当「そうか。それがあるなら多分大丈夫だろう。で、ヴェーダ俺たちを呼び出した本当の理由は何なんだ？」

ヴェ『はい、パラドックスの形態はマスター達の記憶から選んでいるというのは分かってますよね。』

当「ああ、神もそう言ってたしな。」

ユウ「で、それがどうしたんだ？」

ヴェ『はい、先ほどマスター達が戦ったりオレウスを詳しく調べたところ、殆どが炭素で出来ていました。』

ユウ「それがどうした？生物ならおかしくないだろ。」

当「そうだよな、しかも何で俺たちの記憶のは．．．．まさか！

ヴェ『ファーストマスターは気づきましたか。』

ユウ「何なんだよお前らどうしたんだよ？」

当「俺たちの記憶から選んで、しかも炭素で出来ているんだったらアレを選ぶ可能性があるって事か？」

ユウ「まさかアレって、もしそうなら、最悪じゃねえか。」

ヴェ『はい、だから何か対策をと思ひましてマスター達を呼んだわけです。』

当「で、その対策も考えてあるのか？」

ヴェ『はい、2つあります。まず1つはマスター達のデバイスに”コレ”を組み込もうかと。』

すると、俺たちの目の前に1ずつモニターが現れた。

そこにはこの船と同じ名前の武装組織が使っていた武器の動力炉に

似たものがあつた。

ユウ「いいのか？コレ入れちまってしかもコレって思いつきり質量兵器だろ。」

ヴェ「大丈夫です。コレはマスター達の魔力を増幅するためのものですから。」

当「ってことはコイツ単体では何も意味がなさないのか？」

ヴェ「はい、システムなどはいろいろと参考にしましたがコレ単体では魔力は作れません。」

ユウ「システムを参考にしたって事はアレもできるのか？」

ヴェ「はい、できますよ。」

当「そうか。で、コイツを組み込むにはどれくらいかかる。」

ヴェ「後はマスター達のデバイスに組み込むだけです、一時間ほどあれば。」

ユウ「え？デバイスってそんなに早く改造できたっけ？」

ヴェ「私を舐めないでください。」

当「まあ、神が作ったものだしな。当たり前かそれじゃあストライクを頼む。」

ユウ「突っ込む気うせたよ。バルウィングも頼むぜ。」

そして、俺とユウヤはストライクとバルウィングを八口（物理的な作業をさせるために100体ほど作ってある。今後増産予定）に渡した。

当「それで、2つ目の対策は何なんだ？」

ヴェ『はい、考えたくはありませんが、もし魔法では彼らに対抗できなくなった場合私たちにはトレミーしか対抗策はありません。』

当「質量兵器か。」

ヴェ『はい、トレミー以外の質量兵器の製造、それが2つ目の対策です。』

ユウ「仕方ないな。そうならないようにしたいが多分今あいつ等に対抗できるのは俺達だけだからな。」

当「だが、物資はどうするんだ？」

ヴェ『大丈夫です。神が私を作る過程で大量の物資を私に搭載してくれました。』

当「大量につてどのくらい？」

ヴェ『 6×10 の二十三乗も以上のEカーボンですね。それ以外にもいくつかありますが。』

当「まさかの1mol中の分子の数！」

ユウ「そんなにも入るのかこの船！」

ヴェ『正確には私の船の中から入れる虚数空間にあるんですけどね。』

当「そうなんだ。で、何作る？」

ユウ「うーん、やっぱりアークエンジェルは欲しいな。」

当「だな、後は今後ゆっくり考えていこうか。」

ユウ「そんなに、裕著にかまえていていいのか？」

ヴェ『大きすぎる原作ブレイクは彼らにもデメリットにしかならないので大丈夫だと思いますよ。』

ユウ「そくだといいがな。そだ！いい事考えた！」

当「どうしたん？」

ユウ「えつとな……。」

ユウ「俺とヴェーダに自分の考えを教えてくれた。」

当「それなら戦闘機が必要だな。」

ユウ「それならVF25を作ってくれ。」

ヴェ『わかりました。どうやらストライクとバルウィングの改造が終わったみたいですよ。』

当「ストライク違和感はないか？」

ス「バッチリ！大丈夫よ。」

ユウ「バルウイングはどうだ？」

ウィ「私も大丈夫です。」

そして、今後の予定を再度確認し、俺たちはそれぞれの家へ帰っていった。

無印編第十三話 作戦会議その？（後書き）

やっちまったよ。

当「盛大にフラグを立てたが大丈夫か？」

分らない。たぶん今以上にグダグダになりそう。

当「なら、立てるなよ！」

だって、普通にやったら原作ブレイクにならないんだもん。

当「はあ、ホントに大丈夫なのか？この作者。」

リリカルマジカル頑張ります！

当「キモイはこの駄作者！スネークバイト！」

ギヤアアアアアアア

当「ふう、話は変わりますがサイバスターさん感想ありがとうございました。それではまた次回をお楽しみに！
全ての悲しみ撃ち貫け！」

無印編第十四話 K・Y・登場！（前書き）

久しぶりの投稿です。

無印編第十四話 K・Y・登場！

三人称 Side

ここは地球付近の次元の海だ。

そこでは1隻の銀色の戦艦が地球に向かって航行していた。

？「皆、今回の旅は順調？」

その戦艦のブリッジの艦長席と思われる席には1人の女性が座っていた。

？「はい、現在第3船速で航行中現地まであともう少しです。」

オペレーターはいたって順調と答える。

オペレーターその？

「また、先日の小規模次元振以外特に目立った動きはありません。」

オペレーターその？

「しかし、2組の探索者が接触する確立は高いです。」

？「失礼します。リンディ艦長、お飲み物をお持ちしました。」

すると後ろの扉から1人の女性が入ってきた。

そして、飲み物をリンディと呼ばれた女性に渡した。

リ「ありがとう、エイミィ。さて、いくら小規模とはいえ次元振はちよつと厄介ね。」

いそいで現地での調査を始めないといけませんわね。頼みますわよ、クロノ。」

？「分かっています。僕はその為にいるのですから。お任せください。艦長。」

Side Out

アルフSide

聞こえる、聞こえてしまっ、もう嫌だ！

フェ「う！あ！うあ！」

？「たった4つ？これはあまりにも酷いわね。フェイト。」

何でだよ！何でこうなっちまったんだ。
あんなに優しかったのに何で？
リニスも何も見てないような態度だし。

プ「いいフェイト。お前は私の娘。大魔導師プレシア・テストロッサの1人娘。
不可能な事なんてあつてはいけない。たとえどんなことでも。」

フェ「はい、母さん。」

プ「こんなに待たせたのに、成果がコレだけなんて母さんは笑顔であなたを迎えるわけにはいかないの、
分かるわよね。フェイト。」

フェ「はい．．．．母さん。」

プ「だから覚えて欲しいの。もう二度と母さんを失望させないように。」

フェ「う！ああ！うああああ！」

どうしてだよ。ちゃんと言われたもの持ってきたじゃないか！

暫くしてフェイトの悲鳴が止むとフェイトが傷だらけで出てきた。

アル「フェイト！！！」

フェ「大丈夫だよ。アルフ。」

アル「大丈夫なもんか！こんなボロボロで！」

フェ「大丈夫だよ。私は昔の優しい母さんに戻ってほしいんだ。」

アル「フェイト．．．」

フェ「行く、アルフ。今度は失敗しないように。」

アルフSide Out

フェイトSide

私たちは地球に戻ってきた。

フ「バルディッシュ大丈夫？」

バ「Recovery complete」

フ「うんそうだね、」

バルディッシュも直った、ユウヤもアルフも手伝ってくれる。
後は私が頑張るだけ。

フ「行くよ、アルフ！ジュエルシードが近くにいる。」

ア「うん、近くに目覚めそうな子がいる。」

ユウ「それじゃ行くか。」

フェイトSide Out

なのはSide

学校が終わってユーノ君と待ち合わせしてるの。

な「ユーノ君」

当「レイジングハート直ったんだ。」

な「レイジングハート、また私と頑張ってくれる?」

『Of course, My muste.』

そして、ジュエルシールドが発動したのを感じた。

なのはSide Out

当麻Side

俺たちが現場に着くと、ジュエルシールドと木が融合していた。

俺たちがバスターを放とうとしたら、後方から雷撃が木を襲った。それはフェイトの攻撃だった。

ユウ「やっぱフェイトの攻撃じゃ通らないか。」

するとその後ろからユウヤがやってきた。

当「今までで一番硬いな。」

すると木が俺たちに向かって攻撃をしてきた。

ユウ「チツ、火遁・豪火球の術!」
か・とん・こ・う・か・き・ゆ・う・の・じゆつ

すると、ユウヤが忍術で俺たちを襲ってきた枝を焼き払った。しかし、すぐに木は再生した。

ユウ「チツ、燃やしてもすぐに再生するか。」

当「しかも、ご丁寧にバリアまで張ってやがる。」

ユウ「当麻、アレ使うか？」

当「まだ早い、今使ったら局の奴らに俺たちの関係がバレちまう。」
「なのは！今から俺たちがバリア以外を焼き払う！したらバリアを撃ちぬけ！」

ユウ「フェイトもだ！いいな！」

フ「な

「うん！」

そして、俺は黒雛をOSし、ユウヤは印を結ぶ。

ユ「合わせろよ、当麻。」

当「お前こそ、タイミング外すなよ。」

ユウ「火遁・霞炎舞の術！」
かとん・かすみえんぶのじゆつ

当「鬼火！」

そして、俺たちは周りの木を完全に燃やし尽くした。

な「デイベインバスター！」

フ「貫け、豪雷！サンダースマッシャー！」

なのはとフェイトが同時に砲撃を放った。しかしバリアにひびが入

るだけで完全には打ち抜くことができない。

当「俺達も行くぞ！」

ユウ「ああ、分かってらあ！」

当「ストライクバスター！」

ユウ「打ち砕け水神！ウォータースマッシュャー！」

そして、俺たちの砲撃も加わり耐え切れなくなったバリアは砕けそのままジュエルシードを封印した。

当「ジュエルシードはそつとしておいたほうがいいかもな。」

な「うん、レイジングハートもバルディッシュもお兄ちゃんも傷つくのは嫌だから。」

フ「でも、私は譲れない。」

な「私はフェイトちゃん達とお話しただけだけど、私が勝って、甘ったれてなんかないって分かったらお話し聞かせてもらうから。」

するとなのはとフェイトは互いのデバイスを構えた。

当「もうそろそろだな。」

ユウ「俺はジュエルシード回収と離脱の準備をするぜ。アイツはお前に任せた。」

当へ了解」

そしてなのはとフェイトが勝負を始めようとした時二人のデバイスは何者かの手によって受け止められていた。

？「時空管理局。クロノ・ハラウン執務官だ。此処での戦闘は禁止されている。直ちに武装を解除してこちらに来てmグハッ」

全てを言い切る前に俺はクロノを殴った。

ユウ「逃げるぞ！フェイト、アルフ援護を！」

そして、どこからかアルフの援護射撃がクロノの周りに着弾した。その隙にフェイトはジュエルシードを取りに行こうとしたがそれに気づいた体制を立て直したクロノがフェイトに攻撃をした。それをユウやは防いぎ、そのままフェイトとジュエルシードを抱えアルフと一緒に離脱した。

ク「君は何をしたのか分かってるのか？」

当「何って怪しい奴が来たからなのはを守るために正当防衛をしただけだ。」

ク「怪しい奴って魔法を使ってるくせに管理局を知らないのか？」

当「ああ、知らないな、というより自分の常識が相手にも通用するとは限らないだろ？」

ホントは知ってるんだけどね。

ク「クツ、ならさっきの公務執行妨害で君を逮捕する！」

はあ、頭固いな、もう少し柔軟に考えられないのかなこのK・Y・は。

当「やれるものならやってみなよ。」

ク「クツ、ブレイズキャノン！」

クロノは早速砲撃を撃って来た。俺はそれを右手をかざした防御魔法も展開せずに。それを見たのはが叫ぶが砲撃が右手に触れた瞬間何も無かったように砲撃が消えた。

ク「いったい何が！」

当「自分の常識だけで物事を考えているからこうなるんだ。」

ク「いつの間に！」

俺は写輪眼でコピーした瞬歩でクロノの後ろを取り春雨をクロノの首元に突きつけた。
もちろん刃はつぶさずに。

するといきなり通信が入った。

？『そこまでで止めて貰えませんか？』

当「アンタは？」

？『私はリンディ・ハラウンそこにいるクロノ・ハラウン執務官の上司であり彼の母親です。』

当「わかりました。ではそちらへ俺たちを連れて行ってください。」

リ『いいんですか？』

当「ユーノはあなた達のことを知っているみたいだしどうせ俺とユーノだけで行くって言ったのならがうるさくなるだろうしな。」

リ『わかりました。』

そして、俺たちはアースラに移動した。

アースラに移動した俺たちはクロノの案内で廊下を歩いていた。

ク「一応君たちのバリアジャケットを解いてくれ。」

な「は、はい、わかりました。」

そして、なのはは素直にバリアジャケットを解除した。だが俺は解除しなかった。

ク「何をやっている。早く武装を解除しろ！」

そしてクロノは俺にS2Uを向けてきた。

当「ふざけんなよ、いきなり攻撃してきた組織の船に抵抗無しに来てやったってのになんで武装を解除しなきゃならないんだよ。

なんならやるか？俺ならこの船を沈めるのに5分とかからないぜ。」

そう少し殺気を放ちながら言うのと1人の女性がクロノの後ろから歩いてきてクロノの頭を持っていた資料で叩いた。

？「こら！クロノ君の対応がこんなにもややこしい状況を作ったんだからもう少し柔軟になりなさい！」

ク「う、エイミィ僕が悪かったからそんなにも叩かないでくれ。」

あれ、エイミィってこんなキャラだったけ？

当「まあ、俺も少し大人気なかったから今回はあなた達の顔を立てると思って解除しましょう。」

そして俺はバリアジャケットを解除し。ただしスプリットオブファ
イアをOSしているが。（いつもとちがって巫力だけでOSしている
ので霊感がある人だけにしか見えない。）

ク「それよりそのフェレットは本当の姿じゃないんじゃない？」

ユ「そうだった。暫くの間この姿だったから忘れてたよ。」

するとユーノがもとの男の子の姿になった。もちろん俺はこの後何
があるのかわかっているのでエイミィさんに耳栓を渡して自分にも
耳栓をした。

[illegible]

もちろんなのは叫びをまじかで聞いたユーノとクロノは鼓膜にダメージを受けていた。いい気味だ。

ユ「あれ？始めてあつた時つてこの姿じゃなかったけ？」

その言葉になのはは凄いい勢いで首を横に何度も振った。そんなに振って大丈夫なのか？ってくらいに。

ユ「え〜つと．．．．．ごめん最初からこの姿だったね。」

当「というところでそのK・Yと一緒に消えとけ。」

ク「K・Y って誰の事だ？」

エ「クロノ君知らないほうがいいこともあるんだよ。」

「そういうこと。ってことで燃えろ！ユーノ。」

ユ「ちよ、此処でそれつかつたらダメ！」

当「チツ、家に帰つたら潰す。」

そういうとユーノは廊下の隅で震え始めた。どうやらこの間のプールから帰った後に俺がしたO H A N A S H Iを思い出したそう
うだ。

すると艦長室の前につくとエイミーさんが耳栓を返してくれた。

エ「ありがとうね、え」と、

当「高町いえ、あなた達には上条当麻と言ったほうがいいかな？」

するとユーノ、エイミィ、クロノ、は目を見開いた。なのはに至ってはなんで俺が旧姓を名乗ったのかわかっていない状況だった。

当「詳しい話はその部屋で、さっき出てきたリンディさんが待っているでしょう？」

そして俺は驚いている4人を残して部屋に入って行った。そこにはリンディさんが例のリンディ茶を作りながら畳の上に座っていた。つかなんでこの船に畳や獅子脅しがあっただんだ？

当「始めまして、リンディさん。」

リ「いえいえ、うちのクロノが迷惑をかけました。」

そして俺はこれまでの事を話した。

リ「そう、あなたがジュエルシートを発掘したのですか。」

ユ「はい、ですから自分で回収を。」

リ「立派だね。」

ク「しかし、無謀でもある。」

うん相変わらずの頭の固さだな。

当「だが今回はあなた達の落ち度では？」

そついうとクロノはまた飛び掛ってこようとしたがエイミィにまた頭を叩かれ撃墜された。ほんと尻に敷かれてるな。

リ「それはなぜ？」

当「ユーノが言っていたようにジュエルシードの輸送を依頼したのはそちらの船なのでしょう？」

それならなんで長距離攻撃を想定した装備や体制をしいてなかったのですか？ジュエルシードはとても危険なものなのでしょう？」

それをねらう犯罪組織がないほうがおかしい。そう思いませんか？リンディ艦長？」

そついうとさすがのリンディさんも顔が少し引きつっていた。

リ「すみませんでした。確かに今回の騒動の発端はこちらの落ち度です。ですから今後のジュエルシードに「ええ、こちらも協力させていただきますよ。」え？」

俺がリンディさんの言葉をさえぎって言うところリンディさんは目を見開いた。

当「あれ？もしかして自分達だけで解決をしようと思っていました？今回の事件はそちらの怠慢が招き、

さらにどうせ先日の次元震を感知して漸くくるような組織に全権を渡せると思ってるんですか？」

それに俺もなのはもユーノも1人でここにいる武装局員一個中隊と同等以上の実力を持っているんですよ。

そちらにとつても実力者の協力も得られるし尻拭いもできるので――石二鳥なのでは？」

そこまでいうとリンディさんは観念したのか両手を挙げてくれた。

リ「ええ、わかりました。今後ジュエルシードの回収の協力を要請します。」

当「ええ、ただし黒色の魔導師達のほうの捜査は俺にまかせてください。」

リ「わかりました。黒色の魔導師達のほうの全権はそちらに渡します。」

当「これで契約成立ですね、よろしくお願いしますね。リンディさん。」

そして俺たちは握手をした。

リ「ええ、こちらこそお願いしますね。えーっと」

当「そういえば俺の名前言っていませんでしたね。今は高町当麻、旧姓は上条当麻です。」

するとやはりリンディさんもクロノ達と同様に目を見開いた。

リ「上条ってもしかして、あなたの両親の名前は、」

当「はい、上条刀夜と上条詩菜です。」

ク「ちょっとまってさつき君は管理局の事は知らないって。」

当「執務官なら本当の事が嘘の事かは見抜こうな、なのはを守るためって言うのは本当だが。」

そういうとクロノは拳を握り締め、なのはは少し顔が赤くなっていた。

リ「そうなんですか、さつき旧姓はと言っていました但し失礼ですけどやはりお2人は？」

当「ええ、ある魔導師組織に殺されました。」

そういうと今度はクロノがこちらに近づいてきた。

ク「どうして魔導師組織だと？」

当「教えても良いけど少しきついからなのはは出て行ってくれ。」

な「大丈夫だよ。それより当麻くんの方が心配だよ。」

当「まず、春雨もストライクも俺の両親死ぬ直前に母から貰ったデバイスです。ストライクの方はリンディさんも知っているでしょう？春雨は親父が局を辞めた後何かあったときに何か出来るようにと俺のために作ってくれたデバイスです。」

すこし春雨については嘘をついて説明した。

当「大丈夫だ。春雨頼む。」

春『了解した。』

そして俺は春雨に頼んであの日警察が来る前に取った写真をディスプレイに表示した。もちろんパラドックスの奴らにばれないようにジャミングをしっかりとかけて。

それを見たなのは口を押さえて部屋の外へ走って行った。エイミイもなのはを追いかけて外へ出て行った。やっぱなのはにはきつかったな。

リ「まさか当麻さんはこの時ここに？」

当「いえ、この日はたまたまなのはの家にいたので犯人とは接触していません。たぶん接触していたらここにはいないでしょう。」

春『はい、そして私が調べると刀夜と詩菜の魔力のほかに微量ながら魔力を感知しました。』

リ「そう、でもどうして刀夜さん達が受け持った事件の犯人や犯罪組織は全て壊滅したはずなのに。」

ク「だがそれよりも僕達でさえあの人たちが局を辞めた後どこにすんでいたのかわからなかったのに何故犯人たちはわかったんだ？」

当「それは俺にもわからない、あとすみませんが親父たちとは何かつながりが？」

リ「刀夜さんたちはもともと私の部下だったの。」

ク「僕の物心がつく前に退局してしまったが前任の執務官から話を聞くと全員揃って彼らほど優秀な執務官はいなかったようだ。」

リ「ええ、刀夜さんと詩菜さんは犯罪者逮捕も含めて管理局の汚職摘発数も歴代最高なの。」

当「そうですか、どうやら親父たちはいまでも局に強い影響を与えていたんですね。」

そして俺は今回のデータをアースラのデータベースから完全に消すとなのはを探しに外に出て行った。

そして暫く艦内を歩いているとなのはが廊下の隅で震えながらしゃがんでいた。そしてエイミイがなのはの背中をさすっていた。

当「エイミイさん後は俺が。俺についての詳しい話はクロノ執務官に聞いてください。」

エ「うん、わかった。」

俺はエイミイをクロノのところへ行くように言うとなのはに近づいた。

当「ごめん、なのは少しきつすぎたな。配慮が足らなかった。」

な「うんうん、私こそこんなに辛い事を体験したって知らずに当麻君のこと、」

当「大丈夫だよ、それになのはが俺のことを慰めてくれたから俺はここにいるんだ。」

な「当麻君、うえええん。」

そして泣き出したなのはの背中を撫でて泣き止むまで俺はそこでなのはの傍にいつづけた。

無印編第十四話 K・Y・登場！（後書き）

当&ユウ

「「お前の罪を数えろ！」」

ギヤアアアアアア

当

「たく、こんなにも読者さんを待たして何やってたんだよ？」

ユウ

「こんな駄作読んでもらってるかどうかあやしいところだな。」

う、えっとリアルなほうでいろいろとあって精神的にまいってしま
って軽く鬱状態になっていました。

当

「はあ、大丈夫なのか？」

なんとか回復してきてはいるよ。

ユウ「まあそれならいいんだが。」

では感想を書いてくれた人に感謝を、

サイバスターさんブラマジとブラマジガール並びにエターナルを送
っていただきありがとうございます。こんご本編で出てくるかは不
明ですが何とか出していけたらなと思っています。

当

「俺からも感謝します。」

ユウ

「これからも応援してくれよ。」

最近感想が少なくてきついです。ではまた次回

ユウ&当

「「全ての悲しみ撃ち貫け！」」

無印編第十五話 海上での決戦（前書き）

今回あの名台詞が出ます。あと当麻の両親について少し分かります。

無印編第十五話 海上での決戦

なのはが落ち着いた今アースラのブリーフィングルームでは会議が開かれていた。

リ「本日00:00より本艦の任務をロストログア・ジュエルシードの搜索、回収とします。、そして今回はジュエルシードの発掘者のユーノ・スクライアさんと

私たちが到着するまでジュエルシードを集めていただいた高町なのはさんと高町当麻さんが協力者として合同で任務にあたります。」

ユ「ユ、ユーノ・スクライアです。よろしくお願いします。」

な「た、高町なのはです。よろしくお願いします。」

当「高町当麻です。よろしくお願いします。黒と赤の魔導師の搜索は俺が担当します。もしジュエルシードの回収中に接触したら直ぐに俺に連絡してください。」

俺はびびることなくここにいる魔導師に話した。そして何人かの魔導師が俺をにらんできた。

当「もちろん俺みたいな新参者が搜索の中心になるのは納得できないでしょう。ですから、」

そう言っていると俺はストライクを取り出した。

当「手っ取り早く殺り合いましょう。リンディさんどこか無人世界でならいいですね？思ったより参加人数多いですから。」

するとリンディさんは素敵な笑顔で、

リ「ええ、おもいつきりやってくださいね。」
「当麻さんが上条夫妻のお子さんと言うのは私とエイミィ、クロノしか知らないので手加減無しで思いっきりぶちのめしちゃってください。」

当「了解、手加減無しの全力でいかせてもらいますね。」

そして俺と一個中隊（12人）の魔導師が近くの無人世界に飛ばされた。

当「それじゃあさっそくやりますか。」

すると一斉に俺に向かって魔力弾が放たれた。俺はそこから後方へ離脱しエールモードにして12個の魔力弾を放つ、

04「何！無詠唱でこの早さだと！」

思ったより魔力弾が早かったらしく隊の半分の隊員に直撃それをカバーしようした隊員にも更に新しく作った魔力弾を放つ、

03「く、なんて正確な攻撃なんだ。」

01「もらった！」

俺が魔力弾の制御に集中していると踏んだ隊長らしき人が俺の後ろから魔力刀を生成し振り下ろしてきた。

当「うん、いい判断ですね。ですけど、隊長が一番前に出てきたら

ダメじゃないですか。あなたが落とされたら誰が指揮をとるんですか？」

俺は向きも変えずにそのままシールドでその攻撃を受け止めた。すると周りの隊員が全員で俺にバインドをかけてきた。俺はそこで目を閉じまた開いて俺を狙っている魔導師全員の目を見つめた。そして直ぐにその隊員たちは砲撃を撃ってきた。

仲間に向かって、そして砲撃を放った隊員は1分間の間仲間を狙い続けた。

01「おい！お前ら何をしている！」

そして残る隊員は砲撃を撃ってきた三人と隊長だけになった。

当「いい悪夢^{ゆめ}は見れましたか？」

01「なんで貴様がその台詞を知っている！？」

どういうことだ？コレは美堂蛮の台詞でこの世界には存在しないはずだが。まあいいさっさと残りの奴らもやりますか。

当「バインドシューター、シュート！」

そして俺は新たに4個の魔力弾を生成し残りの隊員に放った。さすがに此处まで残った隊員だけあって簡単に避けられてしまったがそ

これからシューターがネット状に変化し
全員を拘束した。

当「終わりです。クロスファイアーシユート！」

そして俺が放ったシューターは全て命中、そのまま全員気絶し模擬
戦は終了した。

俺がアースラに戻ると魔導師部隊の皆から質問攻めにあつた。

魔導師その？

「なああのシューターがバインドになつた奴つてどうやったんだ？」

魔導師その？

「それより一番隊の隊長の斬激をどうやって察知したんだ？」

するとひとりの古参の魔導師から質問があつた。

古参

「なぜ、君がストライクを持っている。そして俺の憧れの人と同じ
目を何故お前が持っている。」

当「えっと、リンディさん、邪眼って誰か他にも持ってた人がいた
んですか？」

リ「ええ、あなたのお父様よ。」

へ？なんでこの世界に元からあつたの？もしかして

当「あの〜何か母さんにもレアスキルあったの？」

リ「ええ、相手の思考が読める脳量子波とレアスキル以外の魔法を見ただけでコピーできる写輪眼と他にもいくつかあったわね。たしか詩菜さんはミセスレアスキルなんて言われてたわね。」

よし、今度神に会ったら殴っておこう、いくら平行世界とはいえやりすぎだ。

古参

「艦長、さっきから親父やら母さんやら言っています、もしかして、」

当「ええ、俺の旧姓は上条、どうやら俺の両親は局でも有名だった事は本当だったんですね。」

古参

「ああ、そうだが旧姓と言うのは？」

当「リンディさん、俺の両親が殺された事は秘密で、死んでしまったことだけを。」

リ「わかりました。」「上条夫妻はすでに他界しています。」

当「ええ、でも今は新しい家族がいますから大丈夫ですよ。」

そして、俺が使った魔法について説明してそこを離れた。だが

な「当麻君？何でいきなりあんな無茶をしたのかな？かな？」

えつとなのはさん？その両手に構えたレイジングハートはなんですか？

当「えつと、あのですねー応他の人たちに舐められないようですね。って聞いてます？はのはさん？」

な「うん、わかってるよ。当麻君、すこし O H A N A S H I しようか。」

当「えつと、ちょ、待って」

な「問答無用なの！」

そのまま俺はなのはと俺に宛がわれた部屋に連れて行かれた。ちなみにその後俺がどうやって家に帰ったのか記憶がないんだが？なぜだろう？思い出そうとすると頭が痛い。

アースラとの合同捜査が始まって一週間残りのジュエルシードは6つになった。

アレからフェイトたちとは会えていない。

そして今俺はアースラから俺が持ち込んだ端末（親父と母さんからの形見の1つということにしてある）でヴェーダとリンクして例の魔導炉事故について調べていた。

当「やっぱり管理局の上層部が関わっていたか。」

ス「そうみたいね、理由はプレシア女史が邪魔だった。って所かしら。」

春「そうだろう、だが物的証拠がないし、なぜ邪魔だったんだ？」

ヴ「いえありますしコレを見れば何故邪魔だったかわかります。」

するとヴェーダから通信が入った。

当「見つかったか？ヴェーダ。」

ヴ「はい、まずはこちらを、これは実験時に使われた材料の発注書と納入書です。」

それを見た俺は驚愕した！

当「これは！安全装置に必要な材料全てが暴走を起こす材料に変更されている。」

ス「しかもコレを容認したのはプレシア女史の上司と管理局側の主任とその上司、でもこれならまだミスで逃れられるわよ。」

ヴ「続いてコレを、」

そして次に二つの設計図を出してきた。

当「これは、両方ともプレシアが設計した魔導炉の設計図じゃないか？コレは確か凍結されてるはずだろう？」

ヴ『いいえ、ファーストマスター、右側の設計図を見てください。』

もう一度俺は右側の設計図を見た。するとそこには

《次世代型次元航行船駆動炉》

特許所持者

管理局技術開発所

当「何！まさか管理局はそのままプレシアの設計図を使っているのか。」

ス『それで最初の特許所持者のプレシア女史に多額の特許料を払いたくなくて局の上層部が事故を起こしてプレシア女史を表舞台から消したという事ね。』

春『主このことをクロノたちに話すのか？』

当「まだだ、最後のジュエルシードを回収するまでは教えない。」

ヴ『わかりました。これはレベル9のデータベースに保存しておきますね。』

当「ああ、頼む。」

そして俺はブリッジに行こうとするとアラートが鳴った。

俺がブリッジに入るとなのはとユーノも同時に入ってきた。そしてモニターには海上で戦っているフェイトとユウヤがいた。

当麻Side Out

ユウヤSide

今フェイトは原作通りに海に向かって魔力流を流そうとしている。ちなみにすでにアルフが結界を張ってくれている

フ「アルカス・クルタス・エイギアス、煌めきたる天神よ、今、導きのもと、降り来たれ、バルサル・ザルエル・ブラウゼル撃つは雷、響くは轟雷、アルカス・クルタス・エイギアス・・・サnderレイジ！」

そしてフェイトが海に向けて魔力流を放った。

さてと、フェイトの残りの魔力も少ないし俺が前に出ますか。

ユウ「アルフ！フェイトと下がって回復魔法をフェイトにかけろ。」

フ「え？何言ってるのまだ私は「飛ぶのもやっとの癖に前に出るな！」・・・う、うん」

少し強く言い過ぎだな、まあそこはアルフのフォローに期待しよう。

ユウ「さてと、暁、さつさとやるぞ。」

暁『了解マスター』

俺は暁をクラウンモードにして水で出来た竜に突っ込んでいった。

ユウ「ホントは土遁を使いたいんだが周りは水しかないし、相手は無尽蔵の魔力があるから雷遁でコントロールを乱すのは無理だろうな、

はあ、真っ向勝負で水遁でいくか。」

暁『了解、印のサポートをします。』

ユウ「よし、行くぞ！水遁・水鯨弾すいとん・すいこうだんのじゅつの術」

俺は突っ込んできた竜に向かって鯨の形をした水の塊をぶつけた。

ユウ「ふう、やっぱり相打ちか。そりゃそうだな同じ水だもんな。」

すると次は大量の竜が俺を囲んできた。

ユウ「チツ、水遁・水衝波すいとん・すいしょうは！」

俺を中心に円状に津波を発生させ竜を消す。だが、その一部の津波のコントロールが奪われ俺に向かってきた。

俺は衝撃に備え構えたがその津波はどこから放たれた黄色の砲撃が津波を破壊した。

ユウ「何をやってる、フェイト、下がってるっていったろ。」

フ「大丈夫だよ、ちゃんと回復したから。」

ユウ「はあ、アルフ？」

ア「一応回復魔法はかけておいたよ。」

ユウ「魔力もか？」

ア「う、ごめん、フェイトがどうしてもって言うから治癒魔法しか、」

ユウ「はあ、フェイトお前は疲れているんだ・・・チツ、邪魔すんな！」

俺がフェイトに説教をしていると幾つ物竜が俺たちに突っ込んできた。

チツ俺はともかくフェイトの魔力が少ない。まだか。だが俺が考え事をしていると後ろから二匹の竜がつつこんできた

ユウ「フェイト！避ける！」

だがフェイトは疲れているのか上手く反応できていなかった。しかも俺を狙ってきた竜もフェイトに狙いを変えた。

そして竜の攻撃があたる直前に空から桃色と黒色の砲撃が竜を消し去った。

ユウヤSide Out

当麻Side

当「さてと、リンディさん俺たちは行きますね。」

ク「いや、その必要はない。」

は、何言ってるのこいつ。

な「なんで？このままじゃフェイトちゃんたちが！」

ク「これでいいんだ。このまま行けばあの子達は魔力切れでこっちで簡単に拘束でk、グハツ・・・何をする！」

俺はクロノが腐った事を言っているので思いっきり殴りつけてそのままストライクの銃口を向けた。

当「何を言ってるんです？コレがあなた達のやり方なんですか？このままじゃ次元震が起きる可能性があるんですよ？」

それにアイツ等については俺に全権がゆだねられていますよね。ですから俺達は自分達の意味で現場に向かいます。」

ユ「そうだね、なのは。僕が当麻と一緒に結界内に送るから準備して、」

な「え、でもユーノ君が。」

ユ「大丈夫だよ。どうやら当麻は自分だけでも行くみたいだよ。あとリンディさん、僕達を止めても無駄ですよ。」

たぶん当麻はアースラを沈めてでもいくと思いますから。」

当「ユーノ、まるで俺が鬼みたいな言い方じゃん。確かに止められたら沈める気満々だけど。」

ク「君たちは何を！」

当「それじゃあ高町当麻、」

な「えつと高町なのは、」

当&な

「「いってきます。」」

そして俺たちは結界内に転移した。

な「風は空に、星は天に、」

当「風は空に、流星は宙^{ソラ}に」

な「不屈の心は」

当「全てを撃ち抜く力は」

当&な

「「この胸に」

な「レイジングハート」

当「ストライクハート」

当&な

「セツトアップ」

そして俺たちはセツトアップすると直ぐにフェイトに向かっていた水の竜に砲撃を放った。

当&な

「デイバインバスター！」

ア「フェイトたちの邪魔はさせないよ。」

するとアルフが俺たちに攻撃をしてきた。

ユ「まって、僕達は君達と争いに来たんじゃないんだ！」

な「フェイトちゃんたちを助けに来たの！」

ユ「当麻、君は何も言わないのか？」

当「ユウヤ、何か言って欲しい？」

ユウ「いや、遠慮しとく。」

当「だって。」

ユ「君たちはいったいどんな関係なんだ？」

当&ユウ

「「友達以上恋人未満」」

な&フ

「「へ！？」」

当&ユウ

「「冗談だよ、冗談。」」

当「それよりなのは、」

な「うん、フェイトちゃん」

するとなのははフェイトに自分の魔力を分けた。

な「仲良く、一緒に半分こ。」

当「さてと、早速ジュエルシールドを止めないとな。」

ユ&ア

「「チェーンバインド！」」

ユーノが竜をバインドで足止めしてくれた。どうやらアルフも手伝ってくれるようだ。

ユウ「当麻、さっさと決めるぞ！」「この後、防御手伝ってくれ。」

当「了解！」「当たり前だろう、そのために俺たちはいるんだから。」

フ「いくよバルディッシュ。」

ユウ「さあ、いくぜバルウイング。」

な「レイジングハート、お願い。」

当「ちよっくら行きますか、ストライク。さあ、お前らの罪を数える！」

ユウ&フ

「「サンダーレイジ！」」

な&当

「「デイベインバスター！」」

そして、俺たちの攻撃で全部のジュエルシードを封印できた。

当「ストライク、このシーン録画よろしく。春雨はこの後に備えて準備よろしく。」

ユウ「バルも録画よろしく。暁も準備よろしく。」

な「フェイトちゃん、私は友達になりたいんだ。」

うん、このシーンはいつ見てもいいね。それに生だと感動が十倍だよ。

そして、フェイトがそれに答えようとしたら上空の雲行きが怪しく

なってきた。そろそろだな。

すると、雷がなのはとフェイトに向かって落ちてきた。

当「春雨！ローアイアス！」

ユウ「暁！鏡門！」

そして、俺はその雷を防ぎ、ユウヤは雷を反射した。
だがそのうちにジュエルシールドが全て奪われ、海から出てきた異形の触手がフェイトとアルフを連れ去って行った。

ユウ「フェイト！アルフ！」

そして、ユウヤはそれを追いかけて行った。だが別の場所から飛び出してきた触手に捕まりフェイト達と同じように連れ去れてしまった。

な「フェイトちゃん！」

今度はなのはがフェイトを追いかけてようとしたが、同じように触手が襲ってきたため俺が白鵠で切り裂いた。

当「なのは、今は冷静になれ！ユーノ！すぐに此処を離脱するぞ！」

ユ「うん！わかった！アースラへ転送！」

そして、俺たちはアースラへ戻っていった。チツ！あの触手はまさか嫌な予感が当たっちゃったってことか。

無印編第十五話 海上での決戦（後書き）

当麻「おい作者、何であんな事になったんだ？」

えっと、いくら転生者とはいえレアスキルを三つも四つも持つてるとなるとおかしいかなって思ったらこうなりました。すみません（土下座）

当麻「もしかして俺が持つてる能力って」

うん、一応全て両親からの遺伝ってことになってる。

当麻「いつぺん死んで来い！」

ギアアアアアアアアアアア

当麻「さてと、今回の謝辞をサイバスターさん、スペリオロスさん、ユウキさん

感想を書いていただきありがとうございます。それでは次回もお楽しみ！！それでは」

当麻&ジエナス

「「全ての悲しみ撃ち貫け！」」

当麻「なんで出て来るんだよ！」

ギアアアアアア

最近こんな仕打ちばかりだーーーー

無印編第十六話 決戦前（前書き）

今回は前回以上に無理矢理設定がフルドライブしております。独自設定が入っております。それとクロノファンの方ごめんなさい少しクロノを悪役にしてみました。

あと今回から少し書き方を変えてみました。まあ今後は今回の様な書き方と今までの書き方が混合してしまうかもしれませんがご理解のほうお願いします

無印編第十六話 決戦前

・ 管理局次元航行艦アースラ

リ「逃げられたわね。」

ク「そうですね。」

すると当麻達が転移してきた。

当「どこまで腐ってるんですか？あなた達は、どうして自分達で逃げたように見えるんですか？」

ク「如何考えてもそうだろ！僕達を襲ってシステムをダウンさせ気づいたらジュエルシードを全て奪って、尚且つあの3人を回収していたじゃないか！」

クロノがそう言うとその場の空気が一気に下がった。

当「俺は最初に長距離攻撃の可能性を話しておいたのに何の対策をとっていなかったんですか？．．．まあ、今回は俺が録画しておいた映像があるのでそれを見てから判断してください。」

そのときリンディとクロノの顔が歪んだ。だが当麻はその事を気にせずにストライクで録画した先ほどの映像をモニターに移した。

最後当麻たちが離脱するところまで映像を流すと再び当麻は口を開いた。

当「さて、あなた達はコレを見ても先ほどと同じ事を言いますか？
ハラオウン執務官にハラオウン提督？」

リ「確かにコレを見ると確かに無理矢理連れ去られているようなね。
当麻さんはこの3人の救出を考えているのですか？」

当「はい、彼らはただ道具として使われているのですから。」

リ「分かりました。それでは私たちは彼女たちの救出並びに全ジュ
エルシードの回収に変更します。」

ク「艦長！なぜ彼女たちを救出するのですか？彼女たちは犯罪ス」
おい、そのカス」嫌い！部外者は黙ってる！」

当「少し悪夢^{ユメ}でも見てろ。」

そして当麻はクロノに邪眼を使った。そして腹に一発入れて気絶さ
せた。

当「すみません。リンディさん少しその馬鹿には悪夢^{ユメ}を見てもら
うことにしました。」

リ「いいえ、構いませんわ。むしろ感謝します。クロノは親の私か
ら見ても頭が固すぎますから。それにうちの夫もあなたのお父様に
同じ事をされてますから。」

当「えっと、うちの父が迷惑をかけました。」

どうやら彼らの親も同じような事をしていたようだ。

リ「それで、当麻さん先日から調べていた事を教えていただけませんか？」

当「はい、まず先ほどの長距離攻撃の犯人は分かりましたか？」

エ「うん、分かったよ。犯人はプレシア・テストロッサ、だけど局にあった魔力波長と違った所があったけど十分当時から今までに考えられる変化内だったよ。」

当「分かりました。それではプレシア女史について俺が調べた事を説明しますね。」

そして一分ほどで大体原作と同じ事を説明するとクロノが目覚めました。

当「さて良い悪夢^{ユメ}は見れたかな？」

ク「ああ、最高で最悪な悪夢^{ユメ}だったよ。どうやら僕は頭が固すぎたようだな。」

エ「いったいどんな物を見ていたの？」

ク「ウツ、あまり聞かないでくれ。思い出したくない。」

どうやらクロノにとって邪眼は完全なトラウマになってしまったようだ。

リ「ところで当麻さん、なぜプレシア女史のことを調べようと思ったのですか？」

当「それは俺達があなた達と会う前に彼女たちの名前を聞いていてそのときにフェイト・テストロッサと言っていて父と母の形見の中にテストロッサという名に覚えがあったので少し調べてみたらビンゴ！っというわけです。」

リ「そう、それでやはりフェイトさんとあの男の子は。」

当「多分、プレシア女史が研究していた蘇生方法の過程で生まれたのでしょうね。それで、リンディさんできれば彼女たちを捕まえた後出来るだけ刑を軽くしてください。」

ク「それは何でなんだ？」

当「どうやら少しは頭が柔らかくなったようだね。まずはこの資料を見てください。」

そして当麻はヴェーダが見つ付けてくれた資料をモニターに出した。

リ「こ、コレは！確かにコレを見せれば情状酌量の余地どころか無罪にもできるわね。」

ク「まさか管理局が今回の事件の発端だったとは。」

当「クロノ達が思ってるより管理局はそこまで清い存在じゃないんだよ。」

リ「本当にあなたは刀夜さんと詩菜さんのお子さんなのですね。」

当「ええ、それではお願いしてもよろしいですか？」

ク「ああ、任してくれ。だがまずは彼女たちを助けないと。」

当「そうだな、けど一旦家に帰らないといけないのですが？」

リ「ええ、帰っていただいても結構です。こちらも少し準備がありますので。」

そして、当麻達は帰って行った。

・時の庭園

触手によって連れ去られたユウヤはかなり焦っていた。

ユウ「チツ、ヤバイな一応フェイトとアルフにはパラドックスに取り込まれないように対策はしてあるとはいえ、プレシアを使って取り込もうとしているんならハッキリ言ってかなりヤバイ。」

するとユウヤが入られている牢屋にボロボロな状態のアルフが投げ込まれてきた。

ユウ「おい、アルフ、大丈夫か？」

ア「ユ、ユウヤかい？私よりもフェイトを、フェイトが黒い何かに取り込まれておかしくなっちゃったよ。」

ユウ「俺が渡したお守りはどうした。」

ア「それが、フェイトは自分の身に何があってもいいように使い魔契約の主譲渡の術を搔けて私に渡したんだよ。」

そして、アルフはユウヤにお守りを渡した。

ユウ「あの馬鹿、コレがあれば取り込まれるようなことはなかったのに。まあ、いい今回は俺がマスターになるとアルフも危ないから少しきついがあいつに頼もう。」

そしてユウヤは急いでアルフの契約譲渡の術式を発生させた。するとアルフの契約譲渡の術式の他に別の術式が2つ新たに組み込まれていた。

ユウ「コレは、強制転移の術式にアイツの契約譲渡の術式か、ホントにフェイトは優しいな」

「アルフ今からお前を転移させる、そしてどうにかして当麻達と合流してフェイトと俺に決闘を申し込むように言ってくれ。」

ア「ユウヤ、何を言って一緒にフェイトを助けないと。」

ユウ「今の俺の魔力ではコイツに組み込まれてる術を発生させる程度にしか回復していない。それに俺もやらなきゃいけないことがある。だから行け！これは家族としてお願いだ。」

そして、ユウヤは強制転移の術式を発動させアルフをあの場合へ送った。そしてもう1つの術式を展開し、そのまま闇に取り込まれた。

当麻となのは久しぶりに学校に来ていた。

ア「ホント、久しぶりね。当麻もなのはも何してたのよ？」

当「まあ、知り合いの手伝いを少しやってただけだ。もう少ししたらまた手伝いに行かないと行けないんだけどな。」

す「でも、当麻君は問題ないけどなのはちゃんは勉強についていてるの？」

な「うん、なんとか、ギリギリかな？」　「それよりお兄ちゃん、いいのそんなこと言って、すずかちゃんとアリサちゃんにバレない？」

当「こういう時は少し事実をふまえて話しておくと話の確信には気づかれにくいんだよ」

な「う、うん、分かったなの。」

ア「そういえば、昨日不思議な犬をうちで保護したんだのよ。」

な「どんな犬なの？」

ア「えっと、全身オレンジ色の毛でどこに赤色の宝石がついてたのよ。」

な「お兄ちゃん、その犬ってもしかして、」

当「多分、アルフだ。あと知ってると思うけどアルフは犬じゃなくて狼だぞ。」

なへそうだったんだ。」

そして、放課後なのは達はアリサの家に行く事になった。

・ 放課後 アリサ邸

放課後なのは達は約束どおりアリサの家に来ていた。

なへえっと、アルフさんでしたよね。どうしてそんな怪我を？もしかしてプレシアさんに？」

アルへなんでアンタがプレシアの事を知ってるんだい？」

当へテストロッサって言ったらプレシアさんしかいないだろう？そこから調べたんだよ。それにお前らには黙っていたがユウヤとは少し密会していてなそれでおしえてもらったんだ。」

アルへそうだったんだね。」

するとアリサとすずかがやってきた。

ア「なのは、やっぱり知り合いの犬だった？」

な「うん、でさっき連絡したら怪我が治るまで預かっていて欲しいって、暫く日本にいることはできないからって。」
へこれでいいのかな？お兄ちゃん」

当「満点だ。」「それで治ったら俺たちに預けて欲しいって。」

ア「うん、分かった。それじゃあ私の部屋でゲームをしましょ、丁度新しいゲームも買ったしね。それやりましょ。」

すると、ユーノがアルフの入っている折のなかに入っていた。

ア「あ、ユーノ危ないよ。」

当「大丈夫だよ、俺が見てるからなのは達はゲームをやってきたよ。」「へよく考えたなユーノ、俺達がアルフと話しくからなのは遊んできなクロノに頼んでなのはにも聞こえるようにしておくから。」

な「うん、分かったなの。」

ア「それじゃあ、行きますよ。」

そして、なのは、さすが、アリサ、はアリサの部屋に向かった。

当「さてと、一応なのはに聞こえるようにしておくとは言っておいたけど盗み聞きとは感心しないなクロノ君。」

ク「何言ってるんだい、さっき君が連絡してきたんだろう?」

当「チツ、もう一度いい夢見せてあげようと思ったのにな、引つかからなかったか。」

ク「ウツ、あの時はすまなかった。本当にアレはやめてくれ。」

エ『はい、おふざけはここまで、本題に入るよ。まずはなのはちゃん聞こえる？』

なへはい、ちゃんと聞こえてます。ゝ

当「さてと、ここにアルフを送ったのはユウヤか？」

アル「そうだけどうして分かったんだい？」

当「昨日、少しだけユウヤの魔力を感知したんだ。どうやら本当のようだな。」

ク『何故僕達に連絡しなかった。』

当「はあ、ここは民間人の家だぞ管理内世界ならともかくいきなり来た人間が怪我した犬を引き取りに来たら怪しむだろう？動物虐待とか。それに多分俺の所に直接送らなかったのはプレシアにばれたくなかったからだろう。なにか違うところがあるか？アルフ。」

アル「少し違うよ。今まではプレシアが私達に命令してたけど、昨日は見たこともないような男がプレシアの変わりに居たんだ。たぶんそいつのせいでプレシアもおかしくなったんだと昨日気づいたよだからそいつにばれたくなかったんだと思う。」

当へどうやらソイツがパラドックスだな。とうとう表舞台に出てきたか。ゝ

「ありがとうアルフ、それで今のマスターは誰なんだ？」

アル「ああ、なぜか分からないけどアンタになってるよ。」

当「そうか、ならフェイトもユウヤも取り込まれたと見たほうがいいな。」

なへどうしてなの？」

当「使い魔とマスターは魔力回路で繋がってるんだ。もしマスターが何か大きな力に操られると使い魔も同じ状況に陥るんだ。逆の場合も同じだ、それで今回は本来のマスターのフェイトその次に近い存在のユウヤじゃなくて俺をマスターとしたんだ。なら2人とも取り込まれたと思ったほうがいい。」

なへそれなら早く助けないとー！」

当「そうだな、クロノ、任務変更だ内容はフェイト、ユウヤ、そしてプレシアの救出、さらにジュエルシードの回収だ。」

ク「ああ、もちろんだ。艦長にも連絡しておく。」

当「頼む、そしてアルフ、ユウヤが最後に何か言っていなかったか？」

アル「うん、たしかあんた達に決闘を申し込めって言ってたよ。」

当「そうか、クロノ如何思う？」

ク「まず、彼女達と接触しなきゃいけない。それが一番いい方法だろう。だがどうやって呼び出す？」

当「俺達が持っている全てのジュエルシードを賭ける。そうすれば嫌でもあいつ等は来るだろう。」

ク『危険な賭けだが。彼女らの本拠地を特定する事も出来る。それで行こう。』

当『了解、なのは、聞いていたな。アルフの怪我が治り次第決闘をする。』

なへわかったなの。ゝ

そして、当麻もアリサの部屋に向かった。

無印編第十六話 決戦前（後書き）

はい、まずは最初にすみませんでしたー（土下座）

当麻「いくらなんでも俺を一時的とはいえアルフのマスターにするのはどうかと思うぞ。」

でも、そうしないとアルフがアリサの所に行かなくなっちゃうんだよ。だから独自設定を無理矢理入れて無理矢理君をアルフのマスターにしてみた。

当麻「はあ、で、次回は決闘になるのか？」

うん、でもただ君とユウヤが絡むだけじゃ面白くないからちょっと決闘に加わるメンバーを増やしてみた。多分今回の話でそのうちの1人は分かった人もいると思うけど。

当麻「また、土下座する事確定だな。」

ウツ、そ、それでも僕には書きたい物があるんだー！！

当麻「その台詞をパクるな！」

すみません。では今回の謝辞をサイバスター先生、スペリオルス先生、ユウキ先生感想ありがとうございました。次回もお楽しみに！
！それでは

当麻&ジェナス

「「全ての悲しみ撃ち貫け！！」」

無印編第十七話 決闘（前編）（前書き）

いつもより少し短いですが前編、後編に分けてみました。
今回は当麻達はあまり出てきません。すみません。

無印編第十七話 決闘（前編）

アルフを保護して2日たった日の早朝、当麻となのはとユーノは家からある場所に向かっていた。

ユ「当麻、なのは。」

な「大丈夫だよ。お兄ちゃんもいるしちゃんと助けるよ。」

するとアルフも当麻達に合流した。

ア「当麻となのはだっけ、私が言えたことじゃないけどユウヤとフエイトとプレシアの他にも救って欲しい人がいるんだ。」

当「分かってる。ユウヤに聞いた。プレシアさんの使い魔でフェイトとユウヤの家庭教師のリニスさんだろ？」

ア「ホント、ユウヤは当麻の事を信頼してたんだね。当麻の言う通りだよ、ユウヤはあまりリニスには魔法について教えてもらってなかったけどバルウィングと暁はリニスが作ってもらってたからね。」

当「そうだったんだ。大丈夫だ、今回はちゃんと切り札もあるしな。」

そして、当麻となのはは目的地である公園に到着するとなのははレイジングハートを当麻はストライクハートと春雨を同時展開（春雨はシュバルツフォーム）し、それぞれジュエルシードを外に出した。

ス&レ

『『ジュエルシード、プットアウト』』

そして互いに此处に来る相手の名を呼んだ。

な「フェイトちゃん。」

当「ユウヤ、それにリニスさんいるんですよ。」

すると2人の少女と少年と一匹の猫が現れた。そしてその猫は人間体系になった。さらにその三人の目は何を見ているのか分からないような虚ろな目をしていた。

当「ユーノ悪いけどあの猫のほうお願いしても良い？」

ア「リニスは私が相手するよ！」

当「ごめん、アルフ、君を信じていないわけじゃないんだけど、アルフはこの後時の庭園に突入する時俺たちの案内をして欲しいんだ。だからここであまり体力を消費して欲しくないんだ。」

ア「分かったよ、当麻。ユーノ絶対リニスを助けてね。」

するとアルフと一緒に居たユーノが人間体系になつて答えた。

ユ「前行っていたいざって時の手札が欲しいって言ってた理由が分かったよ。」

するとユーノはリニスを巻き込んで何処かへ転移して行つた。

な「フェイトちゃん、本当の自分を始めるために、．．．はじめよ

「最初で最後の本気の勝負！」

なのはがそう言つとフェイトとユウヤは何も言わず当麻達に攻撃を仕掛けてきた。

・ 海鳴市沖海上

リニスと一緒に転移したユーノは苦戦していた。

ユハさすが、フェイト達の家庭教師だ早い、」

ハッキリ言つてリニスの速さはユーノの速さを凌駕していた。

ユハだけど、当麻ほどの速さがないんだつたら避けるのは簡単だ！」

そうユーノは自分より速い相手との戦い方を当麻に叩き込まれていた。

すると再びリニスがユーノに向けて拳を放ってきた。

ユハやっぱ少し戦つて分かつたけどリニスさんは僕と同じで戦闘タイプじゃない。操られていて速度が上がっているとはいえ動きが単調だ。それなら！」

「バインドシールド！」

ユーノはリニスから放たれた拳をバインドシールドで受け止めると後方に下がり詠唱を開始した。

ユハ当麻から教わつた僕でも出来る数少ない攻撃魔法！」

「全てを包み込む闇よ、万物を撃ち抜く弾丸となせ……ブラック

マジック！」

すると黒みがかった緑色のスフィアがリニスを包み込み爆発した。そして爆煙が晴れるとボロボロになったリニスが詠唱をしていた。

リ「君臨者よ血肉の仮面、万象、羽搏き、ヒトの名を冠す者よ真理と節制、罪知らぬ夢の壁に僅かに爪をたてよ．．．蒼火墜！」

すると蒼い爆煙がユーノを襲った。

だが、ギリギリでフィールド防御をはりユーノは耐え切った。

ユ「コレが当麻が言ってた鬼道か、思ったより威力がある。だけどあっちもボロボロだ勝機はこっちにある！」

するとリニスの姿が消えた、そしてユーノの背後に再び現れた。

ユ「クツ、巫門遁甲がなかったらこっちがやられていた。そしてアレが瞬歩か、でもやっぱ当麻が再現したほうが速いし巫門遁甲で動きは十分読める！」

そして再びリニスの姿が消え、ユーノの背後に回った時ユーノが仕掛けていた罠が発動しリニスをバインドで縛り上げた。

ユハハツキリ言っで、僕ももうそろそろ魔力が限界だ、だからコレで決める！」

「友の死を嘆く炎の竜の咆哮よ、今全てを焼き尽くす焰となれ・・・
ボルシャツクファイアー！」

そして緑色の炎がリニスを包み込み炎が消えたとリニスの体から何かが抜け出て意識をなくし、海へ落ちて行った。

だが、何とかユーノが抱きかかえアルフの元へ転移した。

無印編第十七話 決闘（前編）（後書き）

すみません。今回はやってしまいました！（土下座）

当麻「おい、どうしてこうなった？」

えっと、ユーノ強化フラグの回収とリニス救出をやるうとしたらこうなってしまった。

当麻「リニスはプレシアと一緒に救出すればよかったんじゃないのか？」

うん、最初はそう思ったんだけどこの作品のプレシアはフェイトの事をちゃんと自分の娘として見てるから原作通りにはできないから少しオリジナル展開を入れないといけなくなっちゃうんだよね。どいう展開になるかはネタバレになっちゃうからいえないけど。それでは今回の謝辞を、スペリオルス先生、ユウキ先生、紅の牙先生、感想を書いていただきありがとうございます。それではマタ次回もお楽しみに。

当麻「全ての悲しみ打ち貫け！」

無印編第十八話 決闘（後編）（前書き）

決闘後半戦です。

無印編第十八話 決闘（後編）

ユウヤとフェイトの攻撃によって上がった煙が晴れるとそこにはなのはを抱えた当麻の姿があった。

当「いきなりとは、やるじゃねえか。なのは、いけるか？」

な「うん！」

当「それじゃあいくぜ、倒させてもらっぜ、答えは聞いていないけどな。」

そして、なのはは自分の距離に下がり、それをフェイトが追いかけてそれを援護しようとしたユウヤを当麻が足止めた。

・なのはVSフェイト

なのはとフェイトは互いにシューターを打ち合っていた。普通ならスピードが上のフェイトが自分の距離で戦えるのだが、今はなのはの距離で戦況は固まっていた。

それはなのはがシューターでフェイトを自分の得意な距離で動き回るように誘導しているからである。

なへお兄ちゃんが言った通りだ、シューターでフェイトちゃんを遠ざけすぎ近づけすぎなければ私でも戦える！後は巫門遁甲でフェイトちゃんが仕掛けてくるのを読んで避ければなんとかなる！

だが、フェイトはシューターを撃つのを止め、バルデッシュを鎌に変形させ、大きく振りかぶった。

フ「ハーケンセイバー」

そして、フェイトに近づいてきたシューターを片っ端からぶった切って行った。

するとフェイトはシューターを破壊した時の煙を利用して詠唱を開始した。

フ「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる。

破道の六十三！雷吼炮！（らいこうほう）」

フェイトが放ったのは前回とは違い、完璧な雷吼炮だった。

な「これは、この前の、だけどこめられてる魔力量が全然違う！」「フラッシュムーブ！」

前回との違いに気づいたなのは高速移動魔法で自分がいた空域から急速離脱した。だが少し掠ってしまいフェイトの接近を許してしまった。

な「ヘクツ、やっぱ、近接戦はフェイトちゃんには適わないなの。」

なのははフェイトの斬激をレイジングハートで受け止めると少し高度を下げフェイトを自分の後ろにやり過ごした。

そのまま反転しフェイトを追いかけた。まだまだ戦いは始まったばかりである。

・ 当麻VSユウヤ

なのはとフェイトが戦っている間ユウヤはデュエル（アサルトシュラウド）で、当麻はソードで高速空中剣術戦を繰り広げていた。そして、ユウヤはアサルトシュラウドのミサイルハッチを開けるとそのままレーザー状の射撃を放ってきた。あまりにも広範囲にわたる攻撃のため当麻は避けきれずに防がざるを得なかった。

当「ローアイアス！」
「ハクツ、見た目よりも威力がありやがる。それに操られてるからか上手く心を読めない」

爆煙が晴れる前にユウヤは暁を斬月も同時展開し、ビームサーベルとの二刀流で切りかかった。

当「春雨！」

当麻はそれを春雨と体艦刀で受け止めた。そして2人とも暁と春雨だけを持ち（互いにバリアジャケットはストライクとバルウィングのまま）

再び高速剣術戦を開始した。

暫く斬り合っていると当麻はシューターを使い距離を取ると、背後に剣を出現させた。それらは全ての宝具の原点となった物だった。

当「ゲートオブバビロン！一応刃は潰してあるが気をつけろよ！」

そして当麻はそれらを全てユウヤに向けて放った。

当「ハアハア、まさか、コレでおちてるw、おっと危ない、危ない
気を抜いたらこっちがやられるな。」

当麻が避けた攻撃によって煙が晴れるとそこにはイージスを纏い、
幾つものフォトンランサーを展開したユウヤがいた。そしてその目
はハイライトが消えていた。

当「チツ、SEEDかよ、厄介なものを。行くぞストライク!」

ス『All right! My muster!』

当麻もストライクをエールにし、デイバインシューターを展開させ、
同時に放った。

当「クロスファイアー」

ユウ「フォトンランサー」

当「シュート!」

ユウ「ファイアー!」

そして、互いのシューターがぶつかり合い中距離戦が始まった。こ
ちらもまだまだ戦いは始まったばかりである。

「フェイトVSなのは

フェイトとなのはの戦いは熾烈を極めていた。なのはがシューター

を放つとフェイトはそれを避け、なのはに斬激を放ち、それをなのはは受け流し、フェイトの後ろを取ると再びシューターを放つその繰り返しだった。

な「このままじゃ埒が明かない。ちょっと危険だけど。」

するとなのははフェイトの斬激を真正面から受け止めフェイトの後方に設置してあったシューターを引き寄せた。

それを察知したフェイトは上昇する事で回避した。そしてフェイトを追って来たなのはにバインドをかけた。

フ「ライトニングバインド」

な「え、バインド!」

そして、詠唱を開始した。

「ユウヤVS当麻」

当麻とユウヤは中距離と近距離の戦闘を繰り返していた。

当「クツ、さすがSEEDだな、反応速度も、空間把握能力も脳量子波を使った俺とほぼ同じとはな。それなら一か八かなのはと合流するか。」

「写輪眼!」

そして、当麻は瞬歩でなのはの元へ向かった。だがそこではなのはがバインドに縛られていた。

当「なのは！クッ、しまった！」　「原作思い出せば直ぐに気づけた
だろうが、何やってんだ俺は！」

ユウ「ライトニングバインド」

当麻はなのはのバインドを解こうとしたが逆にユウヤのバインドに
縛られてしまった。

「当麻&なのはVSユウヤ&フェイト

当麻となのはをバインドで縛りつけたフェイトとユウヤはそれぞれ
詠唱を唱え始めた。

フ「アルカス・クルタス・エイギアス、疾風なりし天神、今、導き
のもと撃ちかけ、バルエル・ザルエル・ブラウゼル、」

ユウ「滲み出す混濁の紋章、不遜なる狂気の器湧きあがり・否定し
痺れ・瞬き眠りを妨げる爬行する鉄の王女、絶えず自壊する泥の人形
結合せよ、反発せよ、地に満ち己の無力を知れ。」

それを聴いた瞬間アルフは飛び出そうとした。

な「ユーノ君、アルフさん、来ないで！私たちで何とかするから。」

当「そうだ、このぐらいなんともない！」

ア「でも、アレは本当に危険なんだ！」

ユ「分かったよ。なのは、当麻、僕は君たちを信じる！だから無事
に帰ってきて！」

なへうん！分かったなの！」

当へ当然だろ！俺は不可能を可能にする男だぜ！」

スへマスター、それ死亡フラグだから。」

アへ分かったよ。私もあんた達を信じるよ。」

そして、フェイトとユウヤは詠唱を終え、発動のキーワードを唱えた。

フ「フォトンランサー・フランクスシフト、打ち砕けファイアー」

ユウ「破道の九十番、黒棺。」

なのはに向かって38の光球から毎秒7発のフォトンランサーが打ち込まれそれが約4秒間続き、煙が上がった。

さらに当麻は漆黒の棺に包まれた。

そして、煙が晴れ、漆黒の棺が消えると、そこには、ボロボロのバリアジャケットを着たのはと後ろにスピリットオブアースを従え

た当麻がいた。

な「アレを撃つと、バインドも消えちゃうんだね。それじゃあ行くよ、次は私たちの番！」

当「ワリイな、黒棺の正体は重力って分かってんだ、ならこいつで打ち消せないはずがないんだよ。さあ、次は俺たちの番だぜ！」

そして、なのはと当麻はフェイトとユウヤにバインドをかけ、砲撃を放った。

当麻&なのは

「「デイベインバスター！！」」

桃色と漆黒の砲撃がユウヤとフェイトに襲い掛かる、それをユウヤとフェイトは自分達に残った僅かな魔力でシールドを張り受け止める。

そして数秒間耐え切ると周りは桃色と漆黒の粒子が上昇していた。

当「さて、時間稼ぎは十分だ。」

な「受けてみて、お兄ちゃんと一緒に考えた、デイベインバスターのバリエーション！これが私の、」

当「俺の、」

当麻&なのは

「「全力全開！！」」

当「シューティングスター」

な「スターライター」

当麻&なのは

「ブレイカアアアアアアアアアア！！！！」

先ほどとは比べられないほどの砲撃がユウヤとフェイトを襲った。ユウヤとフェイトは幾重にもシールドを張りそれを受け止めようとしたが。

最後のシールドまで一瞬で到達され、最後のシールドもあっけなく破壊され、そこで2人の意識は途切れた。

そしてなのはと当麻は海中へ落ちて行ったフェイトとユウヤを回収し、スピリットオブファイアを出現させ、その手の上に2人を寝かせた。

暫くたち、2人は目を覚ました。

フ「あれ、確か私、変な男の人に何か言われて・・・なんでここにいるんだろう。」

な「えつとね、それは・・・」

そして、なのははフェイトに今までの説明をした。そのころ当麻とユウヤはというと。

ユウ「ふう、ありがとな、俺たちを救ってくれて。」

当「何言っただ。俺とお前の仲だろ。このぐらい当然だ。それにたぶんこの後アイツからの攻撃が来る。」

ユウ「だろうな、だが、今の俺には魔力が。」

当「魔力と霊圧がなくってもチャクラは残ってるんだろっ?。」

ユウ「ああ、上手くいくかどうかわからないけど。」

当「出来るか出来ないか、じゃなくて、」

ユウ「やるしかない、だろっ?。」

当「そういうこった。」

そして、なのはの説明が終わるとフェイトが当麻達の所にやってきた。

フ「えっと、あの、その、」

だがフェイトは何か言いたそうだがなかなか言い出せないようだ。

当「アルフのことだろ?大丈夫ちゃんと俺達が保護したしこの後マスター権限をフェイトに戻すから。」

フ「う、うん、ありがと。え?でもなんで?」

な「オニイチャン、ナンデマタフラグヲタテテルノカナ?」

ユウ「ソウダゼ、イクラオマエデモフェイトニテヲダスナラヨウシヤハシナイゼ」

当「ちょ、2人ともなんで片言?だいたいアルフはユウヤが俺に契

約譲渡したんだろう！」

フ「うん、そうだよ。ユウヤ、なんでアルフのマスターにならなかったの？」

ユウ「俺たちの状況を当麻達に知らせる必要があつたし、それに2人も使い魔がいると流石の俺でも少しきつい。」

フ「そうだったんだ。それじゃありニスは！？」

当「大丈夫だよ。リニスも俺たちの仲間が救出したから。」

フ「そうだったんだ。」

そして安心し、フェイトが肩の力を抜いた瞬間雲行きが怪しくなり、先日と同じような雷が四人を襲った。

当「アトラクション！」

ユウ「雷切り！」

だが当麻とユウヤがフェイトとなのはを守るように立ちふさがり、当麻は雷を弾き、ユウヤは技名どつりに雷を切った。

当「ユーノ！アルフ！」

そして当麻が呼ぶとユーノとアルフがリニスを抱えて転移してきてユーノと当麻が全員をアースラに転移した。

無印編第十八話 決闘（後編）（後書き）

漸く上げることができました。

ユウヤ「やっぱ、当麻の切り札は収束魔法だったか。」

うん、やっぱなのは側の転生者にはこれが無いとね。

ユウヤ「それに比べ、俺にはオリジナル魔法ないよね。」

当麻のも単にスターライトを当麻が自分流に改良しただけだから完全オリジナルって訳じゃないけどね。

ユウヤ「俺のも考えてくれ！」

大丈夫、無印編最終決戦には出す予定だから。まだ考えてないけど。

ユウヤ「早く、考えろや！」

ギアアアアアアアアアア
ました。）

キラーン（作者は星になり

ユウヤ「ふう、作者ぶっ飛ばしたら少しすっきりしたな、それじゃあ今回の謝辞をするか。サイバスター先生、スペリオルス先生、紅の牙先生、感想ありがとうな。

次回も楽しみにしていてくれ。それじゃあ、全ての悲しみ撃ち貫け！！」

無印編 第十九話 突入（前書き）

今回は庭園突入までです。あと今回は少し書き方を変えてみました。ただどダメだどうしても駄文にしかならない。

無印編 第十九話 突入

アースラに転移した当麻達は直ぐにブリッジへと向かった。

当「エイミィ、攻撃の発射地点分かった？」

エ「うん、ばっちりだよ」

そして、エイミィはストライクに発射地点の座標を送った。

当「ユウヤ、この座標で間違いないか？」

ユウ「ああ、ばっちりだ」

リ「それでは突入部隊は次元ポートに集合！準備できしだい直ぐに敵本拠地に突入！プレシア・テスト ロッサの救出と魔導炉の封印を第一に考えてください」

するとフェイトとリニスが目を見開いて驚いていた。

リニ「なんで、プレシアの救出を？あなた達ならさっきの攻撃も先日のジュエルシードの封印時の攻撃 もプレシアがやったことだつてわかるはずでは？」

当「それは、アルフが教えてくれたんだよ。プレシア女史が誰かに操られてるってな。それよりなんで 操られてた時の記憶があるんだ？」

ユウ「たぶん、それは俺が曲りなりにもマスターとなったからその時の記憶が流れたんだろう」

リニ「はい、そうです。それについてはフェイトとユウヤに感謝をしないといけませんね」

するとどうやら突入部隊がプレシアを保護したみたいで突入部隊の隊長がこちらに通信を繋げてきた。

01『ブレイズ01よりCP、大ホールと思われる場所においてプレシア・テストロッサを保護しました。どうやら洗脳は解けているようです。しかし脈が弱く直ぐにでもメディカルセンターで処置をしないと命に関わります』

リ「わかりました。直ぐにこちらに転移して『うわ、なんだ！』どうしました？」

リンディが指示を出している途中に突入部隊が襲撃を受け一時的に通信が途絶えた。そして数秒後通信が再び繋がった。

しかし、瀕死の重傷を負った突入部隊を背後に置いたプレシアを抱えた仮面を付けた男すなわちパラドックスがいた。（簡単に言う種類のラウル・クルーゼ）

それを見たリンディとクロノは直ぐに再突入部隊の編成を組み始め、エイミイは突入部隊とプレシアの救助を試みたが突入部隊だけでは救助できなかった。

エ「ダメ、突入部隊は救助できたけどプレシアには何らかの影響で転送できない」

パ「やあ、管理局の諸君、私はパラドックスだ。一部の人間は知っ

ていると思うがね』

当「ああ、始めましてだな、パラドックスさんよ。それでお前さんは何で今出てきたんだよ」

パ『それは、君達にこのシーンの観客になってもらおうと思ってね』

するとパラドックスはビームクロウ（プロヴィデンスの物）を出現させプレシアの心臓を貫いた。

そして、それを見たフェイトは倒れてしまった。

アルフ&リニス

「「フェイト！」」

アルフとリニスはフェイトに駆け寄った。

当「アルフ、リニス。フェイトを医務室へ。なのは、ユーノは案内頼む」

当麻はフェイトを医務室へ運ぶようなのは達に伝えた。

ユウ「テメエ、よくもやりやがったな！」

当「首洗って待ってるよ俺達がテメエを消してやつからよ」

パ『フツ、君たちの力では無理だろうな。だがどこまでやれるか楽しみにしているよ。それでは魔導炉の間で待っているよ』

そついうと、通信が切れた。それと同時に庭園内のいたるところから転移反応が現れた。

エ「転移反応、庭園内の至る所に感知！全ての感知地点でA A以上の魔力反応も感知！」

ユウ「多分、魔導兵器だ。1回庭園の中心部に忍び込んだ時見たことがある案外数も多いぜ」

ク「性能は？」

ユウ「高いと思う、だから突入部隊は最低でも二人一組で挑んだほうがいい」

エ「でも、この数だと今のアースラにいる突入部隊の数じゃ足りないよ。先行部隊の皆も何とかこつちに転移できたけど誰ももう一度出れるような状態じゃないし」

当「それなら俺達が出来ただけ暴れまわって引き付けます」

ユウ「ああ、それがいいな。それと魔導炉は俺と当麻が向かう。多分ここにいるメンバーの中でアイツと戦えそうなのは俺と当麻だけだからな」

リ「大丈夫なのですか？」

ユウ「ああ、俺は生まれつき魔力の回復が早いんですよ」

エ「だけど危険だよ！」

ユウ「確かに危険だ、だけど今回を逃すと多分2度と母さんを助けられない。それに、」

当「男には危険だと分かっているてもやらなきゃいけない時がある、
だろ？」

ユウ「俺の台詞を取るなよ。」

エ「でも、危険だよ。たった二人だけなんて。それに言いにくいけど確実にアレは心臓を貫いていたよ。」

ユウ「殆どの人がそう言うだろうな。でも、アレは心臓を貫いていない。」

エ「でも、血が出てたし、幻術の反応はなかったよ。」

当「人間の体つてのは案外単純でしてね、心臓と肺の間、太い血管を避けるように刺すとちょっと出血しますけど致命傷にはならないんですよ。」

まあ急所の近くなのは変わらないですから出来るだけ早く治療をしないとイケないですけど」

リ「よく知ってますわね」

当「まあ、いろいろと調べたんですよ」

リ「そうですか、それではお二人にはパラドックスの撃退、魔導炉の封印をお願いします」

そして、当麻、ユウヤ、クロノと突入部隊は転送ポートに向かった。

その途中なのは達が医務室から出てきた。

な「当麻君、行くんだね」

当「ああ、だけど今回はなのはは連れては行けない」

な「でも！」

当「大丈夫だ。ユウヤも一緒だ。それになのははやってもらいたいことがあるんだよ」

な「え？」

当「プレシアさんは多分まだ生きている。だからプレシアさんをアルフやクロノ達と一緒に助けに行って欲しいんだ」

な「え？ でも確かに心臓を刺されてたよ？」

当「あの時、急所は外れていたんだ。ま、早く治療しないと行けないのは変わらないけどな」

な「分かったなの。でも、2人だけじゃやっぱ危険だよ！」

すると当麻はなのはを抱きしめた。

当「大丈夫だ。俺はお前を残して何処かには行かない、だから自分の任務に集中してくれ」

な「うん、絶対無事でいてね」

そして、当麻はなのはを離した。

当「クロノも頼むぞ。もし、なのはに何かあったら分かってるよな？」

ク「ウツ、分かってるよ。と言うより僕の扱いひどくないか？」

当「え？　そうか。普通だろ？」

ユウ「ま、それは置いといてちょっとフェイトの所に行ってくる」

当「おう、最後の別れか？」

ユウ「フツ、まさか、ただ”行って来ます”って言うてくるのと少しフェイトの背中を押すまじないをかけるだけだ」

当「それなら早くしろよ。遅れたらおいてくからな」

ユウ「分かってるって」

そういうとユウヤはフェイトがいる医務室の中に向かって行った。

ク「はあ、君と彼はいったいどういう関係なんだ？」

当「友達以上恋人未満だ」

ク「敵だったのか？　それと素直に親友だと言ってたらどうだ？　変な誤解をまねくぞ」

当「今日の敵は明日の友」ってやつだよ」

ク「ホント君と言う人物はよく分からないな」

当「褒め言葉として受け取っておくよ」

そしてユウヤがやってきて当麻達は転送ポートから庭園へと向かった。

無印編 第十九話 突入（後書き）

今回の話の中で急所が如何たらとっていましたがこれは作者が勝手に考えた設定なので医学的根拠はまったくありません。すみません。

あと今回はリアルが忙しいので後書きはありません。

無印編第二十話 最終決戦（前編）（前書き）

お待たせしました。最終決戦前編です。

無印編第二十話 最終決戦（前編）

庭園に転移するとなのはと当麻達はそれぞれ別行動を取る事になった。

な「お兄ちゃん、絶対帰ってきてね」

当「大丈夫だつて。なのはも無理はするなよ」

な「うん！それじゃあ、行ってくるね」

そして当麻とユウヤは魔導炉へ、なのは達は庭園上部へと向かって行った。

「アースラ医務室

アースラの医務室ではベッドに横たわるフェイトを見つめるリニスの姿があった。

リニスがフェイトの頭を撫でながらユウヤとフェイトの事を心配しているところフェイトは暗闇の中に漂っている夢を見ていた。今は仮死状態だつて言つてたけどあの男許せない。でも、一番辛いのはフェイトとユウヤですね。

フェイト、早く目を覚ましてくださいね」

リニスがフェイトの頭を撫でながらユウヤとフェイトの事を心配しているところフェイトは暗闇の中に漂っている夢を見ていた。

フムなんで、母さんが殺されないといけなかったんだろう？私がちゃんとジュエルシードを集める事が出来なかったから？どうして？

教えてよ、アルフ、ユウヤ！」

すると漂っているフェイトの目の前にユウヤが現れた。

ユウ「よう、フェイト、大丈夫か？　って聞いてもその様子を見たら聞かなくても分かるくらい落ちこでるな」

フ「どうしてユウヤは母さんが殺されたのに平気でいられるの？」

ユウ「別に母さんが殺されて平気って訳じゃないぜ、それに母さんはまだ生きている、あとは予想はしていただけた」

フ「どういうこと？」

ユウ「母さんが刺されたのは急所から外れてたんだよ。ワザとだと思うけどな。あと予想してたってのは、一年ぐらい前に庭園のシステムが全て落ちた時があつたろ？　そして、その日から母さんとリリスが変わってしまった。

そして俺たちにジュエルシードを集めるように命令をした。その時母さんたちは何者かに操られてるんじゃないか？　って思ったんだ。

もしそれならジュエルシードを集め終わった時母さんを操っていた奴は母さんと俺たちに全ての罪を着せるために俺たちを殺すんじゃないか、

そしてその順番は俺たちに一番の影響を与えられる母さんが最初に殺されるんじゃないかって予想したんだよ。そして急所をはずしたのは多分また洗脳して自分の意のままに操るため。

一度死んだ人間が再び犯罪をするとは普通考えないだろうからな」

フ「それなら、なんで私達に相談してくれなかったの？」

ユウ「もしそうしてらフェイトとアルフは母さんたちを助けに行く
だろ？」

フ「当たり前だよ！」

ユウ「はあ、少し考えてみる、大魔導師である母さんとその使い魔
であるリニスと一緒に戦ってもダメだった相手に俺達が挑んで勝て
る要素があるか？」

フ「そうだけど」

ユウ「だから出来るだけ派手に暴れて管理局を利用して助けようと
思ったんだよ。俺が暴れるつもりがお前が暴れたせいで俺はいつも
いつも心配が絶えなかったんだがな」

フ「そしたら、あの子達に会ったの？」

ユウ「ああ、そして俺はこれからアイツの所に行く、今回の事を予
想しつつも何もしなかった贖罪とけじめをつけるために。フェイト、
お前は どうする？」

フ「私は．．．．私も行く！ 新しい自分を見つけるために！」

ユウ「そうか、だけど、お前は俺の所に来るなよ。お前を失いたく
ないし、コレは俺のけじめだから」

フ「でも、あの男の子は連れて行くんだよね」

ユウ「ああ、アイツなら強いし、アイツも俺と同じで生きて帰らな

きやいけない理由があるからな」

フ「わかった。なら私は女の子の方に行くね。だから、絶対生きて帰ってきてね」

ユウ「分かってるよ」

そして、ユウヤは消え、そこに扉が現れ、フェイトはその扉をくぐった。

アースラの医務室ではリニスがフェイトの頭を撫でていた。

リ「フェイト、早く目を覚ましてくださいね」

すると、フェイトが目を覚ました。

フ「ありがとう、リニス。ずっと私の傍にいてくれたんだね」

リ「目が覚めてよかったです」

フ「うん、ユウヤが私に勇気をくれたから」

リ「そうですか。フェイトは庭園に向かうのでしょうか？　大丈夫ですか？」

フ「うん、私は大丈夫だよ。私も新しい自分を見つけに行きたいから」

リ「それでは最後に聞きます。フェイト、貴方はユウヤの元へ向かいますか？　それともアルフ達の所へ向かいますか？」

フ「アルフ達の所へ向かうよ。ユウヤは絶対生きて帰ってきてくれるから」

リ「そうですか、分かりました。それでは行きましょう。それとこれを」
「ユウヤの元へ向かうと言ったら止めるよう言われてました
が心配はないみたいですな」

リニスはフェイトにお守りを渡した。

フ「ありがとう、リニス。それじゃあ行くよ」

リ「はい。でも無理はだめですよ」

そしてリニスとフェイトはアルフ達の所へと向かった。

なのはSide

なのは達は当麻達と別れると、なのは、クロノ、アルフ、ユーノは臨時小隊を組み、庭園上部に向かって行った。

ユ「なのは、クロノ！ 僕達が足止めをしてるうちに早く！」

な「デイベインバスター！」

ク「ブレイズキャノン！」

ユーノとアルフが魔導兵器にバインドをかけ足止めをしている間になのはとクロノが砲撃で一気に兵器を殲滅していった。

な「はあはあ、数が多いなの」

ク「さすがにきついな。他の部隊はどうなっている？」

ユ「どうやら順調に制圧しているようだよ」

ク「どうやら、こちらに戦力が集中しているみたいだな」

ア「だけど、もしこれ以上こっちにくるんなら捌ききれないよ」

するとまた上空から大量の魔導兵器がやってきた。

ユ「クツ、このままじゃ魔力がもたない」

複数の魔導兵器をバインドで締め上げながらユーノは悪態をついていた。

ク「だが！ やらなきゃいけないんだ！ 当麻達をもっと多くの敵を引き付けているんだ！」

しかし、1体だけユーノのバインドから抜け出しなのはに襲い掛かった。

ユ「しまった！　なのは！」

だが、なのはは砲撃を放った直後の硬直状態だったため回避につれなかった。

そして、魔導兵器が大鎌を使い一閃を繰り出した。

そして、雷が魔導機械を貫き爆発が起きた。

フ「サンダーレイジ！」

煙が晴れるとそこにはバインドで兵器を締め上げているリニスとフェイトがいた。

ア「フェイト！　目が覚めたんだね！」

フ「うん、ごめんね。アルフ、心配をかけて」

ア「そんなことないよ！　フェイトの目が覚めてよかったよ！」

フェイト達が感動の再会をしていると1機の兵器が壁をぶち破って

きた。

な「なんで今来るのかな？　まるでクロノ君みたいだよ」

ク「なのは、君まで僕はそんなに空気が読めない人間だと思われるのか？」

リ「それは置いといて、あれは装甲がとても硬いですよ」

フ「だけど、2人でなら」

な「うん、うん！　一緒にやろう！　フェイトちゃん！」

フ「うん、アルフ、リニス、手伝って」

ア「了解！」

リ「もちろんです」

ユ「僕もやるよ」

ク「僕も残りの魔力が少ないサポートに回るよ」

するとアルフ、リニス、ユーノ、クロノが兵器の四肢をバインドで縛り上げ、フェイトとなのはは砲撃の準備を始めた。

だが、兵器は肩の魔力砲を起動させフェイトとなのはに狙いを定めた。

フ＆な

「「せーのー！」」

そして兵器となのはとフェイトは同時に砲撃を放った。
そして三つの砲撃がぶつかりと黄色と桃色の砲撃が兵器の砲撃を
押し返しそのまま兵器を飲み込んだ。

その後すぐになのは達は庭園の制圧をしながらプレシアの元へ向
かった。

当麻Side

なのは達と別れた当麻とユウヤは全速力を出せるエールフォーム
とイージスフォームで魔導炉に向かっていった。

当「ユウヤ！必要以上にコイツ等の相手はするなよ！」

ユウ「分かってら！なるべく魔力を節約するためだろ！」

当麻とユウヤはなのは達とは違いなるべく兵器達の相手をせず進
路を阻む兵器だけを相手していた。

当「チッ、なるべく相手にしないようにしているけどさすがにこう
も数が多いときつい」

ユウ「ああ、だが早くアイツの所にいかないとな」

当「まあな、っとユウヤ、チェックシックス、忘れてるぜ」

当麻はユウヤの背後に迫っていた兵器をシューターで撃ち抜いた。

ユウ「お前とのコンビでそれは必要ないだろ？」

当「確かにそうだな」

2人は生前からコンビを組む事が多かったため互いの動きが手に取るように分かっていた。

しかも2人とも今は高速全距離戦闘型のため互いに援護しあっている。

ユウ「当麻！ 少し時間稼ぎできるか？」

当「ああ、出来るが何やるんだ？」

ユウ「俺のオリジナルだよ。お前だって持ってるだろう？ S・S・シューテスタザ

Bとか

ストライクスター

S・Bとかよ」

当「ほとんどパクリだけだな」

ユウ「ま、時間稼ぎ頼むぜ」

当「了解！」

そしてユウヤはバスターフォームにチェンジし2つのライフルを連結し砲撃の準備を始めた。

当麻はシューターの数をもっと増やしユウヤを囲む様に配置し近づいてくる兵器を次々に撃ち落して行った。

ユウ「当麻！ チャージ完了！ 俺の後ろに下がれ！」

当「了解！」

当麻はユウヤからの合図を受けると全てのシューターを消しユウヤの後ろに退避した。

ユウ「行くぜ！ ボルメテウスホワイトフレア！」

そしてユウヤは青白い炎を纏わせた砲撃を放った。砲撃が消えるとそこには焦げただれた壁だけが残っていた。

当「おいおい、この威力は反則だろ、それに名前が思いっきりお前と俺の二代目切り札の技名じゃないか」

ユウ「俺も最初に撃った時コレはやばくね？ って思った。魔力消費もディバインバスターフルパワーと同じくらいだからな」

当「それだけでこの威力は炎熱変換のおかげか、どれだけ炎の温度が高いんだよ」

ユウ「そんなことより早く行くぞ！」

当「ああ、でもその前に、クロスファイアーシュート！」

当麻は天井と壁にシューターを撃ち込み崩落させた。

当「ワリイな、ユウヤ足止めにはコレしかないからな」

ユウ「分かってるよ、それに脱出方法はちゃんとあるからな」

ユウヤは再びイージスフォームにチェンジすると2人は魔導炉の間へ向かった。

無印編第二十話 最終決戦（前編）（後書き）

以上前編でした。

ユウヤ「おい、作者」

ん？ どうしたん？ ユウヤ

ユウヤ「なんで俺の魔法の名前がDMのボルメテウスホワイトドラゴンの技なんだよ！」

他に思いつかなかったんだよ。それに君は五大元素すべての変換資質持つてるんだから別に良いだろ！

ユウヤ「はあ、ダメだこの作者早く何とかしないと」

ハハハ、諦めてくれ。それでは今回の謝辞を、サイバスター先生、スペリオルス先生、ユウキ先生毎回感想を書いていただきありがとうございます。

それなのに毎回返信が遅れてしまい本当にすみません。それではまた次回をお楽しみに！

ユウヤ「全ての悲しみ撃ち貫け！！」

無印編第二十一話 最終決戦（後編）（前書き）

すみませんかなり遅れました。最終決戦後編です。

無印編第二十一話 最終決戦（後編）

なのはSide

フェイト達と合流したなのは達は今まで以上の速さで大ホールへと向かっていた。

リ「此処を曲がったらすぐです」

そして、フェイトが一番最初に角を曲がるとそこにはいつたいの魔導兵器が鎌を振り上げていた。

ア「フェイト！」

な「フェイトちゃん！間に合って！」

なのははフェイトを援護するためにシューターを放つがどうやっても間に合いそうになかった。

誰もが最悪の事態が頭をよぎったが、リニスから渡されたお守りから青白い炎が放たれ兵器を溶かした。

ク「今のはいつたい？」

フ「ユウヤだよ。たぶん今のはユウヤの一番の火力があるボルメテウスホワイトフレアだと思う」

ク「でもいつたいどこから？」

ア「多分、あのお守りにフェイトの命が危なくなったら発動するよ

うに仕組んでたんだろうね」

リ「相変わらず彼は凄いですね。家庭教師の面子丸つぶれですよ。」

な「えっと、ユーノ君、何か凄い事なの？」

ユ「もちろんだよ、魔法つてのは基本瞬時発動なんだよ。確かに一部の魔法は遅延魔法や罫用の魔法も歩けど

遅延魔法は発動者が発動のタイミングを計らないといけないし罫用の魔法は常に特別な魔力が充満している場所でも特殊な儀式を必要としているんだ」

ク「ユーノの言う通りだ、今回は発動するまでまったく彼の魔力は感知されなかったから、普通ならありえないんだ」

な「ユウヤ君っていつもこんな凄い事やってるの？」

フ「うん、ユウヤはいつも特別な儀式をせずに何か媒体に魔法を組み込んでいたよ。」

私も教えてもらって特別な儀式さえすれば魔法を媒体に組み込むことは出来るよ」

ク「なんて言う2人なんだ」

リ「ホントに家庭教師の面子も何もないですね、私」

リニスは思っていたよりフェイトとユウヤが魔法が上達していて軽く自信をなくしてorzとなっていた。

ク「そんな事より早くプレシアを救出してアースラで彼らを待とう」

な「うん！早く行こ、フェイトちゃん！」

そして、大ホールに入るとプレシアが倒れいていた。

フ「母さん！」

プ「フェ、フェイト、リニス、アルフ、ごめんなさいね。操られていたとはいえあなた達にあんな事をして」

フ「そんなことないよ。ユウヤとアルフもいたし」

プ「そ、そういえばユウヤは？」

リ「あの男の下へ向かっています」

プ「ダメよ、私でも手が出なかった相手に彼だけで挑んだら」

フ「大丈夫だよ。ユウヤは1人じゃない」

プ「え？ とういうこと？」

フ「ユウヤと同じくらい強い子が一緒にいるから」

プ「誰なの？」

すると一歩引いたところから見ていたのはが出てきて答えた。

な「私のお兄ちゃんです」

プ「あなたは？」

な「私は高町なのはです。フェイトちゃんと一緒にあなたを助けに来ました」

プ「でも、兄というのは？」

な「私のお兄ちゃんもとても強いんですよ。それに私の所に絶対に帰ってきてくれるって行っていましたから」

プ「うん、ユウヤも同じ事を言ってたよ」

プ「そう、なら安心ね。それとごめんなさいね、少し眠いから寝させても…….ら…….う…….わ…….ね」

そういうとプレシアはフェイトの腕の中で目を閉じた。

プ「母さん！ 目を開けてよ。こんなところで寝ちゃダメだよ！」

するとフェイトはプレシアを揺らして起こそうとするがプレシアからは返事は返ってこなかった。

プ「そんな、嘘だよね」

リ「すみません。フェイト、少しどいてください」

リニスはフェイトを少しずらしプレシアの脈を取った。

リ「危険ですね、当麻君が言っていたように急所は外れているよう

ですが、脈が弱いです」

ク「それなら、エイミィ！早く僕達をアースラへ！」

エ『了解！』

エイミィが転移魔法を発動させようとした時大ホールのいたるところから先ほどフェイトとなのはが同時に倒した物もふくめた魔導兵器が現れた。

ク「クッこれじゃあ転移が出来ない」

するとなのはが一步前に出た。

な「リニスさんとアルフさん、フェイトちゃん、それとクロノ君プレシアさんを守ってあげてください。ユーノ君は私のサポートを」

ユ「分かった」

ク「1人でなんて危険だ！僕もやる」

な「大丈夫だよ。それにいつでも転移できるようにクロノ君はあまり動いちゃいけないだろうしフェイトちゃんはプレシアさんの隣にいて欲しいし、

リニスさんとアルフさんは一対多には向かない。それなら一番一対多に向いてる私と一緒にお兄ちゃんに修行をつけてもらったユーノ君が2人で相手したほうがいい」

ク「分かった、だが危険だとこちらが判断したら直ぐに僕も動くかな」

な「了解なの！」

そして、なのはとユーノが兵器の大群に向かうとクロノ、リニス、アルフ、はプレシアを囲む様にバリアを展開した。

ユ「なのは、あまり無理はしないでね」

な「うん、大丈夫だよ。それにこのロボットは動力が生きてれば同士討ちしない、ならこつちも魔力を節約しながら戦える」

そついうとなのははシューターを出現させ自分の周りにいくつかの小型を大破させた。

な「ワザと動力を生かしたまま私の周りに大破させれば砲撃は撃つてこない！その間に間接部に向けてシューターを撃てば」

そついいながらなのはは砲撃が撃てない大型の間接部（装甲の間）を狙いシューターをいくつも命中させた。

な「私でも1人で倒せる！」

リ「す、凄い。魔法に出会ってたった数ヶ月でフェイト渡り合えるまでになったことだけでも凄いのにこんなにも冷静に周りを見れる魔導師なんて管理局にも滅多にいないのに彼女はあの歳でそれをやってる」

そしてなのははユーノのサポートを受けながら次々に大型を中心に倒して行った。

当麻Side

なのは達が大ホールで戦闘を開始したところ当麻達は魔導炉に到着した。

そして、そこにはストライクやバルウィングと同じ部分がプロヴィデンスの装甲に包まれているパラドックスの姿があった。

パ「やあ、待っていたよ」

当「早速で悪いがなんでプレシアを殺さなかった？」

パ「フツ、そんなことは言わなくても分かるだろう？ もう一度洗脳して使っためさ」

ユウ「ハッ、何言ってるんだ？ あんたは、本当に洗脳するんだったらここに置いておけばいいだろう？」

パ「思ったより頭が切れるんだな。それならなぜプレシアを1人にしたのかわかるか？」

当「俺達となのは達を分断するためか？」

パ「そういうことだ。それとこの魔導炉はもうすぐ臨界に達するぞ」

当「関係ないね。ちゃっちゃんとアンタを倒して魔導炉を止めれば良い」

ユウ「そついうこつた！ 最初に言っておく、俺はかーなーり強い！」

当「さあ、お前の罪を数えろ！」

パ「フツ、貴様等如きにやられる私ではない！」

3人は同時に飛び上がり当麻とユウヤはパラドックスに向けて同時にシューターを放った。それに対しパラドックスはバックパックからドラグーンを射出し

全てのシューターを撃ち落とすとその時に生まれた爆煙に紛れ込ませて当麻とユウヤにドラグーンを突っ込ませた。

当「チツ、近接戦闘もできるビット攻撃って思ったよりきついな」

パ「それならさっさと私に倒されたら如何だ？」

ユウ「それは無理な相談だな」

ユウヤは一瞬の隙を突きパラドックスに斬りかかるがパラドックスはそれを避けた。

ユウ「チツ、少しでもつばぜり合いになれば良かったんだが」

当「仕方がない、こうもドラグーンに囲まれては近接戦闘に持ち込むルートは減ってくる。だけど」

ユウヤは当麻と目を合わせると瞬歩でパラドックスの背後を取った。

ユウ「分かっているけど反応できない速度なら！」

だが、パラドックスはその攻撃も避けた。そして当麻はパラドックスが避ける方向を予想しそこにシューターを放った。

パ「思ったよりやるではないか。だが、所詮それだけだ！」

パラドックスはそれを倒立反転しながら回避し2人をドラグーンを使いビームの檻に閉じ込めた。2人は三次元的な機動を取り避けきれないものはビームサーベルで弾いていた。

当「クッ、ユウヤ！俺がドラグーンを落とすからその隙に突っ込め！」

ユウ「了解！」

当麻の瞳が金色に輝き脳量子波でドラグーンの動きを読むとそこヘライフルで撃ち込んだ。そして同じように次々にドラグーンを撃ち落して行った。

パ「ほう、私のドラグーンを落とすとはやるではないか」

すると今度はユウヤが瞬歩で真正面から斬りかかった。今度はパラドックスもビームクロウで受け止めた。パラドックスはユウヤを弾いて

斬りかかろうとしたがいきなり動きが鈍くなった。

ユウ「頭を垂れる暁、ってな」

パ「だが刃をしまえば効果はなくなる」

パラドックスはビームを一旦消し、再びビームを出しユウヤに斬りかかった。

ユウ「ま、確かにビーム刃ならそうなるよな、さてここからは俺も本気で行くぜ」

そういうと、ユウヤの瞳からハイライトが消え思考がクリアになる。

ユウ「霜天に坐せ、暁！氷竜旋尾・絶空^{ぜっくう}」

ユウヤが暁を振るとそこから氷の竜が現れパラドックスに襲い掛かった。パラドックスはそれを上空へ避けた。しかし、それを読んでいたかのようにもう一匹の竜がパラドックスを襲った。そしてパラドックスを氷の中に閉じ込めた。

ユウ「ふう、これだけ足止めしとけば十分だろ？ 当麻？」

当「ああ、十分だ、ストライクバスターフルブラスト！」

そういうと当麻はパラドックスが閉じ込められてる氷に向けてほぼゼロ距離で砲撃を放った。

当「ふう、やったか？ っていう時は大体やれてないんだよな」

ユウ「あんまりそういうこと言っなフラグだぞそれ」

その時煙から幾つ物ビームが二人に向けて放たれ、2人は避けようとしたが何発か直撃してしまった。煙が晴れるとそこには装甲にまったく傷がついていないパラドックスがいた。

ユウ「ほらあ、お前がそういう事言うから普通に攻撃されたじゃないか」

当「すまん、でもこういふときは言ったほうがいいかなって思っ
てさ」

ユウ「そついうのはすぐやられるモブキャラだろ？」

パ「余裕だね？ ゼロ距離に砲撃を当てたのにもかかわらず無傷の私を見て諦めたのかな？」

当「別に、当たってないだろう？ 俺が砲撃を放つ直前に氷から抜け出してバリアを張ってたくせによ」

パ「フツ、どうやら私は君たちを見くびっていたようだね、ここからは私も本気でいくとしよう」

ユウ「出来れば、明日からにして欲しいね」

3人は同時にその場を離れ当麻とユウヤがいた場所には幾つ物ビームが駆け抜けて行った。

当「クツ、今までも案外きつかったのにこれ以上動きが速くなる

のかよ、グハッ」

当麻の瞳が再び金色に輝き脳量子波と巫門遁甲でドラグーンの動きを読むが動きは読めても相手の動きが速すぎて追いつけずすべて直撃し、そのまま床へ落ちて行つた。

ユウ「当麻！　って俺も人の事言つてられねえな。グハッ」

ユウヤもS E E Dを使つて驚異的な反応速度で避け続けていたが当麻が落とされその分もユウヤにまわされると反応しきれずに当麻の近くに落ちて行つた。

パ「フツ、やはり私が本気を出してしまえばこんな物が、止めだ」

するとパラドックスが持っているビームライフルが変形し嘗て別の世界で月面を焼き尽くした兵器ジェネシスになった。

ユウ「あ、アレはヤバイな」

当「仕方ない、アレをやるか」

パ「塵と化せ、哀れな転生者たちよ」

パラドックスはチャージを終えると2人にむけてジェネシスをフルパワーで放つた。ビームの奔流が終わるとそこには特大の穴が開いていた。

パ「さて、人形のところへ、ん？　ほう、アレを避けたか」

パラドックスの後ろには全身が赤く染まつた当麻とユウヤがいた。

ス&バ

『『TRANSAM』』

ス『マスター、タイムリミットは3分よ』

当「分かつてる、行くぞユウヤ!」

ユウ「ああ、バルウイング、暁!行くぞ!」

バ&暁

『『了解!』』

当麻とユウヤは左右に別れると2人の姿が消えた、いやあまりにも速すぎてパラドックスが姿を見失ったのだ。

ユウ「月牙天衝」

当「真空仏陀切り」

2人は移動しながら次々に斬撃を放ちパラドックスを斬撃の檻に閉じ込め、そのままパラドックスを斬りつけた。

パ「スピードとパワーが上がっただと?」

当「このまま一気に決める! ストライク、春雨!」

ス『αフォーム展開』

春『OS、S・O・S』
スピリット オフ ソード

当麻はエールのバックパック、ソード、ランチャーの肩部装甲とS・O・S（アニメ版で出てきた小さい奴）を展開しパラドックスへ突っ込んで行った。

ユウ「暁、バルウイング！」

バル『βフォーム展開』

暁『正解、陽光暁』

ユウやはデュエルアサルトシユラウドのバックパックとレールガン（此処では大型電気変換機能付魔力砲となっている）

バスターのミサイルポット（此処では小型魔力砲となっている）イージスの脚部装甲と暁を正解させ（見た目は青い天鎖斬月）、ユウヤもパラドックスへ突っ込んで行った。

パ「行け！ ドラグーン！」

パラドックスも二人に向けてドラグーンを放つがそれを二人はギリギリのところで回避したり撃墜していった。

パ「クツ、ならコレでも食らえ！」

次にパラドックスはドラグーンに加え魔力弾も二人に向けて放った。その攻撃は2人に直撃した。

当「おい、アンタ」

ユウ「どこを狙ってるんだ？」

だが、2人の姿が鏡のように割れパラドックスの背後から2人の声が聞こえてきた。

パ「クツ幻術か！」

背後に現れた2人に向けてドラグーンが放たれるが再び鏡のように割れるだけだった。そして気づくとパラドックスの回りには何人もの当麻とユウヤがいた。

当「ダイヤモンドミラージュ」

当麻がそう言うつと幻術が解け幾つ物破片がパラドックスを襲った。

パ「グハッ！ あいつ等はいったいどこに」

そしてすべての破片が消えるとそこには天鎖斬月とS・O・Sを構えたユウヤと当麻がいた。

当「阿弥陀流後光陣！」

ユウ「月牙天衝！」

黒と蒼の斬撃がパラドックスを襲った。パラドックスはそれを盾で受け止めるが耐え切れず直撃した。

そして煙が晴れるとそこには誰もいなかった。それと同時に2人のTRANSAMも終了していた。

ユウ「ハアハアハアハア、終わったか？」

当「ハアハアハアハア、いや、アイツギリギリで逃げやがったな。ストライク反応は？」

ス「ダメね。完全に反応ロストしたわ。」

春「だが、確実に大ダメージは与えられた暫くは動けないだろう」

当「少し辛いがさつさとコイツを封印するか」

ユウ「そうだな、それじゃあやるとするか」

2人は協力して魔導炉を封印した。

当「ふう、思ったよりギリギリだったな」

ユウ「ああ、後数分アイツとの戦いが長引いてたら皆痛みも感じずに木っ端微塵だったぜ。ほんとジュエルシードって危険な物だな」

バル「そうだな。だが主今は早くフェイト達の所へ」

当「っとその前にアイツを呼んどかないと俺達が逃げなくなるぜ」

ユウ「そうだな、アレの完成が間に合って良かったよそれじゃあ行くぜ」

当麻がヴェーダに連絡し終えるのを確認したユウヤはクナイ（四代目のアレ）を取り出し当麻の手を掴むと瞬間移動をした。

無印編第二十一話 最終決戦（後編）（後書き）

すみません更新が遅れました。最近精神的に不安定で更新と感想の返信ができていません。本当にすみません。スペリオルス先生、サイバスター先生、ユウキ先生

感想を書いていただきありがとうございました。さらにはユウキ先生、私の作品とコラボしていただきありがとうございました。

今回はプレシア、アリシアの救出です。

無印編二十二話 再会&脱出（前書き）

今回は前回後書きに書いたようにアリシアとプレシアの救済の話です。

無印編二十二話 再会&脱出

・庭園大ホール

当麻達がパラドックスとの戦いを終えた時なのははまだ魔導兵器と戦っていた。

な「ハアハア、思ったより辛いのに、大丈夫？ ユーノ君」

ユ「うん、僕はバインドしかやってないからあまり魔力消費は少ないけどなのはこそ大丈夫？」

な「私は大丈夫、でも全然数が減らない、このままじゃ」

なのはとユーノが数の暴力に押され始めクロノも参戦しようとした時いきなり全ての魔導兵器の動きが止まった。

ク「いったい何が？」

リ「多分魔導炉が封印されたのでしよう。この機械は魔導炉からのエネルギーを使って駆動炉を動かしていましたから」

な「それじゃ、お兄ちゃんたちは」

リ「ええ、勝ったのでしよう」

リニスはバリアを解除しながらそう言った。するとアルフもバリアを解除したのはとユーノのところへやってきた。

ア「あの2人ならやれると思ったよ」

するといきなりフェイト達の頭上の天井が崩れ、瓦礫がフェイト達に落ちてきた。

ク「間に合え！」

クロノがバリアを展開しようとした時

当「いきなり跳ぶなよ」

ユウ「別に良いだろ、ちゃんと五体満足で転移できたんだから」

瓦礫を吹き飛ばしながら当麻とユウヤがあらわれた。

な「お兄ちゃん！」

当麻の姿を確認したなのはは当麻に思いっきり抱きついた。

当「又オツ！行き成り抱きつくな！」

ユウヤは当麻となのはの姿を見るとフェイト達のところへ向かった。

ユウ「フェイト、母さんの容態は？」

フ「グスッ、ユウヤ、母さんが、母さんが」

ユウ「こりゃ、思ったより精神的に来てるな」
「リニス、容態を説明してくれ」

リ「はい、なんとか一命は取り留めていますが息も脈も弱っています。止血はしましたが私たちが来るまでに流した血は少なくありません」

ユウ「そうか、わかった。治療を始めるから少し離れていてくれ」

リ「わかりました」

するとユウヤは暁を取り出しプレシアにかざした。

ユウ「双天帰盾、俺は拒絶する」

すると暁は2つに別れプレシアを覆うようにバリアが展開された。そしてなのはを何とか引き剥がした当麻がやってきた。

当「盾舜立花か、そんなことも出来るのか？」

ユウ「ああ、なんとか双天帰盾だけだけだな」

暫くプレシアの治療を続けているとなんとかプレシアが目を覚ました。

プ「此処はいつたい？」

ユウ「母さん、おはよ」

プ「ユウヤ！　あなたが此処にいるって事は」

ユウ「ああ、なんとかあの男は撃退できたよ」

プ「そう、それであなたが」

当「はい、俺が高町当麻です」

プ「ありがとうね、うちのユウヤを助けていただいて」

当「いえいえ、困った時はお互い様ですよ」

プ「フェイト、アルフ、リニス、あなた達にも迷惑をかけてしまっ
たわね」

フ「そんなことよりも母さんが無事でよかったよ」

フェイトはそういうとプレシアに抱きついた。

リ「プレシア、今後はちゃんとすぐに相手に突っ込まず様子を見て
作戦を立ててくださいね」

プ「ごめんなさいね」

プレシアはフェイトの頭を撫でながら苦笑いをしてそう答えた。

当「どういうこと？」

ユウ「母さんああ見えて少し感情的なところもあるんだ」

当「そうなんだ、そこも原作と違うな」

ユウ「そうだな」「母さん、感動的なこの時に言つべきじゃないの」

は分かっているけどもうそろそろフェイトにあの秘密を言ってもいいんじゃないか？」

フ「秘密って何？ 母さん」

プ「それもそうね今後今回みたいな事が2度と起こらない保障はないからね」

リ「いいですね？ プレシア」

プ「ええ、これは私が犯した罪、あの人たちに言われて漸く数える事が出来た物だから。フェイト、あなたはね……………」

プレシアはフェイトにフェイト自身の出生の秘密を明かした。

プ「フェイト、私はこんな最低な人間なの、それでも私のことを母として見てくれる？」

フ「関係ないよ。私はプレシア・テストロッサの娘なんだもん」

プ「ごめんなさいね、フェイト、ユウヤ」

ユウ「母さんそこはごめんなさいじゃなくて」

フ「ありがとうだよ」

プ「そうだったわね、ありがとうフェイト、ユウヤ」

そして親子3人で抱き合った。

当「あゝ此処で話しかけないといけないんだけど絶対此処で話しかけたらK・Yのレッテル貼られるよな。はあゝ仕方ないやるか」
「えゝっと、親子3人の感動のシーン中申し訳ないんだけどちょっと良いですか？」

ユウ「こういうときに話しかけるとかまじK・Yだな。お前」

当「ウツ、人が気にしている事を安々とはいやがって。ってそんなことよりプレシアさんここにもう一度アリシアと暮らしたいとは思いませんか？」

プ「出来る事ならね、でもいm「叶いますよ、その願い」無理よ、死人を生き返らせるなんて」

当「大丈夫です失礼ですけどアリシアの遺体は培養ポットの中にありますか？」

プ「え、ええ、でもどうやって？」

当「それより早く此処を出しましょう。案外ギリギリですよこの庭園、エイミイさん転送準備できてますか？」

庭園は今まさに崩壊を続けていた。

エ「うん、バッチリいつでもOKだよ」

エイミイから通信が入った瞬間天井が崩落したのは、フェイト、リニス、アルフ、ユーノ、クロノと当麻、ユウヤ、プレシアの2グループに分かれてしまった。

な「お兄ちゃん！ 大丈夫！？」

当「ああ、大丈夫だ。エイミィさん転送には支障はないか？」

エ「クロノ君達を転送するには支障はないけど、当麻君達を転送するのは空間が安定してないから計算にちょっと時間が掛かっちゃうよ」

当「それならなのは達を先にそっちへ転送してください。これから俺がすることは世界の理を無理なく捻じ曲げる物なのであまり多くの人には見られたくないんです」

な「当麻君！ それなら私も残るよ！ それにこのぐらいの瓦礫なら私が撃ち抜けるよ、だから一緒に行こうよ！」

フ「ユウヤと母さんが後から来るんだったら私も一緒に残るよ！」

なのはとフェイトは涙を流しながら叫んだ。

当「ダメだ。いつこの庭園が完全に崩壊するか分からないこの状況じゃ出来るだけ早く脱出したほうが良い」

な「それなら当麻君も同じだよ！それに当麻君なら当麻君がしようとしてることはアースラでも出来るんでしょ！」

フ「そうだよ！だから早くユウヤも母さんもこっちに来て！」

なのはとフェイトはデバイスを構えて瓦礫を撃ち抜こうとした。だがそれをリニスとクロノが2人にバインドをかけて止めた。

フ「なんで止めるの？ リニス！ 早くしないとユウヤと母さんが」

な「クロノ君も離してよ！ このままじゃ当麻君が」

当「リニスさん、クロノありがとう2人を止めてくれて」

ユウ「フェイト、ここでこの瓦礫を撃ち抜くほどの砲撃を撃ったらその瞬間にこの庭園は完全に崩壊するそうするれば全員助からない。そんな事は誰も望まない」

フ「それでももう1人は嫌なんだよ！」

な「私もだよだから早くこっちに来てよ！当麻君！」

当「大丈夫だ俺もすぐにやる事やったらそっちに行くから」

ユウ「それにフェイトはもう1人じゃないだろ」

フ「それでも！」

ユウ「リニス、アルフ、クロノ、ユーノ、此処で言い争っていても先に進まない多少乱暴でもいいから2人を連れて行ってくれ」

リ「分かりました。ユウヤ、プレシア、絶対にフェイトを1人にはしないでくださいね」

ア「分かったよ。でもユウヤも母さんも絶対に帰ってきなよ」

ユ「当麻も絶対なのは置いていくような事をしないようにね」

ク「すまない、エイミイ早く転送を開始してくれ」

エ「うん、当麻君達も絶対に帰ってきてね」

な「ちよつとm」

フ「ユウヤ、母s」

なのはとフェイトの叫びは転送によって途中でさえぎられた。そして当麻はアースラに直ぐに通信を入れた。

当「リンディさん、なのは達は無事にそちらに着きましたか？」

リ「ちよつと、待つてくださいね、ええ今丁度無事に全員が転送されたわ。転送ルームへ通信を繋ぎますか？」

当「はい、お願いします」

通信が切り替わるとすぐになのはとフェイトの顔がモニターに写った。

フ「ユウヤ！　なんであんな事を言ったの！？」

ユウ「ワリイな、でも大丈夫だちゃっちゃとやる事やってすぐそっちに行くから」

な「当麻君もだよ！」

当「大丈夫、待ってるすぐに帰るから」

それだけを言うと当麻はアースラとの通信を完全に切った。

ス『良かったの？ マスター、最低でも生きてる事だけでもあつちに知らせても良かったんじゃないの？』

当『ダメだ、コレだけは流石に他人には教えられない此処にいる人以外にはな。準備してくれ春雨』

春『了解した』

当『それではプレシアさんアリシアのところへ案内してください』

プ『え、ええ分かったわこつちよ。でも本当に出来るの？』

当『はい』

プ『そう、こつちよ』

当麻の濁りのない返事を聞くとプレシアは当麻とユウヤを連れてアリシアが眠っている部屋に向かった（詳しくは映画版なのは出てきたところ）。

暫く歩くとそこには培養ポットの中に眠るアリシアがいた。

当『本当にフェイトにそっくりですね』

プ「そうに決まっているわ。なんせ私の娘なんですもの。もちろん
ユウヤも私の大事な息子よ」

ユウ「か、母さん何言ってるんだよ／＼」

ユウヤは顔を真っ赤にしていた。

当「よかったな。ユウヤ、それでは始めますのでアリシアを出して
もらえますか？」

そういうと当麻はゲートオブバビロンから一枚の布を取り出して
プレシアがアリシアをポットから出したのを確認するとアリシアに
かぶせた。

プ「その布で何をするの？」

当「いえいえ、この布はただの布ですよ。彼女も女の子なんですか
ら起きた時に素っ裸じゃ恥ずかしいでしょ。一応体はフェイトと同
じくらいには一気に成長させますので」

プ「え、ええそれもそうね」

当「ユウヤ、アレが来るまであとのくらいだ？」

ユウ「もう来ているらしい、その壁をぶち抜けば直ぐに乗り込め
る」

当「了解、さすがヴェーダ仕事が早いな」「春雨、やるぞ」

春『了解』

当「OS、シャマシユ」

するとリストバンドとなっていた春雨が指締め器に変化し古代バビロンで信仰されていた太陽と正義の神、《シャマシユ》が現れた。

プ「す、すごいなんて魔力、いえ、魔力以外の何か巨大な力も感じるわ。これはいいわ」

当「さすがプレシアさんですね、この力を感じ取るなんて、この力はある世界ではあの世とこの世を繋ぐ人達が使う力なんです。

普通はどんなに魔力があってもこの力の形を見る事はもちろん存在を感じ取る事は無理なんですよね。今は魔力をかなり混ぜて普通の人にも見えるようにしていますが。

ま、魔力で見えるようにしてもこっちの力の存在を感じ取る事ができる人はすくないんですがね。ちなみにユウヤは多分魔力がなくなっても見えるでしょうけど」

ユウ「ああ、一応似たような力は持つてるからな」

プ「どういうこと？言い方は悪いけどユウヤ、貴方は私がある人が私にくれたDNAを改造して生み出した命なのよ」

ユウ「うーん、当麻どうする？」

当「ああ、プレシアさんちゃんと詳しい説明はします。ただ今は時間がありませんし、案外これ痛いんですよ。シユマシユのおかげで血は出てないんですけど」

当麻は左手についている指締め器を指してそう言いながらアリシアに手をかざした。

当「さあ、お目覚めの時間だ。シャマシユのキス」

当麻がそう言うときシャマシユはアリシアに口付けをし、2人は光に包まれ暫くたつとその光が晴れるとフェイトと同じくらいに成長したアリシアと大量の汗を掻いた当麻がいた。

ア「あれ？ 私どうしてここに？ 確か母様の研究所を見てたら光に包まれて気づいたらお花畑で男の子が行き成り現れてそれでまた光にあれ？」

プ「アリシア、アリシアなのね？」

ア「そうだよ、どうしたの？母様、行き成り泣き出して」

アリシアがそういうとプレシアは泣きながらアリシアを抱きしめた。

プ「ごめんなさい、ごめんなさいね。アリシア」

するとそれを眺めていた当麻の隣にユウヤがやって来た。

ユウ「どうしたんだよ？当麻、お前の巫力なら1人ぐらい蘇生させるのは朝飯前だろ？」

当「蘇生自体はな、アリシアがいたコミュニケーションが地獄のコミュニケーションを通らないと行けなくて行きは良かったんだが帰りはアリシアを守りながらだったし」

体を今後影響なくフェイトと同じくらいに成長させるとなるとかなりの巫力と集中力が必要だったからな」

ユウ「そうか、それより早く此处を脱出しないと」

当「それもそうだな。プレシアさん、もうそろそろ脱出しないと」

プ「ええ、それもそうね」

ア「あー！ さっき私を迎えに来た男の子だ！」

当「うん、始めましてアリシア、俺は高町当麻だ」

ユウ「え〜つと俺は弟のユウヤ・テストロッサでいいのか？」

ア「え？ 弟？」

当「まっ、詳しい説明は此处を脱出してからするから」

プ「ええ、早く行きましょ」

ユウ「それじゃあいつちやりますか」

当「そうだな」

当麻とユウヤが壁を撃ち抜こうとストライクとバルウィングを構えた時、当麻達の周りの床が崩れ落ちた。

プ「嘘！ こんな時に」

ア「キャアアアア！」

当「ユウヤ！ アリシアを！」

ユウ「了解！ 母さんを頼むぞ！」

当麻はプレシアをユウヤはアリシアを抱きかかえるとそれぞれ彼らを迎えに来た物と呼んだ。すると黒と蒼色の物体が彼らを受け止めた。

無印編二十二話 再会&脱出（後書き）

えっと今回はいつもと違った方が後書きコーナーに来ております。

？「えっと、高町なのはです」

とある転生者の戦闘記録のメインヒロイン3人衆のうちの1人高町なのはさんです。

ワー、パフパフ！ ドンドンドン

なのは「え？3人衆って私とフェイトちゃんとあと誰なの？」

え、えっとそこはうん、もう少ししたらわかるよ。読者の皆さんは分かっておられると思うけど。

なのは「うーん、気になるの．．．ってそんなことより当麻君たちは大丈夫なの？」

ブンブン、ユサユサ ガラガラ

→襟を閉めて思いつきり作者の首を前後左右に振っている音

ちよ、首しまってるし普通じゃならないような音で振らないで大丈夫だから

なのは「本当なんだね！」ギュ（更に首を絞めた）

もう．．．無．．．理．．．ガクッ

なのは「あ、やっちゃった。うん、きつと大丈夫だよ
えっと作者さんに代わって今回の謝辞をしてくれて、うんわか
ったなの

スペリオルス先生、サイバスター先生、ユウキ先生、毎回感想を書
いてくれてありがとうなの！でも毎回返信が遅れてすみませんそ
れではまた次回をお楽しみになの！」

次回はユウヤと当麻の意外な関係が明かされます。ガクッ

なのは「え？なにになになに？気になるなの！えっもう時間が無い？
えっっと全ての悲しみ打ち貫けなの！」

無印編 第二十三話 帰還&説明（前書き）

今回は色々と説明になります。

無印編 第二十三話 帰還&説明

「アースラブリッジ」

アースラのブリッジではエイミー他の管制官が全員で転送用の演算をしていた。そんななかモニターには今まさに崩壊が続けている庭園の様子が映し出されていた。

ク「クツ、エイミーまだ演算は終わらないのか？」

クロノはいままでにないくらい焦っていた。いや、ブリッジにいる全員が今までにないくらいに焦っていた。

エ「だめ、演算をしてても空間が安定してないから演算の途中で全部最初からやり直さないと、それに当麻君とユウヤ君のデバイスの反応もあつちで完全に切っちゃってるし」

な「そうだ！ さつき当麻君達がいきなりやって来た魔法は使えないの？」

フ「多分、無理だと思う。この魔法も空間に左右されるから安定してないと使えないし、ユウヤなら多分無理矢理にでも魔力で安定させれるだろうけど、もう術が切れちゃってる。」

な「そ、そんな」

管「艦長！ 庭園が！」

ある管制官が叫ぶと全員がモニターに注目した。そこには完全に

崩壊していく庭園の様子が映し出されていた。

リン「エイミィ、生体反応は？」

リンディは今まで聞いた事がないような焦った声でエイミィにたずねた

エ「ダメです、次元震の影響でセンサーが上手く作動しません」

な「当麻君、嘘だよな」

フ「ユウヤ、母さん、嫌だよ」

なのはとフェイトは力なくその場に崩れ落ちるように膝をついた。リニス、アルフ、ユーノ、クロノも信じられないような物を見たというような表情だ。

リン「そんな、また大切な人を目の前で失ってしまうの？」

リンディも力なく艦長席に崩れ落ちるように艦長席に座った。しかし唯一センサー類を皿のようにして見つめていたエイミィが叫んだ。

エ「熱源反応、2、今モニターに出します」

皆がモニターに注目すると、そこには2機の飛行機が映し出された。

リン「アレはいつたい。」

な「なんで戦闘機が？」

するとその戦闘機から通信が入ってきた。

？『おい、アースラの皆！ 聞こえくるかい』

？『おい、やめろ、力が抜ける』

？『ねえ、あなたっていったいどっちが素なの？』

？『キャハハ、当麻君っておもしろいね』

それは誰もが待っていた人たちの声だった。

な「当麻君！」

フ「ユウヤ！ 母さん！」

リニ「ん？ 1人多いような？」

そしてモニターにそのうちの2人の顔が映し出された。

当『よっ、なのは、もしかして俺が死んだと思った？』

な「そうだよ！ 当麻君、後でO H A N A S H Iね」

当『アハハ、そりゃあ勘弁してくれ』

ユウ『フツ、ざm「ユウヤもだよ」へ？ねえ俺このままどこか「地獄の果てまでも追いかけるよ」……俺帰ったらゆっく

り余生をすごすんだ』

当『あゝあ、自分でフラグを立てちゃったよ。ヨッ、第一級フラグ建築士！』

ユウ『使い方が違うだろ！ それにそんな資格いらねえ！』

プ『誰も余生のところについては突っ込まないのね』

そして、暫く当麻とユウヤの漫才が続いたがモニターに2人が写ってからずつと鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしていたリニスから質問があった。

リニ「えつと、ユウヤ、あなたの後ろにいるフェイトに凄く似ている子はもしかして？」

ユウ『ああ、アリシアだ』

ク「何！彼女は死んだはずだろう？」

当『帰ったらちゃんと説明するさ、あ、でもそっちにこいつ等が入る分のスペースある？』

リン「その飛行機の大きさは？」

当『えつと全長19・1 m、全幅19・54 m、全高 4・88 mですね。大丈夫ですか？』

エ「ごめん、1機だけなら何とかなるけどさすがに2機は無理だね」

当『では、アースラの左舷後方に注目ください』

リン「え？どういことですか？」

当『いいから、いいからまずはそっちに注目してください。それでは光学迷彩解除』

当麻がそう言うときアースラの左舷後方にトレミーが現れた。

エ「す、凄いまったく反応がなかったよ。というより今でも目では見えてるけどセンサーには全く反応がないよ」

当『エイミーさん、後あの船への転送用座標送るからリンディさん達を送ってください。可能な限り説明はその時にしますので』

エ「う、うん分かったよ」

当麻とユウヤはアースラとの通信を終えるとトレミーへ向かった。

・トレミーブリールフィングルーム

トレミーに着艦した当麻達はアリシアに服を着させるとブリールフィングルームに向かった。

プ「ねえ、当麻君、なんでアリシアにぴったりのサイズの服があったの？」

ア「そういえばそうだね母様、ねえどうしてなの？当麻？」

そういうとプレシアとアリシアは当麻を白い目で見ていた。

当「そこで何処かへ行こうとしている男が同居人の服を洗濯したときにサイズを見たらしいからそいつが用意したんだちなみに下着も同じみたいだぞ」

そういいながら当麻はブリッジから逃げ出そうとしていたユウヤをバインドで締め上げた。

プ「へえ、そうだったのねユウヤ」（生暖かい目）

ア「うつ、ちよつと妹が心配かも」（白い目）

ユウ「ちょ！当麻何言ってるんだよ」

当「とまあ、冗談は置いといて此処からはまじめな話をしますね。俺とユウヤの秘密を」

プ「ええ、お願いするわ」

当「はい、まず俺とユウヤは簡単に言つと転生者です。」

プ「え？どういうこと？」

当「詳しく説明すると……と言つことです」

当麻はプレシアとアリシアに自分たちのことを説明した。

プ「そう、この世界と似た世界がいくつかあってそのひとつをあなた達がいた世界の人間がアニメとして観察していたということね」

プレシアは当麻の説明で大体のことを理解したみたいだった。

ア「え〜っとプシユー」

だがアリシアには難しすぎたためか頭から煙が出ていた。

ユウ「簡単に言うと、う〜ん、アリシア、絵本を読んだことがあるよな？」

ア「当たり前だよ！ 弟の癖にお姉ちゃんを馬鹿にしないの！ メッ」

ユウ「ゴメン、ゴメン、でその絵本の中にその絵本のなかの世界が広がってるだろう？」

ア「うん、それで？」

ユウ「そこで少し立場を変えて考えてみよう。絵本の中の世界をさっき言っていたアニメ、絵本を読んでいるアリシアが観察者としたら？」

ア「あ！ そうか、それでユウや達はその観察者の世界からこっちの世界に来たんだね」

当「そういうことだ。というよりよく1つの例えだけで分かったな」

プ「そりゃそうよ、なんていたって大魔導師プレシア・テストロッ

サの娘ですもの」

ア「母様、恥ずかしいよ／＼」

当「ユウヤ、もしかしてプレシアさんって」

ユウ「ああ、親ばかだ、しかもアリシアが蘇って親ばかに拍車がかったな」

当「なんか今後が心配だ」

プ「それで、あなた達が観察していた世界の私はどうなったの？」

当「はつきり言います。まずフェイトを娘としては見ていませんでした。そして、その世界のあなたとアリシアは庭園の崩落に巻き込まれ虚数空間に落ちていきました」

プ「そう、それでフェイトは？」

当「最初は落ち込んでいましたがなのはと言う親友ができなんとか前を向いて生きることができています」

プ「そう、でもこの世界の私もあの人たちに会わなかったらそうになっていたのかもしれないわね」

当「そうですね。でもその人達がいなかったとしても俺とユウヤでアリシアの願いを思い出させてあげましたよ」

プ「当麻君はあの人たちと同じ事を言うのね？」

当「えっと、さつきから言ってるあの人たちって？」

プ「管理局で伝説になってる特キョウコンビよ。名前は上条刀夜と上条詩菜だったわ」

当「えええ！うちの両親が！」

プ「ちょっとまって確かあなたの名前は高町じゃなかったの？」

当「ええ、俺の両親は何者かに殺されて当時家族ぐるみで付き合いのあったなのは両親に引き取られたんです」

プ「そう、ごめんなさいね」

当「でもどうして父さんたちが庭園に？」

プ「彼らは例の事故について調べていたらしくてねその時の状況を聞きに来たときに丁度フェイトを生み出して直ぐでどうにかしてアリシアを生き返らせようとして

躍起になっていてアリシアの願いや思いを忘れていたの。それでそのときに刀夜さんが私に私の罪を数える機会をくれたの。その時からフェイトを自分の娘として見れるようになったのよ。」

当「ちょっと待てよ、確か当時父さん達はもう管理局は辞めてたはずだよな。」

プ「ええ、そう言ってたわ。でも管理局の知り合いから頼まれて密かに調べていたみたいなの。最近息子は家にいないからって言うだけどまさかその息子があなただったとは思わなかったけどね。」

当「え〜っと、アツ、俺と春雨が修行していた時だな。そういえば2人とも俺よりも帰りが遅かった時があつたな。てつきり2人つきりでデートでもしてるのかと思つたよ。
息子の俺から見てもバカップルだったからな」

プ「ええ、私も何回か当てられたわ」

当「うちの両親が迷惑をかけました」

ユウ「それで特キヨウって？ 俺達が見ていたアニメでは出てこなかったけど」

プ「ええ、正確には管理局特別凶悪犯罪対策捜査官のことで、確か特キヨウの試験を受けるには執務官と地上の捜査官両方の資格が必要だつたはずよ」

当「え？ たしか執務官も捜査官も合格率かなり低くなかつたけ？」

プ「ええ、聞いた話だけど特キヨウの1回の試験で1人以上合格したことは無かつたって聞いたことがあるわ」

当「どれだけ凄いんだよ家の両親は！」

プ「ええ、私も聞いたときはびっくりしたわ」

ユウ「俺、自分がチートだなんて思ったけど俺ってその2人から見ればまだまだみたいだな」

当「同じく、俺、自信なくすよ」

「プ、それとコレも言わないといけないわね。ユウヤ、あなたの元になつた人を教えるわ」

当へあれ？大体読めてきたぞ？

ユウ「そっぴえば気になる誰なんだ？ 母さん」

「浦夜さんよ」

ユウ「ええええええええええええ！」

「当りはあーやっぱり、もしかしてって思ったけど」

プ「正確に言うと刀夜さんがフェイトを管理局の闇から守るため
て提供してくれた遺伝子と私の遺伝子を混ぜ合わせてさらに少し手
を加えて生み出したの」

当「母さんは何も言わなかったのか？」

プ「もちろんそう言い出したとき詩菜さんは刀夜さんをフルボッコにして帰って行ったわ」

「当「はあ、父さん達らしいよ。ん？ちょっと待てよ、父さんのDN
Aを元にしたってことはもしかしてユウヤと俺って」

「プ、異母兄弟？　で良いのかしら？　私が直接産んだ訳じゃないけど」

ユウヤ&当麻

「嫌だああああああ」

ユウ「なんで転生してまでこんな奴と血縁関係にあるんだ！」

当「しかもこっちではさらに関係が濃くなって異母兄弟って」

ユウヤ&当麻

「不幸だああああ！！！」

ブ「えつと前の世界でも血縁関係だったの？」

ユウ「ああ、従兄弟だった。俺の母さんと当麻の父さんが兄妹だったんだ。ちなみに俺はハーフだ」

ス「マスター、もうそろそろなのは達を呼んだほうが良いんじゃない？」

当「あ、早くしないと！」

春「まあ、もう手遅れかもしれないけどな」

当「それは言わないでくれ。さつきから震えが止まらないんだ」

ス「ま、諦める事ねもうすでに座標は送っちゃったから」

するとブリーフィングルームにリンディ達が出てきた。2人の悪魔を連れて。

当「えつとなのはさん？ どうしました？」

ユウ「フェイトさんもなんでバルディッシュを？」

ちなみに2人の目からはハイライトが消えている。

な「ン？ ナンデモナイヨ。タダイマカラトウマクンニO H A
N A S H I シナイトイケナイナアッテ」

フ「ユウヤモダヨ」

ダッ ↑当麻とユウヤが逃げ出した音

バシッ ↑なのはとフェイトが2人の肩を捕まえた音

な「ニゲチャダメダヨ」

フ「ソウダヨスグニオワルカラ」

ユウヤ&当麻

「「ぎゃあああああああ」

2人のO H A N A S H Iはだいたい一時間程度続いた。後にクロノは語る「あの時の2人には絶対逆らいたくない」とちなみにこの2人に影響されたのか

この後エイミイも同じような事が出来るようになったのは言うまでもない。

当麻とユウヤがなのはとフェイトにO H A N A S H Iを受けている途中ストライクと春雨がトレミーについて説明した。

O H A N A S H Iが終わるとテストロッサ家の皆はトレミーのほかの部屋へ移動した。そして話はトレミーをどうするかと言うことになった。

ク「それで、艦長トレミーについてはどうしますか？」

リン「上には報告しません。アースラのクルーにもそう伝えてください。これだけの月上層部の闇の者たちが知れば

どうにかして手に入れようとしてしまいます。そうなれば当麻さん達だけではなく地球の人々までも危険にさらされますからね」

当「それもそうですね。最悪地球と管理局で戦争になりますからね。異論はありません。クロノもいいか？」

ク「ああ、僕も管理局全てが正しいとは思えないからな。でもこれだけの物をどこに隠してたんだ？」

当「企業秘密、話すべき時が来たら話すさ」

ク「了解した」

当「ちなみにぶつちやけるとまだ他にもいくつかトレミーよりも戦闘に特化している戦艦やさつき俺達が乗ってた戦闘機以上の戦力を持つ質量兵器もいくつか製造する予定だ」

ク「はあ、それが必要になる時が来ない事を祈るよ。それでさつき乗ってた戦闘機の事は教えてくれるか？」

当「ああ、アレはVF-25っていつて可変戦闘機だ」

エ「可変戦闘機って？」

当「そのままの意味で変形する戦闘機でモードは3つ、戦闘機形態のファイター、人型形態のバトロイド、ファイターとバトロイドの

中間にあたるガウオークだ。
駆動炉は流石に教えられない」

ク「そうか、でもなんでユウヤが操縦できたんだ？」

当「もうこの際だから出来るところまでぶっちゃけるとユウヤと会ってから何回か連絡をとったり直接会ってたんだよね。それでその時にパaddockスの奴らの事を聞いて何が起きてもいいように準備を始めていたんだ。

もちろんどこでとかは企業秘密だ」

ク「はあゝホント君達は何でもありだな。変形する戦艦があると言っても僕は驚かないよ」

当「さっすがクロノ！ もちろん製造予定だよ。今回パaddockスには逃げられたから戦備は増強する予定だし」

リン「やはり、逃げましたか。こちらでも探して見ますね」

当「はい、お願いします。俺たちも出来るだけの範囲で探しますの
で。ところでクロノ頭抱えてどうした？ 一応トレミーには医務室があるから頭痛薬ぐらいならあるぞ」

ク「いや、冗談のつもりで言ったんだがまさか本当にあるとは」

当「変形は漢のロマンだろ？」

ク「クツ、否定は出来ない」

エ「クロノ君も男の子だったんだね」

当「ま、今度時間が出来たら連絡しろよVF、25ぐらいならすぐに乗せられるから」

ク「ウツ、こつも心の中を読まれるとは」

当「マジ？ こつちも冗談で言ったんだけど。まあいいや本当に連絡してくれたらいつでも乗せられるから」

当麻とリンディ達はこの後も更に詳しい話をしてユウヤ達を待った。

・トレミー内の一室

トレミー内にある一室ではテストロッサ家のメンバーが集まっていた。

フ「えっと、始めましてフェイト・テストロッサです。あなたの妹です？」

フェイトは何故か疑問系で自己紹介をした。

アル「なんで疑問系なんだい？」

アルフが突込みをいれるとアリシアがフェイトに抱きついた。

アリ「ありがとう！ 母様！ 本当に私のお願い聞いてくれたんだね」

プ「ええ、でもさっき当麻君とユウヤが言ってたように「関係ないよ」え？」

アリ「フェイトは私の妹！ それにユウヤも私の大事な弟なのはかわらないよ」

プ「ホント家の子はいい子ばかりね。でもフェイト、自分の服くらいは自分で洗濯しないといけないわよ」

フ「へ？ 何で知ってるの？」

するとプレシアは今まさに逃げようとしているユウヤを指差した。それに気づいたユウヤは

ダッ↑ユウヤが逃げ出した音

ガシッ↑フェイト、アルフ、リニス、さらにはアリシアがユウヤを捕まえた音

ガチャ↑フェイトがバルディッシュをユウヤに向ける

プレシア以外の女性人

《O H A N A S H I シマシヨウカ（シヨツカ）》

そのときユウヤの叫びがトレミー中に聞こえたとか聞こえなかったとか。その後テストロッサ家とリンディ、クロノ、エイミィはアースラに戻り当麻となのはユーノはトレミーから直接地球へ向かった。

無印編 第二十三話 帰還&説明（後書き）

当麻&ユウヤ

「さあ、お前の罪を数えろ！！」

ぎゃあああああ

当麻「なんでコイツと兄弟なんだよ」

ユウヤ「説明しろ！」

はい、フェイトはさアリシアの遺伝子を元にして生まれたんだよね

ユウヤ「ああ、確かにな」

それでユウヤもってことにしようとしたら男性遺伝子がないなって気づいたんだ。

ユウヤ「うん、それで？」

それでこの作品で魔法をっていて裏の事も知っているのは誰だろうっておもったら丁度当麻の両親がもと局員だって設定を思い出したんだ。だからそれで

ユウヤ「ボルメテウスホワイトフレア！」

ギヤアアアアアア

当麻「よし悪は滅んだ。それでは今回の謝辞を、ユウキ先生、サイ

バスター先生、

スペリオルス先生、感想ありがとうございました。それではまた次回をお楽しみに」

全員「「「全ての悲しみ撃ち貫け!!」」」

無印編 二十四話 Please Call My Name (前書き)

漸く無印編が終わりました。

無印編 二十四話 Please Call My Name

・ 地球 高町家

トレミーから帰った当麻となのはは久しぶりに家に戻っていた。

当「ふう、なんか自分の部屋に入るのがすごく久しぶりな気がする」

な「そうだね、お兄ちゃん」

当「というよりなんでなのは普通に俺の部屋に入ってきてるんだよ」

な「ここで一緒に寝るためだよ」

当「わお、ついに忍び込むんじゃなくて堂々としてきたよこの子。つていつのまに俺のベッドに入ってるの？」

ユ「えつと僕はどうした良いんだろう？」

当「仕方ない、今回を含めてジュエルシードを集めたりフェイトと戦ったりして頑張ったからな今日だけ特別だな。つてもう寝てるよ、ホントこうやって寝顔を見るとついさっきまで砲撃を撃ちまくってた娘とは思えないくらいかわいいな。ユーノ待ってるすぐにお前の籠持って来てやるよ」

ユ「そういう事は起きてる時に言ってあげたら？」

当「嫌だ！」

そして当麻はなのはの部屋に向かった。だがその途中で士郎に呼び止められた。

士「当麻、ちょっと道場に来てくれ」

当「うん、分かった」
「ユーノ、ゴメンちょっと時間掛かる」

ユ「うん、分かったよ」

そして当麻と士郎は道場についた。そして士郎は当麻に尋ねた。

士「当麻、得物はどうする？」

当「太刀で」

士「分かった」

そして士郎は当麻に太刀の木刀を渡し、小太刀の木刀を2本取ると戦闘体制に入り、当麻は木刀を受け取ると下段に構えた。

士「当麻のタイミングで掛かって来い」

当「うん、分かった」
「俺のタイミングで来いって言うてるくせにまったく隙がない」

当麻はどうにかして隙を見つけようとしていたが士郎の構えに全く隙は見られなかった。このままでは埒が明かないと思った当麻は自分が出せる最速で士郎に突っ込んだ。

士「いい速さだ。だが単純に正面から突っ込むだけではカウンターを喰らうぞ」

士郎はそのまま右手の木刀で当麻の木刀を弾こうとしたが士郎の攻撃が当たる直前姿が消えた。

士「僕が反応できないほどの速さか。だが、殺気で反応できる！」

士郎は背後からの殺気を感じ取り今度は左手の木刀で当麻の攻撃を弾こうとした。だが今回も攻撃が当たる直前で当麻の姿が消えた。そして行き成り腹部に衝撃が走った。

士「最初の2連撃はフェイントだったんだ。さすが当麻だね」

当「違うよ、全部父さんの意識を刈り取るつもりの本気の斬撃だったよ。でも最後のは反応されるとは思わなかったよ。父さん」

士「この歳で自分自身だけではなく斬撃自体の気配も消せるなんて、さすが刀夜の息子だな。だけど僕もまだ負けられない」

「当麻、僕も本気で行くよ」

当「うん、お願い」

当麻と士郎はそれぞれ再び構えると互いの隙を探り始めた。そして2人の汗が同時に床に落ちると2人は互いに駆け出した。

士郎は右手の木刀で突きを放つ、当麻はそれを身をかがませて避けると士郎の顎めがけて下段から木刀を振り上げる。士郎はバックステップでそれを避ける当麻はそれを追い掛け

着地の瞬間を狙って上段から木刀を振り下ろす。だがその瞬間士郎

の姿が消え当麻は無意識のうちに振り返り木刀を構える。士郎は2本の木刀を上段から当麻めがけて振り下ろす。

もちろん当麻は木刀でそれを受け止める形になるが剣先を下げ衝撃を逃がす。当麻がカウンターを決めようとするが再び士郎の姿が消え2本の木刀の剣先を当麻の首元に突きつけた。

当「参りました」

士「うん、すこしここでクールダウンがてらに話そうか。こうして話す機会は最近なかったからね」

当「うん、その前に質問してもいいかな？」

士「うん、いいよ」

当「何で行き成り俺と戦おうとしたの？」

士「まずその質問について答えるまえに当麻最近なのはと一緒していたことは刀夜と詩菜さんがしていた事と殆ど同じだよね」

当「え！？　なんでそれを知ってるの？」

士「それは肯定だと取るからね。刀夜と詩菜さんが殺される数日前、刀夜と詩菜に魔法について教えてもらったんだ。

『いま俺たちはある事件の真相とある人の罪を数えさせるために動いている』って言いながらね」

当「でも何で父さんに魔法の事を？」

士「刀夜はその時『今回僕達が追ってる事件は背後にとてつもない

組織が絡んでる事は間違いない考えたくないけどもし僕達に何かあったら当麻を頼む。

そしてもし当麻が僕達と同じ世界に来るって分かったら君が当麻を見定めてくれ』とも言ったんだ。僕は魔法の事なんて何も分らないって言ったんだけど、

『君なら当麻が潰されるかどうかぐらい一度手合わせをすれば分かるだろう？』どうやら当麻は僕達に黙って修行をしてるみたいだし』
って説得されたよ」

当「父さん達、気づいてたんだ。どうせなら自分達の正体ぐらい話してほしかったな」

士「僕も退院して君と出会ったときに正直驚いたよ、どうやってたらこの歳でこんなにも凄い気を放てるんだ、ってね。

あと刀夜達は当麻に魔法を知らない普通のこの世界の住人として生きて欲しかったんじゃないかな？」

当「うん、母さんが使ってたデバイスから話は聞いたよ。出来るだけ俺を巻き込みたくなかったって

そういえばなのはも魔法を使ってるけどどうするの？」

士「なのはが話してくれるまで待つさ」

当「多分俺についてくると思うよ。そしたら父さん達を殺した組織に狙われるかもしれないんだよ」

士「そうかもしれない。それでも君が鍛えていくし護っていくんだろ？さすがに魔法使い相手に勝てる自信はないからね、生身ならべつだけど

それにここ数ヶ月でなのはの筋力も気配も以前とは比べ物にはなら

ないくらい変わっているそれを助けたのは君となのはがつれて来た
ユーノだろう？

それなら十分なのはを任せられる」

当「ハハハ、父さんらしいや。でもいつあのユーノがただのフェレットじゃないって気づいたの？」

士「うんサッカーの試合が終わった辺りかななのはがユーノとよく目をあわせて何か語りかけてるみたいだったから少し気配を探ってみたら人間と同じような気配を感じたからね」

当「アハハ、父さんには隠し事は出来ないな」

士「コレでも僕は御神の剣士だよ現役を引退してもこのぐらいはできる。というより刀夜から当麻の事を任せられたときから鍛錬を現役時代と同じくらいに戻したからなんだけどね」

当「どおりで強いわけだ。あつ、ユーノも連れてくる？」

士「いや、良い。彼についてもなのはが話してくれるまで待つとするよ」

当「ハハハ、恭にいにバレたらユーノ大丈夫かな？」

士「その時は桃子と美由希が止めてくれるだろう。それとこの事を知ってるのは僕だけだから大丈夫だけど桃子達にバレないようにね」

当「うん、ありがとう、父さん！ それじゃ俺は戻るよ。お休み」

士「ああ、お休み、当麻」

当麻は道場を出るとなのはの部屋へ行きユーノの籠を持って自分の部屋へ行き客間から布団を持ってきて床に寝た。

士「コレで良かったのかな？ 刀夜」

士郎の呟きは誰にも聞かれる事はなかった。

当麻となのはは帰ってきた翌日から学校に復帰した。ちなみにユーノはその日から当麻の部屋で寝泊りする事になった。ユーノも朝起きた時に誰かがいるのはうれしらしい。（今まではなのはが当麻のベッドに忍び込んでいたため朝起きると誰もいなかったらしい。）

もちろん2人を起こしに来た恭也が同じ布団（夜中になのはが布団に忍び込んだ）で寝ているのを見て当麻に襲い掛かったのは言うまでもない。

そしていつもどおりの日常を過ごしていたがある日の朝いつもどおり当麻のベッドに潜り込んでいたなのはの携帯に着信が入った。

エ『おはよう、なのはちゃん』

な「おはようございます、エイミィさん今日はどうしたんですか？」

エ『うん、フェイトちゃん達の事で連絡しなきゃいけない事があったね』

な「はい！」

エ『まずはフェイトちゃん、ユウヤ君、アルフ、リニス、プレシアさんは裁判を受ける事になったの、まあ、当麻君のおかげでもう既に無実が決定してる裁判だから半年ぐらいで終わるんだけどね。』

それで今日ミッドチルダに出發するんだけど今からならフェイトちゃん達と会えるけどどうする？』

な「うん！ 絶対行くの！ どこに行けば．．．．．はい、分かりました！ お兄ちゃんも起こして一緒に行くの！」

エ『うん、了解。それじゃあ待つてるね』

な「分かったなの！」

そういうとなのはは電話を切ると隣で寝ている当麻を起こした。そして起こされた当麻はこの状況をみて頭を抱えた。

当「なあ、なんでいつも俺のベッドに忍び込むんだ？」

な「そんなことよりもこれからフェイトちゃんに会えるの」

当「なあ、ユーノこれって俺の常識がおかしいのか？　なんで普通にこの子は俺のベッドに忍び込めるの？　毎晩アナログ式とデジタル式の鍵かけてるよね、俺」

ユ「多分デジタル式はレイジングハートを使ってハッキングしてるんだと思う。アナログ式は分からない、と言うより分かっちゃいけない気がする」

な「それより早く行こうなの！」

当「分かったから早く制服に着替えてきなさい。今日はそのまま学校に行くんだからあとちゃんと父さん達に説明していくのを忘れるなよ」

な「はあゝい分かったなの！」

ユ「当麻ってなんかなのはお父さんみたいだね」

当「はあゝホント手が掛かる妹だよ」

そして当麻となのはは士郎にちゃんと説明して海鳴公園に向かった。

公園ではフェイト達がなのは達を待っていた。

な「フェイトちゃん！」

そしてなのはが走ってきた。その後ろをあくびをしながら当麻がユーノを肩にのせて歩いてきた。

ク「さて、僕とユーノとアルフとプレシアさんとアリシアは向こうに行ってるよ」

ユウ「俺も行くぜ」

当「なら俺も行くか」

ク「いいのか？」

ユウ「いまさらコイツと改めて話すことはない」

当「そういうこと」

プ「それじゃあ行きましょ」

ア「うん！ 母様！」

当麻達はそう言うとその場を離れた。

な「フェイトちゃん達に色々話したいことがあったのに、何でだろうね？ フェイトちゃんの顔を見たら何を話したかったのか忘れちゃった」

フ「私もだよ。なんだか言葉に出来ないんだ。でもねコレだけは言える。ありがとう、私達に真っ直ぐ正面から向き合ってくれて」

な「私達もフェイトちゃんとユウヤ君とお友達になりたいって思ってたからできたんだよ。でもお兄ちゃんとユウヤ君はいつの間にかお友達になってたんだけどね」

フ「フフ、そうだね。それでね今日は返事を伝えたかったから着てもらったんだ」

な「返事？」

フ「うん、《友達になりたいんだ》って言ってたよね、その返事がしたいんだ。でも私はどうしたら友達になれるのか教えて欲しいんだ。

ユウヤには恥ずかしくて聞けないから」

そういったフェイト少し恥ずかしそうに頬を薄く紅色に染めていた。

な「簡単だよ。」

フ「どうやるの？」

な「名前を呼んで。友達になりたい人の目を見てその人の名前を呼ぶんだよ。始めはそれで良いんだよ。私は高町なのは、なのはだよ」

フ「なのは」

な「うん」

フ「なのは」

な「うん！ うん！」

そういつて2人は涙を流しながら抱きしめあった。

当麻達のはとフェイトの様子を少し離れた所から見守っていた。

ア「ユーノ、当麻、あんた達の所のはは本当に良い子だねフェイトのあんなに良い笑顔は久しぶりだよ」

そう言いながらアルフは涙を流していた。

プ「そうね、コレばかりはユウヤと当麻には感謝してもしきれないわね」

リ「そうですね、プレシア」

そういつ2人も涙を流していた。

アリ「ねえ、ユウヤ、私もあの子とお友達になれるかな？」

ユウ「ああ、なれるさ。と言うより、当麻、お前は何をしている」

当「え？ 感動のシーンを3Dカメラで録画してるんだけど。あっ！ 安心しろちゃんと此処にいる人数分ダビングするし3Dテレビ

がない人用にも2Dでもストライクに頼んで録画してもらってるから
ちなみにこっちの会話は拾わないようにして感動のシーンは壊さな
いようにしてるからこの会話は収録される事はない」

ク「戦闘時の君と今の君が別人だと言われても知らない人は納得す
るだろうな」

当「ONとOFFがハッキリしてるって言ってくれ」

プ「差が激しすぎるんじゃない？ あつ、私は3Dも2Dも3本ず
つお願いするわ」

当「保存用、見る用、布教用ですねわかります」

プ「そうよ、裁判が終わったならこっちに住む予定だから近所さん
に自慢しないといけないからね」

リ「自重してくださいプレシア」

アリ「アハハ、母様面白い！ それでさ、当麻も友達になってくれ
る？」

当「Of course もちろんだよ」

アリ「ありがとう！ ん？でも確かユウヤと当麻の遺伝子っておん
」「言わないで、まだ受け入れてないから」「……………ごめん」

そついいながら当麻とユウヤはorzの状態になった。ちなみに
当麻はちゃんとカメラとストライクをなのは達に向けながらである。
実に器用な人物だ。

暫くなのは達が抱き合っているとクロノ達がやってきた。

ク「すまない、時間だ」

フ「うん」

な「フェイトちゃん、コレ」

なのはは自分の髪を結んでいたリボンをフェイトに渡した。

フ「それなら私も」

フェイトも慌てて自分のリボンをなのはに渡した。そして互いのリボンを交換したのを見守っていたアリシアが尋ねてきた。

アリ「あのさ、なのは、私も友達になれるかな」

な「うん！ もちろんだよ！」

そしてなのはとアリシアも抱き合った。

プ「当麻君、このシーンは？」

当ハステルス機能をつけた監視用サーチャーで360度あらゆる方向から録画中です」

ブ「G」、もちろん」

当「3本ですね。了解しました」

その様子を見てだいたいい何を話しているか予想できたりニスとユウヤは頭を抱えた。

ク「それじゃあ」

な「うん、それじゃあまたねフェイトちゃん、アリシアちゃん、ユウヤ君、プレシアさん、アルフさん、リニスさん」

当「じゃあな、兄弟」

ユウ「ああ」

そいいながら当麻とユウヤは拳をぶつけ合い、フェイト達は手を振ってそのまま転移して行った。

当「それじゃあなのは行こうか」

な「うん、それじゃあユーノ君、お家でね」

ユ「うん、いつてらっしやい当麻、なのは」

そして当麻となのはは学校へ向かいユーノはそのまま家へ戻って

行っ
た。

無
印
編

E
N
D

当麻「漸く終わったな」

ユウヤ「ああ、長かった」

すみません。更新が遅れて申し訳ありません。

当麻「で、次回からはAS編？」

いや、次回は紅の牙先生の作品とのコラボ作品をのせる予定です。

ユウヤ「それで？」

その後は日常編をやってからAS編だね。ちなみに日常編で3人目と関西弁娘を明日予定です。日常編は何時更新するか分かりませんが楽しみに。

全員「……全ての悲しみ撃ち貫け」

新たな親友（ライバル）（前書き）

今回は紅の牙さんの作品，魔法少女リリカルなのは―戦士の魂を受け継ぐ者―とのコラボです。

新たな親友（ライバル）

当麻はジュエルシード事件が終わってから新しく出来た試練の間で魔法の修行をしていた。

当「うーん、なかなか上手くないかな」

春「やっぱり召喚時以外は上手くないのではないか？」

当麻が悩んでいると彼の相棒春雨が答える。もう1つの相棒ストライクは今はメンテナンス中である。

当「でも、これってうまくいけば転移魔法使わなくても転移できるから」

春「それならいつそのこと全速力で飛ながらやってみたらどうだ？召喚する時も飛びながらじゃないと召喚できないのだから」

当「それもそうだなやってみるか」

春「ああ、それでは行くぞ！」

そして当麻は飛び上がり一瞬で最高速度に到達した。

当「スピードの境地<クリアマインド！>」

そして当麻を黒い光が包み込みこの世界から当麻は消えた。

別荘では翔がデカマスターやシンケンレッドを相手に訓練をしていた。

翔「炎牙大天衝!？」

翔は一気に決めようとしたが行き成り黒い光が瞬き目の前には見たこともない男子がいた。

？「ドルドルドル」翔凄い衝撃があつたけどなにがあつたんだ」

するとスピードルが翔の所にやって来た。

翔「いや、俺にも何があつたのか？さっぱりなんだ」

すると、その男子は立ち上がりあたりを見回した。

？「えっと、此処何処？ え？ スピードルにデカマスター？ いたい此処何処？」

何があつたのかは分からないが翔はその子が何かを知っているかもとその子に話しかけた。

翔「おゝい、君は誰だい？」

？「えっと、俺は高町当麻です。それと此処はいつたいどこですか

？」

翔「ん？ 高町だって？ それにスピードルやデカマスターを知っているって事はもしかして」

当「えっと、どうかしましたか？」

翔「いや、なんでもない。俺は椎名翔だ。行き成りで悪いが、君はコレを知っているか？」

そついうと翔はあるトランペットを取り出した。

当「え？ なんで貴方がバスコのトランペットを？」

翔「やはり、知っているか。と言う事は君は転生者なのか？」

当「え？ あ、はいそうですけど。もしかして貴方も？」

翔「ああ、そうだ」

当「ってことはもしかして此処は俺がいた世界とは別の平行世界の1つだということか」

翔「えっと、どういうことだ？」

当「えっと、俺達の世界にはそれぞれ似たような世界があつて今俺達がいる世界はその中のひとつと言つことです」

翔「そう言えば俺も何かの本でそんなことが書いてあつたな。それで何で君がここにいるんだ？」

当「えっと、新しい転移魔法を開発していたらそれが失敗して此処に来てしまったんじゃないかと」

翔「それじゃあ帰れるのか？」

当「大丈夫です。前にも似たような事があったのでその時と同じ方法で帰ります。時間は掛かりますが」

翔「そうか、それなら俺の訓練に付き合ってくれるか？」

当「いいですね、俺も今の實力も知りたいですし」

そついうと2人は互いの得物を構えた。

当「高町当麻と春雨」

当麻がそう言うつと小さいS・O・SをOSした。

翔「椎名翔とゼロ」

翔はゼロをセットアップした。

ス「それじゃあ、始め！ ドルドルドル」

スピードルの合図と同時に翔は動いた。

ぜ『Lightning Move』

当「な！ 後ろか！」

翔「ほうほうたん咆咆弾」

当麻は後ろから翔が放ってきた拳をS・O・Sの峰で受け止めた。

翔「コレを受け止めるか」

当「俺の知り合いにもスピード自慢がいましたね」

翔「ならコレはどうだ？」

そういつと翔はディーマグナムを取り出しいくつもの魔力弾を撃ってきた。

当「多！ これは避けるのは無理かな？ でも！」

魔力弾が当麻に着弾するかと思われたがすべて地面に叩きつけられた。

当「避けられないのなら叩きつければ良い」

そういつと当麻の後ろにはスピリットオブアースがいた。

翔「魔力弾が破壊されていない事を考えると重力か？」

当「まあね」

そういつと当麻はスピリットオブアースを消した。それと同時に翔も魔力弾を当麻へ再び放った。

当「次は俺の番だね」

その言葉と同時に当麻の姿が消えた。

当「阿弥陀流仏陀斬り！」

翔「後ろか！」

ぜ『Lightning Move』

当麻は仏陀斬りを放つが直前に当麻の攻撃を察知したゼロが魔法を発動させ翔は何とか避ける事ができた。

翔「助かったぜ、相棒」

ぜ『気にするな、それより相手は剣を使ってるんだこっちも剣を使ったらどうだ？』

翔「そうだな」

翔は炎神剣を構えた。

当「あなたも剣を使うんですね」

翔「まあな、それより敬語はやめたらどうだ？俺は気にしないぜ」

当「そうか？なら遠慮なく、俺も敬語を話すのは苦手なんで」

翔「そうか、それなら改めて行くぜ」

ゼ『Lightning Move』

翔は当麻の後ろに移動すると剣を上段から振り下ろした。

だがそこには当麻の姿は無かった。

当「同じ手は食わないぜ、デリヤア」

当麻は翔の後ろをとるとS・O・Sを下段から振り上げた。

翔「危ね！ その速さ瞬歩か、それとその目は写輪眼か。と言う事は君の世界には他にも転生者がいるのか？」

当「まあね、瞬歩はソイツが使ってたから俺も使ってるんだよね。それじゃあもういっちょ！」

翔「負けるかよ！」

そして当麻と翔は何合も互いの剣で斬り合った。

当「ハアハアハア、強い」

翔「ハアハア、当麻も強いじゃねえか。まだ小学生だろ？」

当「まあね、それじゃあそろそろ終わりにしようか」

翔「だな」

そして2人は同時に駆け出した。何回か斬り合った後翔が当麻の

剣を弾いた。

翔「これで終わりだな」

だが当麻の顔は笑っていた。

当「それはどうかな？」

当麻がそういうと世界が割れた。

翔「いったい何が！？」

当「いい悪夢^{ユメ}は見れたかよ？」

翔「幻術か！ あれはヤバイ間に合え！」

翔は当麻に幻術をかけられた事に気づき当麻を探したが、すでに当麻は魔力の収束に入っていた。翔も同じく魔力の収束に入っていた。

当「約束された勝利の剣^{エクスカリバー}！」

翔「炎牙大天衝！」

2人の斬撃がぶつかり巨大な爆発が2人を包んだ。

そして爆煙がはれると2人は倒れていた。

当「ハアハアハア、もうダメ。魔力も体力も限界」

翔「ハアハアハア、俺もまだまだ修行が足りないな」

ス「2人とも大丈夫か？」

当「春雨、トレミーが来るまで？後どのくらい？」

春『残り2、3分ぐらいだな』

翔「もう行くのか？」

当「ああ、迎えが来るみたいだからな」

翔「そうか、また会えるか？」

当「わからない。今回は事故だからな」

翔「そうか、また会いたいな。そして今度は」

当「ああ、また会えたら今度こそ決着をつけよう」

翔「そうか、またな」

当「ああ、またな」

そついうと当麻の隣に扉が現れ当麻はその扉を開けるとそのまま帰って行った。

翔「また会いたいな」

ゼ『願えば叶うだろ』

翔「そうだろうな」

テ「兄さーん、ご飯だよってなんでそんなにボロボロなの!？」

翔「ん、新しい友達と模擬戦をしてただけだよ」

テ「兄さんをここまでボロボロにするなんてどれだけ強いんだろう？
会ってみたいな」

翔「まあ、遠いところに住んでるから今度何時会えるか分からないけど

いつかは会えるさ」

ゼ『ああ、そうだろうな』

そういうと翔達は別荘を出て家に帰って行った。

新たな親友（ライバル）（後書き）

当麻「どうしたんだ？ そんなふちっこで体操座りして」

なんとか書けたんだけど全くって言っていていいほど翔の強さを表せてない。

当麻「まあ、あまり戦隊物を知らないんだから仕方ないだろう？」

ユウヤ「そうだって。第一作者が知ってるのはデカレン、ゲキレン、ゴークイ
のストーリーをチラツとしか覚えてなかったんだから」

Wikiで調べたかったのにあまり生かせなかった。紅の牙先生
もしこれがだめだったら消しますので感想ください。ほんとうに翔
の強さを表現できなくてすみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0836s/>

魔法少女リリカルなのは～とある転生者の戦闘記録～

2011年9月22日18時26分発行